

同窓生第一期（大正三年から大正一〇年まで）

針塚先生の慧眼とパイオニア精神

（大、三、蚕） 蒲生俊興

針塚先生は実に近代稀に見る忠君愛国の士であられ、専門学校における先生の教育方針としては、常に国体觀念の顯揚に不断的の努力を払われた。そして平素学校長としての学生教育の標識は凡そ次のような事柄に重点を置いて率先躬行せられたのである。

一 進んで難局に当り、身を挺して事に従うことを教えられた。
二 労働の神聖を尊ばれ、青年の熱汗は当に老後に拭うべきことを諭された。

三 特に武道（柔剣道）を奨励せられ、身心の鍛錬に留意せられた。

四 生命は活動にして存在なることを説かれ、日夜教える子の身上のために努力された。

五 常に「百忍図成」の精神をもって子弟の教養に当られた。
六 毅然たる不羈独立の精神を尊び、あくまで依頼心を戒められた。

七 學術の振興に意を注ぎ常に教官の研究と学生の実験實習に重点をおかれた。

従つて当時の学生の間には、いつとはなしに極めて真摯なる雰囲気の中に、潑刺進取の校風が醸成せられ、特に柔道部の如きは全国高工對抗戦において三年連覇を遂げたほどであった。かくして開校以来親しく先生の薫陶を受けた数千の学徒は、皆針塚精神即ち上田魂を体して官公界・実業界・教育界又は学界等において先生の高德と教訓とを敬慕体得し、母校の名を汚さぬように奮勵したのである。

又先生は実業学務局第一・二課長並びに文部省視学官御在任当時より夙に実業教育の先覚者として当時（明治の末期）の文部上局を輔翼し、現今におけるわが国の実業教育の振興基盤は一に先生の卓見に俟つものが多かったと考えられている。尙平素学生に學術技芸を授くるにも、常に業界の将来を看透して先手を打ち、まづ教官を激励して新進の研究に没頭せしめ、更に進んで積極的に業界をも指導し、早くも今日の所謂産学協同の実を挙げしめたことは、誠に先生の慧眼遠見といわねばならない。

当時蚕糸業に関する高等教育機関としては農商務省の管轄下に東京・京都両蚕業講習所（大正の三・四年に文部省に移管されて東京・京都の高等蚕糸学校となった）があったが、先生は初めて文部省に誕生した蚕糸業に関する高等専門学校の校長として赴任せられたのであるから、所謂開拓者（パイオニヤ）精神を遺

憾なく發揮され、開校当時の元氣溢るる新進の教授諸公を相手に、從來蚕糸業の構造要因となつてゐる栽桑、養蚕、製糸等各般の研究施設の完成を期したばかりでなく、本校が率先して絹纖維の紡績から機械に亘る専門教育の必要を力説せられ、石倉新十郎教授を聘して初めて絹糸紡績科の新設を見るに至つたことも、先生の遠見といわねばならぬ。

更に蚕糸の劃期的發展は蚕糸化学の研究による絹糸の質的改善に如くはないと考えられ、井上柳梧・川瀬惣次郎の両教授により繭解舒の研究・絹纖維の化学的組成等を究明し、蚕糸改善の基礎を作られた。又大森教授の蚕体病理学の研究を助成し、微粒子病、膿病、軟化病、硬化病等の病原体並びに消毒法に関する劃期的研究成績を公表せられた。尙遠藤保太郎教授の栽桑及び桑樹病理学の研究を助成してこれを完成せしめ、又三谷徹教授の製糸論、高橋清七先生の桑桑育による経済的育蚕法の研究を激励し、共に業界の木鐸たらしめたことも特筆に値する。

尙製糸技術の改善向上のためにはその基礎知識たる機械工学の教育に重きを置くの必要を看破せられ、開校早々大滝昭太郎教授による材料強弱学等を重視せられたことは、やがて本校卒業業者中、自動線系機その他の製糸機械について多数の発明考案者を輩出せしめた近因をなすものと考えられている。

尙ここに特筆せねばならぬ一事は、針塚先生が早くも本校において天然絹糸の強敵視されたる人造絹糸の研究をも行なう必要あるを認め、大正の初期朝比奈晃十教授をしてヴィスコース人絹の

製造機械を敷設せしめたことは、わが国の学界及び業界を通じて嚆矢とせられてゐることであり、その後本校における施設に範をとつて人絹製造会社が創立を見るに至り、又本校製糸科卒業生の故加美好男(糸三)君(後の新興人絹株式会社取締役技師長)が本校に於て昭和の初頭ステープル・ファイバー(スフ)の製造を完成し、日東紡績や新興人絹株式会社等をして、これが工業化を促進せしめたことなど、何れも針塚先生の慧眼によるものと考えられる。

先生が明治四十三年八月上田蚕糸専門学校長に任命せられ時は年齢僅かに三十八才という働き盛り、当時小県蚕業学校長の三吉米熊先生が本校教授を兼ね、いつも針塚先生の相談相手となつていられた。昭和十三年三月先生が学校長を退任せられるまで、二十八年間という長い間、初代校長の重任を果たされたばかりでなく、学校の運営並びに施設の拡充上前記の如き非凡なる足跡を遺されたことは、勿論先生御自身の蚕糸教育に関する博識と慧眼とに基づくものであることは申すまでもないが、この長期間常に先生を補佐せられた前掲の諸先生の外に、われ等の念頭を去らない先生方のうちには、法制経済の阿形輝司先生、語学の和田仙太郎先生、数学・物理・氣象学の築地宣雄・原田親雄両先生、倫理の新築金橘先生・養蚕生理の勝木喜薫及び水井寿一郎の両先生、蚕糸経済の早川直瀬先生、栽桑及び遺伝学の田中長三郎先生、栽桑学の北島先生、蚕体病理学の佐藤利一先生、遺伝学の佐藤春太郎先生、製糸学の藤崎卓爾・下田稔両先生、機械の平本常三郎先生、養蚕の

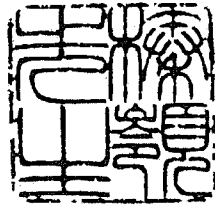
宮島徳一郎先生等々があり、針塚先生がいつもこれらの先生方に對し感謝の氣持を表明していられたことは、去る年母校創立二十五周年記念事業の一端として、先生の肖像建設の議が起つた時、「自分の今日あるは決して自分一人の力ではなく、多くの有能なる先生方の奮勵努力の結果であるから、自分は銅像などに全く値しない」と申して居られたことでもわかると思う。

私は明治四十四年四月十七日の本校開校以來の門弟として永く先生に私淑したばかりでなく、大正十二年故松村教授の後任として母校に歸つて以來、同窓会又は千曲会の幹部として永い間公私共に御世話様になった一人で、一番わがままもいえた關係だった。先生が極めて謹嚴実直で能動的であられたのは、御嚴父の家庭教育の賜物でもあるが、先生は至って義俠的な慈愛をもつて多くの薄幸者を援助せられると同時に、他面には極めて円満潤達な大度量を以て清濁併せ呑むの概を有つて居られた。先生はまことに博覽強記で暗記力が強く、柔道に堪能なばかりでなく、学生時代からマラソンの選手であられたので、歩行も至つて速く、アルプス登山の御伴をした時も、先生と一緒に歩くことはとてもできない位ビッチが速かった。先生はなかなか多趣味で榛嶺と号され、書道は極めて達筆であられたばかりでなく、晩年には正村竹亭先生を招いて南画の御稽古をもなさつてなかなか堂に入られた。又芋兵衛と称されて、狂歌や俳句、短歌にもなかなか堪能であられ、校内職員有志と共に羽衣会を作られて觀世流の謡曲にも長じていられた。

先生がかくも赫々たる御功績をあとに昭和十三年御退官遊ばされた時の御挨拶の中に、「自分がこんなに長く勤務するようになった理由の一つは創業の時代に全校一致して努力した家庭的な平和な雰囲気居心地をよくして戴いたこと、いま一つの理由は本校が日本で初めての蚕糸専門学校だったので、創立設計が余りにも杜撰不合理だったので、多数の先生方の御力を借りて、せめて世間並みの専門学校の規模にまで築き上げようとし驚鈍に鞭打つて来たため、何年経つても創立氣分が抜けず不知不識の間に永引いた」と謙遜して居られた。

針塚先生去られて、第二代井上校長となられ、纖維専門と改称せられ、第三代伊藤校長時代に信州大学纖維学部昇格して創立五十余年を閱みし、益々拡充強化の氣運にあることは偏えに初代針塚校長の慧眼と偉大なるバイオニヤ精神が確固たる礎石を形作つて居られたためと思考し、如何ばかり讃辭を呈するも尙足らざるの憾みある次第である。

(信州大学名誉教授 農學博士)



文 曰

追想 榛嶺先生

咲 育 作

(大、三、糸) 伊 藤 競

はじめて見た新校舎 蚕糸業の最も盛んな信州、春蚕種製造の最も盛んな上田、この地に新業の専門学校が創設されたとのこと。まだ海も東京も知らぬ迂生、中学を卒えたばかりの野心にもえて、この入学受験を志したのだ。五倍の志願者というに驚いたが、マ、よと当てなしに上田に来て、先ず眼についた松尾町中程東角の「馬場孝」という旅館に入った。同窓の四名が同宿である。二日間の試験には蚕業学校の養蚕室が使用された。口頭試問も済んだので、たとえ駄目でも新校舎位は見えて帰らんものと、街の人人に聞きながら常人の町はずれを辿った。弥津街道の北側一帯、鉄条網に囲まれた畑中に一きわ高く本館が建っているが、その外は、後方に二、三の平屋建と便所があるばかり、養蚕室は建築中である。本館は中央の一段高い鱗葎のスレート屋根が夕陽に映えてなかなか立派で貫録を示している。迂生は感心した。他にも見に来た受験生が数名居た。「こんな堂々たる校舎ならモウ少し勉

強してくればよかった……」と笑う声が聞かれた。迂生も同感で、上田の再訪はいつの日かとあきらめて帰ったのであった。

はじめての登校 上田への再来が叶った。製糸科に入学出来たのだ。松本の北方五里の片田舎、百姓の小せがれが日本唯一の

蚕糸専門校の学生となったというほこりに、夢のような喜びを抱いて、また馬場孝に落ちついた。その夜はじめて、同宿の未知の新学生の来訪を受けて挨拶を交わし、名刺を貰った。専門学校の学生ともなれば名刺が必要になるものかと気付いた。これが現在の母校名誉教授蒲生俊興君で、当時秋山姓を名乗っておられた。旅館での眼覚めは早く朝食も勿々、高鳴る胸を張って意気洋洋と学校へ初の歩みを向けた。本館裏の控室に待つこと暫し、やがて背丈低く金ふち眼鏡の係員らしきが見えて(後日阿形教授なりしを知る)二階の講堂に集合といわれた。

始業式 約百名の新入学生、その倍数程の遠近の名士来賓、

学校の先生方、席が定まるや当時三十九才の針塚校長がツカツカと壇上にのぼられた。訓辞のなかで「諸氏は既に紳士である。自重して……」といわれた言葉が印象に残っている。新入生の総代として秋山俊興君(後の蒲生氏)の答辞に、玄関前の三枝に岐れた赤松(数年にして枯死)を例にとつての挨拶も気が利いていた。式の翌日、本館の玄関前に集合という。そして各自に鉢が一丁宛渡されて、路を隔てた畑に桑苗を植えるわけである(後で知った故勝木教授指揮)。農校出は平気の様子なれど他の者は相当面喰う。桑苗の根を浅間山の方向に伸ばしてとの指図、それでも四、

五日程で完了した。

海軍記念日の針塚先生

五月下旬の海軍記念日に学生一同講堂で校長のお話をきかされた。これが校長に接した二度目である。先生は壇上の講演は余りうまうまはないが、座談式で傍に飾られた松の盆栽を山にたとえて、艦砲射撃のことに続いて戦死された将兵の話に及んだ時、先生は感にたえられないらしく、本当に落涙されて握りこぶしで拭われ、暫し言葉を断たれた。ここに学生は初めて先生の赤裸々で多感な心情に接して、深い感銘を受け、その人格に打たれて、果てはお慕い申す気持さえ湧き起った。

先生のお宅訪問

学校へ提出する誓約書は、保証人として各自に先生を依頼することに定められた。私的縁故のない多くの学生は夫々に教授の先生に保証を頼んだ。迂生は科長の三谷教授にお願いした。こんな関係からか、学生の先生訪問が大分行われた。特に校長先生のお宅は次から次へと学生の訪れが絶えなかった様子で、迂生なども数名つれ立って数回のお邪魔をしている。甘いお菓子を供せられて座談の巧みな先生は、よく独逸学生の事など語られ、その都度何か必ず啓発されて辞したものであった。

校歌

校歌が未だ学校にない。六月頃か校歌の募集が発表された。応募数二十ばかり、迂生も出したが適当のものが無いとのことで、結局東大文科の上田萬年博士に歌詞を、作曲は東京音楽学校に依頼されて、出来たのが現在の校歌である。その校歌の練習には上田中学（現上田高校）の音楽教師が来校されて二回程習ったと記憶する。その際はじめて見た美しい指揮棒、今も眼底に

それが残っている。

明治天皇御大葬の当夜

明治四十五年七月、全国民哀愁のうちに明治天皇が崩御された。秋十月青山練兵場（神宮外苑）で御大葬。校長は葬儀参列のため上京し、阿形教授が代表で遙拜式が行なわれた。深夜の講堂は蠟燭がともされ寂として音もなく、御発聲の時刻を期して弔詞が読まれ、続いて下賜されている教育勅語に署名の明治天皇の御筆蹟を、一人死進み出て最敬礼のうえ、これを拝するのだ。ゆらぐ淡い灯火の下、敬虔な各自の態度、夜のしじまを破るは時々咳あるのみ。二時間を要した式の終了は、午前一時に近かった。阿形先生の幾度と繰返された「恐惶頓首頓首」のうち沈んだひびきが、猶耳の奥に残っている。

開校式

三学年の学生全部揃った大正二年十月、開校式が挙行された。東京の装飾会社とやらによって、雨天体操場の四囲は勿論、天井まで全部が紅白の幕で張りめぐられて、驚くばかりの式場は、小松原文相を初めとし来賓・学生で満たされた。迂生には式の次第の記憶はないが、演壇背後に立てられた屏風だけが脳裏にこびりついていいる。上田町ではお祝いに地元の「常田獅子」を出してくれた。夜になって、式場跡では東京から永田錦心一行を呼んで、薩摩琵琶の余興、町内では学生を主に市民が合流して提灯行列だ。その先頭は製糸三年で組織した六名の音楽隊だったが、迂生もそのうちの一人で、楽器を上田小学校から借用した。指揮者は同校の松平先生（松平忠久代議士の養父）、行列の際にはクラリネットを受持って頂いた。曲は「遼陽城頭夜は更けて」の軍歌、

夢中で町内をねり歩いた。

翌日から三日間校内開放、諸設備や各クラスの意匠などを一般に参観させた。製糸三年の飾りもの、蚕糸大黒と生糸を手にした立美人、その背景(二メートル半×四メートル半)の富岳は洋画風に迂生が画いた。農舎の壁に張って三日程を費やした朝食前の仕事だった。控所の売店で食った田楽里芋の味今も忘れ得ぬ。

卒業アルバム編纂 養蚕、製糸と科は異つても、上級生のなまきまそんな意識は極めて淡く、互いに親しくして卒業期を迎えた。記念アルバム編纂の議が起つたのが一月頃か。両科から三名宛の委員が出た。迂生もその一人、平素の大なまけ者にとつてはこれを学業サボリの口実となし得たのだ。かつて迂生は神戸高商のアルバムを見たことがあり、両科共通の写真は、その記憶を想起して協議選定した。校長はまだお若く(四十二才位か)勅任官でないため、胸一杯の金ピカ大礼服姿は得るに由なく、残念ながら燕尾服の撮影をお願いした。三年間に変つた文部大臣牧野伸顯、小松原英太郎、奥田義人の三氏の写真は、校長を煩わして借用したが、牧野氏のものには台紙の裏に、「呈伊藤君」の署名があつたので、これは迂生が貰いうけて未だに保存してある。その他の写真の撮影入手等はすべて何れも皆校費でまかつて頂いた。講義をサボリ写真機を担いで校内を歩き廻つたことも一再ならず、小牧山へ登って学校を撮影したこともある。先生・学生各自の写真は並べて両端の分は、必ず向き合うように方向を指定して写してある(大石写真館)。校長の題字「奮庸熙載」は新樂先生の撰で

あり、序文は製糸科の小穴潤一郎君の作で、末尾には委員の挨拶や撮影の翌日焼失した繰糸工場の事も記してある。アルバム製作は東京をよく知っている清宮保君が上京して小川写真堂に注文した。先生方にも皆一部宛買つて頂いた。卒業の際、アルバム委員への寸志Yシャツ一枚宛、本当に寸志だがありがたく頂いた。

校長先生の印象の断片 歩行のお姿は少しくワニ足で、手の甲を前方に向けて振られる両手は、人並以上に肉体を離れ、肩の張り胸の張り、またたきのやや多い眼で前方を直視するお姿は極めて健康そうに見受けられて、学生のこれを見習う者が相当あつた様子。若い教授連にもすすめられたと言われる謡曲を、いつ頃からか習われて居り、勅語の捧読の最初の出が謡曲の調子であつたこと、平素の声調も太い方で、莊重味を持って居られた。卒業時の謝恩会を公園の明倫堂でやった際、先生の「デカンショ」のうたいぶりが耳底に残っている。夏期の工場実習の間には必ず学生の出張先を一巡された。迂生など富岡、名古屋で先生の来訪を全く肉親に接する心地して迎えたものだ。

卒業 いよいよ卒業の年だ。難物の有機化学の受験準備に二日間を与えられた。徹頭徹尾わからないので、あきらめて勉強を放擲した。丁度東都から友人の来遊をいいことにして、ところが得点の発表を見ると迂生十六点(満点百点)、それでも自負は持っていた。鉢巻姿で勉強しても、十点、五点という者があつたからだ。繰糸実習を重視して満点三百点とか、迂生の頂いた点数は三十点だ。これでは迂生の卒業順位が四十名中三十五番は無理がな

い。然しまだ下位があるのに驚いた。製糸科一番の栄冠は有賀文雄君に帰した。上級がないので卒業証書の番号即成績順なのだ。

上田の住居十年

在学中の三年間を笠原製糸経営の大宮社前にある味噌醤油店二階で暮らした（蓄音器で覚えた浪曲をやつて以来悪童共に醬油軒味噌丸と云われた）。その関係もあって卒業と同時に、笠原製糸場（現笠原製糸株式会社上田工場）に勤めることになり、そこで十年を過ごした。この間度々母校に、お宅にと校長先生をお訪ねした。尚千曲会の創立にも参加して副理事長もさせられた。七年程経った時、横浜に出度く先生に頼んでおいたところ、先生知人の配慮を頂いたが、工場主の承認を得るに至らず、その件で深更迄もお邪魔したことがある。それから三年を経過して漸く大震災の翌年（大正十三年）夏、横浜に新興の生糸問屋に就職が叶った。これも先生の陰の御心配があり、更に笠原工場主の格別の援助により、相当のお土産物を持参できて面目を施し得た。このお土産の生糸が、時に盛衰はあったが、四十年に近い現在に至るまで、生糸街の片隅に職を失わず老骨迂生の生活を支持してくれている。ありがたいことである。

風俗画帖処分の件

上田へ出張の折、母校に先生をお訪ねした。談たまたま絵画のことに及んだ。先生「手許に小林永濯（永洗の父）肉筆の風俗画帖がある。知人に融通した金の代わりに預った品、今は子供の手前もあり、その処置に困却する。君、横浜に持参して処分して欲しい。百円が戻ればこちらは結構、その上をうまく売れ。」とのお話で、翌日届けられた。絹地著色、季節による

風俗十二面一揃、帖の仕立など最上のものであった。上田で直ちに希望者はあったが、利益分がないので横浜へ持ち帰った。丁度生糸街の知人の兄で、写真画報様のものの外交を業とする者が居た。世間知らずの迂生、その売却をそれに委託したのが大失敗で、騙取された結果の大債を負わされてしまった。終に彼は行方不明、弟は頼るに由なく、果ては先生の女婿、判事の中里龍氏を煩わさんとしたが、中華国に居られて思うに委せず、涙を吞んで断念の止むなきに至った。悄然と右の始末を報告し、迂生愛蔵の宮川香山作灰皿を菅笠の代償として贈呈、お許しを乞うた。「止むなし」の一言でお詫びが叶った。大欲は無欲に等しいとか、はじめて体験した粗末ぶり。

先生の胸像

先生還暦のお祝いに千曲会から記念として、先生の小型胸像を贈ることになり、迂生がその製作についての依頼を受けた。迂生同郷で美術学校出の鍍金家山本安曇氏に頼んで、三十センチ程のブロンズが用意された（製作費五十円？）。贈呈式は上田公会堂で行なわれ、先生の御家族が揃って出席されたように思う。贈呈の辞を迂生にやれと、突然の命令には本当に冷汗をかけた。先生の謝辞「今日のよき日を亡き両親に見て頂いたらどんなに喜んで……」と潜然と涙を流された。

先生の趣味

先生の御趣味の一端が、迂生などに解るようになったのは、迂生が謡曲をかじり、次いで篆刻をやり出した頃からである。先生は漢学については、かつて先生の養蚕学の著書に書かれた漢文での自序を拝見して、相当の造詣を持たれて居たこ

とを知ったが、特に「論語」は愛読書の一つであったようだ。また先生は常に毛筆を以て、巻紙を左手に手紙をものされた。なかなかの健筆で額や条幅に先生の筆蹟を所持の卒業生は相当あるかと思う。またいつ頃からか南画を習われて、迂生の画帖には蘭と竹の二面がある。雅号ははじめ刀漣、次いで榛嶺と改められた。刀剣の觀賞は大滝教授の勧めもあって大部熟を上げられた時があり、観世流の謡曲は相当長期に亘って習得されたらしく、迂生も一度合唱の記憶がある。仕舞、鼓は令閩の領域であったかと思われる。

先生愛好文辞の一端

浴乎沂 風乎舞雩 詠而歸

迂生が信州出張の途次、先生をお宅にお訪ねして、篆刻するに何かいい文句を教えてもらい度いとお頼みしたところ、即座に前記の文字を示され、その解説をなされた。迂生大いに気に入ってこれを篆刻し、日展に入選の榮を得た。ところが末の文句の篆刻が落選の悲運。改刻また改刻を重ね十年を経て、漸く今年書道展に入選した。先生揮毫の文辞も、右の文句が多いのではないか。

「詠而歸」は先生も関防印として、使用されていた。

煙雨模糊失遠青 扁舟繫在柳華汀

一葉春水漁翁夢 也伴間鷗而不醒

これは昭和十五年頃か、先生のお宅へ参上の折、床の間に掛けられてあった、佐藤一斉先生の草書条幅の詩文で、迂生には難読のところ、待って居たとばかりに、くり返し朗読されてその解釈に移られた。細雨にけぶった一条の流れ、小舟を柳下につないで、

釣をしつつ夢みる翁、温む水に鷗もまた眠りのままなる、長閑で平和な風物詩。翁即先生の如く、眼を細くしてまた、終りの部分を「……漁翁の夢、また間鷗を伴うて、二つながら醒めず」と、くり返された。迂生もこれに全く魅せられてしまった。当時、何とかしてこの全文を篆刻にと苦心したが、未熟で駄目、未だにそのままながら詩文だけはよく覚えていた。

迂生の知る限り、以上の外に「彫琢復朴」「莫如樹人」なども好きな文字らしく、特に後者は、教育者というお立場からか、お使用の款識印の一つに篆刻されていた。

前項に述べた迂生の大負債について、菅笠的代償の追加の意味も含めて、大小数個の印を作り、箱に収めてお贈りした。然し、余りに拙刻のためお使用にはならなかったのではないか。

附記

去る七月十四日、鈴木教吾さんの依頼があつて当市戸塚のお宅に、先生の長女梅子さんをお訪ねした。還暦を超えただれど猶母君を髣髴たらしめ、お孫さんを膝に、夫君間庭氏も同席されて、ありし日の父君を偲ばれ、尚、間庭氏と迂生と、共通の知人数名についての話題などもあつて、二時間に亘る快談を持ち得たことをうれしく思っている。

(長野県製糸協同組合横浜事務所長)

生死不二

(大、三、蚕) 矢沢茂登一

労働の洗礼

私は上田蚕糸専門学校の第一回生であるが、入学当時の校舎は本館と蚕室、製糸工場が建築されたのみで、尚工事中であり、入学式が済むと翌日から、桑園実習の名で駆り出され、桑園の造設作業が課せられた。未だ実習服が出来ぬので、思い通りの服装で、鉋や鶴嘴を握つての作業だった。農学校出の少数の学生の外は、鉋を持ち馴れぬ、中には生れて始めて持つ者もあったので、鉋を振り上げて、力まかせに大地に叩き込むという勇ましくも又乱暴なもので、農具の柄は折れ、手には肉刺が幾つも出来る始末で、一日の作業で伸びて終う者もあった。針塚先生も時に出て来て指導され鉋の持ち方使い方を、実演して下されたが、腰構え、手捌き、が堂に入ったもので、学生を驚嘆させた。

一町何段歩かの桑園の造設は、二日や三日では終るもので無い、「天地返し」と称する整地法をして苗木を植付けねばならぬ。この方法は、土地を七〇―八〇厘の深さに掘起し、表土と心地を転換する方法で畑仕事というよりも、一種の土木工事で、相当な重労働である。明けても暮れてもこの労役で、身も心も疲れ果てやがて嫌意の色が見えて来た。専門学校ともなれば、講義を筆記し、若干の実験実習をした後はスポーツや其の他の娯楽を楽しむという甘い考えは見事に打砕かれて、前途を懷疑し、不平を鳴

らす者も出て来た。然るに針塚先生を始め教授方は、創業の抱負と希望に燃え、陣頭に立って吾々を激励し、一寸の隙も見せない。建物の工事は夜を日に次いでつづけられ、槌音は勇ましく校内に響き渡り、その活氣溢るる雰囲気、吾々に倦意を許さないものがあって、働く・食う・眠るという幾日かを過ごすうちに、作業の成果が現われ、土黒々と耕された桑園が畦正しく植付けられて行った。そして働くことが旺盛な食慾と熟睡をもたらし、吾々の肉体をいやが上にも錬成して、労働に耐え得るに至り、働くことの尊さ喜びを体得し、自分の肉体に大なる自信が持てるようになった。入学早々先生が吾々に課せられたこの月余に亘る労働作業は、私の一生を通じて忘れ難い体験で、私共は肉体的にも精神的にも貴重な教訓を学び得たのである。

「元氣」と「努力」の耕馬 農場に二頭の耕馬が飼養され、

夫々「元氣」「努力」と名付けられた。針塚先生自らの御命名である。これは先生の人生に対する信条であり、学生指導の基本精神でもあったと窺われる。贅言する迄もないが、健全な肉体・精神から迸り出ずる情熱・元氣を以て、不撓不屈の努力を注ぐことを、男子の本領とせられ、処世の要諦とせられ、確信を以て門下生指導に当られたのである。確か千曲会館の客間に掲げてある「挺身従事」はこの精神を示されたものと思われる。

汝輩を滅せずんば草汝を滅すべし 桑園造設作業が終るか終らぬうちに、春蚕飼育実習が課せられた。この実習は夜間の作業があり相当な労役なので、閑暇が無い。折角造設した桑園の手

入れも怠り勝ちとなり、草茫々の有様となった。或る日蚕室の黒板に「汝草を滅せずんば 草汝を滅すべし」と針塚先生の達筆で大書してあった。このお言葉に衝戟され折からの炎暑を犯して除草にかかった。中には夜間に出動して、分担地域の除草をした者もあった。

柔道と針塚先生 二学期に入り本格的に講義が始まった。午後は実験実習であったが、生活に落着きが出て、スポーツや娯楽のゆとりも生じたので、控室を武道の道場に兼用し、四十畳敷の柔道場が開かれた。柔道をやる者は、色々の流派を交えて十四、五人居たが、有段者はなかった。私は委員を仰付けられて、御世話をすることになった。先生は講道館柔道の初段であったので、柔道には特に御熱心で、色々と施設上細かい行届いた御指導を頂いた。稽古着を着けられたことは少なかったが、只だ一度稽古の納会の時稽古衣を着け「五ノ形」を御演示下され堂に入った妙技を拝見したことがあった。やがて三段の斉藤良三郎先生を教師に囑託して、学生の訓練に当らせたが、お暇を見ては道場に来て、稽古振りを御覧になって奨励されたので、学生も熱心に稽古に励み、技量の上達も早かった。

寒稽古の納会には、料亭で酒宴を催し、交歓することが例になった。先生に御案内をすれば万障を排して御出席になり、学生と膝を交えて盛んに杯をかわし、学生の豪放振りを喜んで見て居られた。こんな場合の先生は、大親分という風格で、余り大きい体格ではなかったが、どうした訳か其の座では巨大に見えたことが印

象に残って居た。頃合を見て御帰りになる時には、窃かに私の手に大きな紙幣を握らせて「余り脱線せぬ様に」と御注意になって帰られた。学生の宴会の会費は、精々二、三円程度で、お決まりの徳利は、先生御帰りの時には底をついて居た。先生の御心づけて追加の徳利が運ばれ、歓声が湧き乱痴気騒ぎが、又盛り返すという有様で、柔道部の最も楽しい年中行事となった。

柔道部員が増加し、競技が行われるに連れ、メダル制定が要望され、若干の予算が計上された。其の図案について、先生の御意嚮を御伺いした処「柔能制剛の柔道精神か或は奮励努力を表徴するものが望ましい」とのお言葉であった。図案を専門家に頼めば、相当な経費を要し、予算が不足するので、自分で何とかせねばならず、先生のお氣持を満たす図案を作ることは、私には至難の業で、貧弱な頭を悩ました結果、右腕を力強く曲げて出来る隆々たる力瘤を図案化したものを描いて先生に御覧に入れたところ、幸いにも「これは良い」と御採択になり、周囲に「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という標語でも入れたらよかろうと、ギリシャ語の綴字を教えて下された。斯くして第一回のメダルが制定され、金・銀・銅の三種が作られ、当時私は金メダルを授与される光榮に浴したことは、忘れ難い感激である。私はこのメダルを時計の鎖につけて愛用し、秘蔵して居たが、終戦後朝鮮引揚げのドサクサ騒ぎに、何処へか紛失して終ったことは、実に残念である。あの図案はいつ迄用いられたのであるうか？先生により生れ、先生により哺くまれた母校の柔道部は、年と共に向上發展し、昭和十二年

から三カ年間東日本高農大会で優勝の栄冠を輝かすに至り、また昭和十四年から全国高等工業大会で三年連覇したことは、揺籃期を知って居る私には驚異的な事実で、随喜の涙で慶祝したものであった。其の時の先生のお喜びは実に察するに余りあるものがあつたと思う。今や柔道ブームは世界各国に起こり、来るべき東京オリンピックの競技種目にも加えられるに至つた。地下に隠せられる先生は嘸かし、御満足の笑みを湛えられて居られることと思う。

狭き門

私共は針塚先生の高遠な抱負と、崇高な理想の下に、先生の恩愛に懷かれて、三カ年の教育を受け、大正三年三月第一回卒業生としての榮譽と重き責務を担つて、校門を送り出された。然しそこには狭き門が待つて居た。当時の蚕糸業界は、東京、京都、両蚕業講習所の卒業生によって占拠せられ、新設校の卒業生の就職の門は狭かつた。この現象は養蚕科の卒業生に、より顯著であつた。この狭き門を広く開くために、針塚先生を始め諸先生方は、非常な努力をお払い下さつたお蔭で、卒業迄には大方就職口が決まつた。私どもも先生の心を休し第一回卒業生としての使命と責任とを自覚し、黙々として運命の開拓に挺身したのであつた。

君子は己を知る者の為に殉ず

先生は文部省視学官に在任なされた関係が、その御努力によって学校方面の就職が、比較的に多かつた。私も其の御蔭で推薦を頂き、栃木県立宇都宮農学校へ奉職することが出来た。学校は待遇も順当だったし、学問的の波も穏かで、他の級友に比べ、恵まれたものであつた。私はこれを感謝し身を挺して働いた。大過なく三年を勤め了えた時、突然先

生から御親書を頂いた。私を福島県立蚕業学校へ転任方の御勧誘であつた。これは私の昇進と同窓生発展の爲の先生の御恩情によるもので、感激の極みであつた。私は早速御思召しに従うことに決意し、時の農学校長に承認を願つたが、種々の事由の下に、快く聴き入れて下さらない。再三懇請した挙句は「君が強いて転任したいというのを無理に拒むことは出来ぬが、向後は君の学校の卒業生は採用せぬ」と言う切札を示され、私は進退いよいよ谷まつた。学校長の私を引止められるのは、私や針塚先生に対しての厚意に因るもので、決して他意のないことは私には十分了解出来るので、私は折角の針塚先生の御厚志を御辞退申すことに決意し、上田へ参つて真相を申上げた処、先生は「そうか、それがよい。君子は己を知る者の為に殉ず。それが人の道だ。」とあっさり御承知下され、私の挙措が人の道だと迄評されたのには恐縮したが、私にはうれしかった思い出の一つである。

渡鮮してから

私の転任を引止められた宇都宮農学校長は、不幸にも其の翌年急逝せられて、私は失意の底に沈んだ。それを察せられてか、間もなく針塚先生から、朝鮮行のお話があつた。私は年来海外へ行つて見たい希望もあり、教壇でも海外発展の必要を説き、教え子を十数人、マレー半島ジヨールの日本商社へゴム栽培に渡航させて居たので、自らも実践すべきを感じ、直ちに其の決心をした。幸いに新校長の承認も得て、大正八年四月あの「独立万歳」騒ぎの直後渡鮮した。当時の朝鮮蚕糸業は未だ揺籃期にあつたが、官公職にある内地人は、京都蚕講の卒業生であつ

て、京都の縄張り地域であった。上田出は私の同級の高橋善吾氏と朝鮮人の林漢竜・朴塘燮・金学仁(後に東晩と改名)の三氏のみだった。当時朝鮮総督府は蚕糸業に対し積極的な奨励に乗り出し、上田・東京・京都から多数の技術者を採用することになったのである。私の外八名の同窓生が、母校の半島進出の先陣を承った訳で、勇躍赴任したが、辞令を受けて見ると、判任官又は判任待遇官であるべき筈が、雇員の扱いで加俸がつかず、しかも現地採用だから、赴任旅費も支給されぬ有様で、啞然とした。これは朝鮮産業職員令という法令が公布さるべきの処、法制局の審議が遅れて居たからであって、早晚解決される問題であるとのことであった。この待遇に失望して辞令を返し、直ぐ帰国したものがあり、その他も一年経たないうちに内地に帰った者が多かった。

私は其の事情も判り、折角来たのだから、朝鮮の事情を少し研究してから帰ってもよいし、推薦して頂いた校長先生の御恩義に酬いねばならぬと考えて踏み止まり、原蚕種製造所の任務に就いた。「万歳騒ぎの後、総督始め本府地方庁の幹部に大更迭が行なわれ、私の勤務地慶尚北道の内務部長に、長野県警察部長の佐藤七太郎氏が来任した。部長は赴任後間もなく、私の在勤して居る原蚕種製造所へ初巡視に來られた。私が初対面の挨拶をすると、「矢沢君は君か、針塚校長は大変君のことを心配して居られた。待遇が話と違って悪いそうだが、そのうちに必ず好くしてやる、どうか我慢してやってくれ」と温情をこめて申され、随行して来た属僚には、針塚先生の人格や母校の施設の立派なことなど話された。

私は全く地獄に仏の気持で思わず眼頭が熱くなった。これは申す迄もなく針塚先生の温かいお心遣いと先生を敬仰して居られる佐藤部長の御誠意とによるもので有難き極みであった。私は佐藤部長の御言葉を承り、如何なる苦難があつてもこれに耐え、これを克服して朝鮮蚕糸業の為、母校卒業生の朝鮮への発展の為、朝鮮に踏み止って力闘せねばならぬと、固く誓ったのであった。佐藤部長は秋田県の御出身で、巨大な体格と豪放高潔な御性格で、其の後京幾道内務部長を経て、法学専門中学校長の栄職に就かる迄、針塚先生に代わった形で、同窓を御庇護・御引立て下され、私如き特に御愛顧を蒙ったが、病軀の為、御逝去なされたのは、吾々在鮮同窓にとっては、一大痛恨事であった。

このようにして発足した私の朝鮮生活は終戦迄約三十年に及んだのである。其の間先生は、絶えず在鮮同窓に御心を配られ、常に慰撫激励された。同窓も先生の御恩情に感激して共励互助、夫々責務の遂行に当った為、同窓の来鮮者は年と共に増加し、地歩も漸次向上発展して、終戦當時には十三道中七道の蚕糸主管は同窓の占むる所となり、製糸工場の工場長又は幹部たる者十数人を算し、発展の基盤が漸く定まるに至ったのであるが、敗戦によって万事休す、の悲運に陥ったことは、実に断腸の思いであった。私は終戦の年の年末に郷里に引揚げ、先生に手紙で御報告申上げた処、先生から直ちに私の在鮮活動を多とし、御恩情のあふれる慰撫激励の御親書を頂いて、大いに奮激して再起を期し第二の人生へ飛び込んだ。

生死不二

先生の御親書には先生の御近況を述べられて「自分^は生死不二の心境に在る」と現在の御心懷を述べられてあり、強く私の胸を打ち、直ちに馳せ参じて教をこい度く心がはやつたが、主人持ちとなった私の境涯は、自由が利かず忙がしい毎日を送って、在再時を移して居った処、先生の御訃報に接し、遂に御生前相接することが出来なかつたのは終生の恨事である。先生のこの御親書は、先生から頂いた最後のものであつて、かつて戴いて座右に掲げて居る一幅の御揮毫とこの御親書は、私に遺された貴重な御形見である。時々取出して拝読し先生を偲び自ら励まして居る。

先生が私に残された御言葉である「生死不二」の境地こそは私の第二の人生の最後の念願である。（元朝鮮総督府道技師）

御徳を偲びて

（大、三、蚕） 鶴 田 定 平

喜寿のお祝の折、送っていただいた先生の単身の御写真、あの特徴ある軽い咳払いと口調とで「君ドウダネその後は」「ああそうかそれは結構だね」など、今にも話しかけられそうなお姿を前にしてこのペンを走らせている。

第一回生の入学式 たしか、明治四十四年四月八日だったと記憶する。入学する者は勿論、先生方もさすがに随分の緊張振り

であつた。入学式場（本館中央の旧講堂）へ入る前、だれ云うともなく、遙か向うなる背丈けはやや低いが、ガッチリ肥つた一見孔子様（？）然たる頬からつづく長いアゴ鬚、眼鏡、フロック姿の立派な老教授（後で倫理学、漢学の先生と判る）を見出して、テッキリ校長だと決めてしまった。ところがナント開式早々「校長式辞」で颯爽と壇上に現われたのは、未だ四十そこそこの容姿端麗、元氣一ツパイの紳士、それが実に校長針塚先生であつたのである。而も極めて明快潑刺たる口調で「諸氏は……本校は……高等の学問と蚕糸の智識と技術を授ける文部省直轄全国唯一の……特に人格の陶冶向上に重点を置き、勤勉努力・質実剛健なる気性を……又諸氏には一人の先輩もない……本校の校風は実に諸氏の手によつて作られるのである」と云う風な、極めて力のこもつた訓示が述べられたのである。それは今尚耳朶に残り、限りない欣慕の情抑え難いものがある。げにこの精神の流れこそ千曲の清流と共に永遠に此の母校の校風を培養した本流ともなつたのではあるまいか。

脚絆橙笠姿で垂範

入学早々翌日から「学課ナシの開墾作業」を宣告され、毎日毎日明けても暮れても重労働約十日間ブツツツケには、九〇余名の若者たれ一人ヘコタレない者はなかつた。それは折角四百余名中からはるばる入学して居りながら、三日目頃に至り遂に耐えかねて逃げ去り、退学したもの二、三名を生じた事実でも判る。然し、こうしたスバルタ的教育で全学生の協同精神・克己力を先ず涵養してからと云うのが先生の基本方針であ

ったのである。為に先生は屢々学生同様檜笠・草鞋・脚絆の実習姿で圃場に現れて学生の中に加わり、或は談じ或は汗を拭いつゝ率先身を以て垂範すると言ふ風であつた。又は自筆で「今にして雑草を滅せざんば雑草汝を滅せむ」と言ふ様な警句を学生控場入口のボードに書かれては、心への鞭撻、激励をされたことも度々あつた。

先生命名のニックネーム あの時代にもニックネームが流行した。勿論ニックには愛嬌あるもの、親しみを増すもの、実態をよく表わすもの、馬鹿にしたもの、皮肉つたもの等々があつたことには、今と変わりは無い。丁度私の同郷山梨県からも一人入学した。それは畏友向山隆福君（後に東北大学に学び理学博士の学位を得て、名古屋高等工業学校教授になった俊才であつたが早逝された）であつたが、この向山君と私と二人だけが同時に校長針塚先生からそれぞれニックを買つたと云う次第である。前記のケースの何れに該当するかは問題ではないが、向山君は元氣号、小生は努力号と云うのであつた。実は当時の母校の農場には先生御自慢の愛馬二頭が飼われ、それぞれ元氣号・努力号と呼ばれた。故に学生間では善悪両面からの解釈が成立したらしかった。然しそんな解釈には全く無頓着な私達二人であつた。就中私としては実習には充分の確信があつたが一度基礎学科となると、程度の低い甲種農学校出では、正規五年制中学出の秀才揃いに相伍しての勉学は並大抵では逆もつゝいってゆけないことが判つた。従つてこのニックこそ私に対しては実に自戒激励の為の槌として、心からなる

有りがたさと喜びとを感じたものである。のみならず私は在学中はもとよりその後今日に至るまで社会生活五十余年の間屢々、**田一源**（田一源）と云う方程式を持出しては、親しき交友と共に反省し自重し通したものであつた。この方程式は恐らく今思出してくれる知友が多少あることと思われる。

先生は学生の訪問を喜んでくれた 松尾町の坂路を西に折れて左側門構えの見晴らしのよい台地の御住宅、御家庭の円満さは吾等学生でさえ充分感得出来るほどであり、子福者でもあつた。御部屋へ通されると必ずと云う位に、奥様まで同席され、四方山の話に花を咲かせ、種々快談の中にも、先生の御徳に浸ることを許されたものである。或る時先生が駒場の農科大学生時代、何でも某寺院で二、三の同僚と共に自炊生活した時のことを話してくれた。先生が柔道をなさつたことは（足の運び具合や手の握り方、腰の据つた歩き方などが目に浮ぶ）誰れでも知るところであつたが、また剣道にも可成りの腕を持つて居たらしい。ともかく或る夜あたり寝しずまる頃余勢興に乗じ、墓地深く裏山に突入し、日本刀の切れ味試さんと、密生する竹藪で太いのを片端からエイエイとなぎ倒して、そ知らぬ顔もつかの間、和尚様からキツイ御説法と云う話のすじであつた。悪戯にしては実に罪のない、胸のすく様な学生気質丸出しの話である。爾来先生はそれかあらぬ長ワキザシのニックネームで通つたとかであつた。卒直のところ先生の一举一動はどう見ても古武士そのものであつた。温情豊かな親分肌・清廉潔白・深慮断行・正義果断・犠牲も何のそのと云う

が如き徹底した風格の偉大な人であったと私は信ずる。此の風格はしらずしらずの間に脈々として、今ぞ数千同窓の魂深くにじみこんで、やがて所謂上田蚕糸の校風をも築きあげたものと信ずる。

先生書簡の一節 私は今こゝに先生からいただいた御手紙（封書）十数通を保存している。先生は吾々からの手紙に対して直ぐ毛筆で一々御返事を下さった。それが又簡明卒直達筆の走り書き（必ず膝の上で、左手で巻紙をまわしながら墨痕鮮やかに）であるから、真に爽快にして心からなる有りがたさを感じずには居られなかった。この御書簡は何れもが殆ど親展に属するもののみなので公表は遠慮せざるを得ないが、差支えないと思われる一通を紹介して先生の在りし日を偲ぶよすがに致し度いと思う。この書簡は御揮毫をお願いした私への思い出の御懇墨である。

拜啓先夜は御尊来下され（中略）その節御話有之候額面の件、甚拙筆御恥かしき次第ながら別封御送り申上げ候間御笑納被下度候尚先達の文句は左の通にて之れは管子の中の文句に御座候（後略）

三月二十四日（昭和八年）

長 太 郎

鶴 田 定 平 殿

明者視於無形 聡者聴於無声 謀者謀於未兆 慎者慎於未成 不困在於早慮 不窮在於早予

この名筆（画仙紙）は直ちに表装、爾来年々私の客間に輝いて永

久に私の一生を強く導く燈となってくれている。

（元長野県蚕糸課長）

寛容にして責任を重んぜられた

（大、三、蚕） 篠 田 平 三 郎

入学以前に先生を知る。先生が私が最初に知ったのは、明治四十三年八月であった。当時私は日本種苗株式会社附置の農事新報社編輯員（日給三十五銭）であった関係で、大日本農会主催の高等農業講習会が東京高等農業学校（現在東京農業大学）に開かれたので、それに出席受講した際、その最終日、『農業教育について』文部視学官針塚長太郎を聴講し、終了後先生の外、他の講師と共に記念撮影がされたが、実に御立派な紳士であると印象深いものがあつた。後日になって、かつて先生が農業教育視察のため、海外へ派遣された御方であつたと知って、私は先生に対する認識を深めたのであつた。まさかこの御方が、近い将来に、私共の師父になられる御方であらうなどとは、夢にも思わなかつたのである。

明治四十四年三月入学願書提出のとき、校長に先生の名を知り、入学式壇に、先生の御立派な姿を見上げたとき、言いしれない懐しさにひたり、何かしら先生と私との間には不思議な縁があるのではないかとさえ思われたのであつた。

寛容よく学生をゆるされた先生 入学当時、私は、校長はお

えらい御方で、到底学生等とは直接に接する等はありません。ものと思うておったが、それが偶発的に早くも一学年の春蚕実習の終期にやつて来たのである。それは、江森助手排斥事件の起こった際のことである。事件の主動者ではなかったが、松村季美、朝倉昇、原田兵衛、菅原勇治と篠田の五名が、交渉委員に選ばれて、校長と直接交渉することになり、先生を御宅に訪ねて事件の真相を申し上げ善処方をお願いし、交渉は数回行われた。先生はその都度、吾々をお叱りすることもなく、常に温容を以て接し下され、

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心とがな

天空任_レ鳥飛_一海闊委_レ魚躍_一大丈夫夫不_レ可_レ有_レ無_レ此度量_一

等の句を引用して吾々を説得されました。一方委員は、学生達の現状は「累卵の危き」に在る。速かに累卵を壊すことなく事件を平和に収めたい念願である旨を、声涙と共に申上げ、先生に一切の裁断をお委せして引きさがり、静観することとなった。その後二カ月ばかりして、先生の御尽力により、当人は榮転し、此の事件は平和裡に解決したのである。此の事件を通じ、先生の寛容心のまことに大なるものあることを知り、私は今日なお當時のことを想うものである。

親心を以て導かれた先生 第二学年一学期末(大、二、八)

学生有志の相談で「上田蚕糸学会」を創め、機関誌「蚕糸学雑誌」を編輯発行することになり、その第一号成り、愈々各方面へ配付すると云う間際に至り、学校当局から発行中止勧告がなされた。

その時私は入学前の経験で編集を受持たされた関係上直接の勧告を受け、一方発行責任者を引受けされた工藤文太郎講師にも重大な勧告がなされ、遂に発行を中止して、編輯に要した経費一切は学校が之を肩代わりし、表紙名を「蚕業調査書」と改めて刊行し落着いた事件があった。当時私共は、学校側の干渉を憤り頗る不満であったが、後日冷静になるに至って、このことは全く先生の親心からなされたものと悟り、先生へ御詫び申上げたことがあった。その時先生は笑いながら「学業の傍らあのような雑誌を発行することは、最初は意気込みが盛んであるからやれるが、永続はなかなか困難で、所謂三号雑誌に終つては困るばかりでなく、学校の名譽にも関係することであるから、工藤君も大分不満であったが、断乎中止させたのだ」と話されたことがあった。

折にふれ何かと導いて下された先生 大正三年六月私は就職

後始めて命ぜられた春蚕飼育の任を終った折、先生に対し私の分担した職務の内容や、体験したことがらに就いて報告申上げたところ、先生は早速に御手紙を下さいましたが、その中に今後留意すべき事柄を色々記され、殊に蚕を扱うには「身は親となり心は蚕の心を以てやれば必ず良い報いがある」と云う意味のことが記されてあった。此の言葉はその後の私の養蚕生活にどの位プラスになったか、誠に大なるものがあった。斯様に先生は折にふれ導いて下されたのであります。

大正四年八月のことと記憶している。たまたま松村季美君の来訪を受け誘われるまゝに、伊香保温泉に同行し、その帰途、思い

立ったまゝ、先生を郷里の生家に訪ねたことがあった。折悪しく先生は不在でしたので、御親父様に御会いし、御挨拶申し上げ辞したことがあった。其の後数日ならず、思いがけなく、先生から御礼状を頂いて恐縮したのであった。これは、僅かなことにでも世間の礼儀は缺いてはならないことを御示し下されたことと感激しました。

寛容の心いよく厚く深くなられた先生 昭和七年二月、當時の養蚕科第一学年生が、校長排斥を目的とし、科野神社傍の宿舍に、全員立てこもって同盟休校をなし、開校以来の不幸事件を起こしたことがあった。當時卒業生多数が拙宅に集まり、協議の結果、松村季美（蚕一）、鶴田定平（蚕一）、篠田の三人が卒業生代表

に選ばれ事件取捨に当たることになった。それで吾々三人は、意を決して、学生宿舍にいたり、私心を離れて交々、学生に対し母校を愛し校長を信頼し、速かに籠城を解いて登校し學業に励むよう説得に努めた。次いで、私共は、先生をその私宅に訪れ、吾々がこれまで明らかにし得た事件の真相と、吾々が学生に対して執った処置の内容とを詳細に申上げ、明日にでも学生等が登校するならば、その登校を認めていたふきたい旨をお願いし、併せて本事件発生に裏面関係のあった或る事項につき、曾って私共が、文部当局に極秘裡に陳情した内容を申上げて辞去したのである。幸いに事件は日ならずしてすらくと解決したのであるが、事件に対処し、私は先生の寛容心のいよく厚くなられ、その教育者としての偉大さに深く感銘したのであります。

教え子の家庭内のことにも温かいおもいやりをもたれた先生

大正七年九月長女の生まれた折のこと、私は名づけに困り、先生を私宅にお伺いして、名づけのことをお願いしましたところ、先生は、卒業生からの名付依頼は始めてだと大そう喜ばれ、即座に奉書紙をとり出されて、今は「秋気清し」の季節だから、これにちなみ「清子」と染筆を下されました。それから数日、先生は無難作の和服姿でおいでなされ、御祝の品を下されました。斯様に先生は、吾々の家庭にまで温かい思いやりをいだかれ、その庶民的な温情に深く感激しました。

責任者たるものの心得を身をもって教え下された先生 大正

六年春蚕末期の頃でした。組合原蚕種製造所（常盤城町島川林右衛門裏所在）附近に出火あり、私は蚕室傭人二名を残し、他を連れて消火応援に駆けつけた。略々消火したので、急ぎ帰所したところ、思いがけないことがあった。先生が蚕室の入口に机を出されて、見舞客の受付をなされて居られるとは。私は火事場の情況を説明し御礼を申上げようとしたところ、先生はそれを遮ぎり、きびしい口調で、「篠田君、責任者は斯様の際決して任所を離れてはならぬ。では後は君やりなさい」とお叱り下され、二三御話なされた後、安心された御様子で御帰宅なされました。私は此の時程、先生の厳たる態度と蕭しい語調とに接したことは、前にも後にも無いのである。斯様に先生が松尾町のお宅から遠い処にまで馳付け下され、臨機に御執り下されたことは、全く常に教え子の身の上を案じ居られ、機に臨み責任者たるものの心得

を、身を以って御教示下されたものであると、私は感激に堪えないのでありました。これにつけても曾って、母校製糸工場出火の折（大正三年一月の黄昏時の出来事で、現場へ最初に駆けつけた者は、その当時の東寮生であった）先生は逸速く駆けつけ、直ちに校長室に這入られて、臨機の処置を執られたのであるが、今更のように当時のことが想い起こさるのであります。

校長中の校長・校長らしい校長であられた先生 先生の御世話で、私は大正八年五月から、文部省実業学務局勤務に転じた。

当時多数の実業専門学校校長が次々と来省され、それぞれの局長と要件について色々と交渉されるのを、私は傍らにあつて目の当りみて、先生が真に「校長中の校長、校長らしい校長」であられたと感銘を深めたものである。

母校の充実発展殊に大学昇格に深く心身を致された先生 大

正九年は全国あちこちで、専門学校が大学昇格運動を起こして騒々しかった年であった。東京・京都両高蚕も烈しい運動をしたが、母校は誠に静かなもので、一部卒業生即ち横浜方面在任の連中は相当の運動を起こすべく、私を招いて内情を探り色々相談はしたが、別段のことも無く過ぎた。恐らく一般卒業生も学生も可なり不満であつたであらうと思われた。ところが先生は、内々で極めて熱心に昇格を要求し、その実現に一方ならない努力をなされたのである。その結果、局課では上田一校昇格と決め、その漏るゝを警戒しながら、昇格設置草案を作製するよう内命があつたので、私は先生へ極秘の親展書を送り、蚕糸大学昇格設置の内容に

関する参考案作製をお願いしたところ、日ならずして、先生から詳しい案が送られて来ました。私はこれを基に課長指示により、第一草案を作り、何時たりとも上司よりの要求に応じ得る用意をなしたことがあつた。これによつても、先生が常に昇格について綿密な配慮をなされて居られたことが偲ばれるのである。このことは母校でも一部のお方以外知られなかつた内秘の事項であつたと思われる。斯様に御苦心なされたにも拘らず、本省の最高方針により、具体化を見ずに終つたことは誠に遺憾であつた。

卒業生の茅屋へも喜んでおいでなされ一夜を語られた先生

大正十年秋の一日のことであつた。当時私は同期の原田兵衛君（農林省蚕糸課勤務）と雑司ヶ谷鬼子母神近くに隣合わせに居住していたが、折柄来省された先生に夕食を差上げたことから御来宅を願つたところ、快諾されたので、先生の御伴をして帰宅し、原田君と共にすぎ焼鍋で接待し、夜遅くまで師弟隔てなく談笑に時を過ごし、その夜は原田君宅にお泊りになり、翌朝お帰りなされたことがあつた。（その頃先生は上京の節は、青山高樹町の自宅にお宿りなされるのが例であつた。僅かに六・三の二間しかない小さな茅屋に、喜んで足を運ばれてお泊り下さるなど、そのまことに飾り気のない庶民的で厚い温情に溢れていた先生の温容は、今日なお私の心底に深く刻まれておるのであります。

敬神の念篤くあられた先生 昭和十三年四月、先生はその職を退かれ、任を井上先生に譲られた後、間もない頃と憶われるが、先生と井上先生とが共に神宮へ参拝なされたことがある。そ

の節は母校教授倉沢美徳（蚕二）君が随行され、三重県技師小野修二（蚕七）君が案内の主役を勤められて私もお供をしたことがあった。その年の秋か或は翌年の早春かに先生は亀山製糸株式会社の招きにより来県された折、神宮に正式参拝することとなり、

小野修二、白沢幹（蚕五）、橋本武光（蚕七）及び私の四人で案内役をつとめた。私も好機会であるので、同行参拝することになった。その節先生は参拝簿に正三位勲一等針塚長太郎と記されたので、宿衛の神官は驚かれ、附添の小野君等に、先生の身分について色々たずねられたのであった。神官の先導により外玉垣内に参入、次いで先生は内玉垣門際まで、私は鳥居と内玉垣内との中間まで、それ／＼参進し、神官の指示によって礼拝を致した。参拝終り私共は、先生を松阪市外西方十軒程の山室山に鎮まる本居宣長大人の奥津城を尋ねた。この奥津城は可なりの急坂の高い処に在ったが、先生は誠に御元気で始終一行の先頭を切ってお登りなされました。次いで強行ではあったが、同市東方十軒程の処に鎮座の、神官所管の神麻績機殿神社（かむおみはだの）と神服織機殿神社（かむはとりはだの）とを、たそがれ時に参拝しました。その折、先生は同社境内に自生していた「こぼのじゅずねのき」に目を注がれ、母校奉安殿側に移植したいとのことでは後日これを母校へ送付したことがあった。気候の関係上恐らく根つかずに終ったことと思われるが、若し根つき成長して居れば先生の篤き敬神の念を記念する貴重な一資料と思われるのであります。その日は、先生を拙宅に御案内し一泊していただきま

した。その節先生は二十年前名付け下さいました長女のことを記憶し居られて、色々とお尋ねありましたが、その先生のやさしい温かいお心に、私は深く感激しました。

一字と雖も忽せにせず推戴された先生 昭和十四年十二月、

先生から御手紙が突然に届いた。何事かと披けば、三重県蚕糸業功労者中山武平殿頌徳碑の碑文作製を依頼され、その文成り、先般先方へこれを送付したところ、その後碑文中一・二字訂正したき旨申送ったが、何等の返事も無いので、その事情を調べ何分の返書ありたい旨を申越されたものであった。その事情は別として、頌徳碑はその翌年津公園に建立されて、今日厳存しています。爾来私は此の公園を散策する毎に、その碑前に到り、先生が一字と雖も忽せにせず勞作された碑文と書とを仰ぎ、先生が慎重に専心推戴し居られたありし日の佛を偲ぶものであります。

噫呼、先生、みまかりなされて既に十余年を経ると雖も、その佛は胸中に深く刻まれ、その導き教えは脳裡に厚く滲みて、共に消ゆることなく生きています。私の書齋には何の飾りもないが、只先生のお写真のみを掲額して、朝夕在りし日の佛を偲びながら、先生の御高德を拝しています。

（元三重高等農林学校教授）

大らかな愛情と私の満州生活

(大、三、蚕) 湯川秀夫

蚕専開校当時の模様はかつて千曲時報一〇五号に蒲生俊興君が詳記している。同君・松村季美・原田兵衛君は私ども同級の尊敬すべき模範生であったが、それにひきかえ私は非模範生の横綱であった。

私の養家は因州池田藩の御典医で、養父も開業して居たが、日夜出入する病人を見て厭な商売だと思つて居た。中学卒業間近に養父は医専を勧めたが、私は一橋を志して居た。実兄も名古屋の商業校に勉強中であり、一年東京で英語力をつければ大丈夫と自惚れて居た。結局養父と衝突し、西ヶ原蚕業講習所を出た実父の勧めを助け舟と上田に出願し、合格不合格は別として、兎に角上京出来ればと考へて居た處、幸か不幸か合格した。

上田に行つて見て街は汚なく、道端には鉢が干してある始末でガッカリし、入学して見て講義は概して低俗、殊に勝木喜薫教授の養蚕学の講義は、鬼面人を嚇かすと云うか、全く人食つたもので、当初から強い反感を持つてしまった。

只大森順造・川瀬惣次郎・井上柳梧・田中長三郎先生等の講義は楽しかった。入学少々幻滅を感じ失望した私は、父兄に方向変換を相談したが、慰留されしむし学校に戻ったが、所詮好ましからぬ学生になつてしまった。同類項は波多野(千里)君だったと

思う。

肝心の学校には失望したが、信濃の自然と山国の人々が持つ強く素朴な愛情とに包まれ、結局は終生忘れ得ぬ信濃になった。こうした中途半端の中で、僅かに私の心を支えて下さったのは、針塚校長の大らかな愛情であつた。先生は心から学生を紳士として遇された。新年拝賀式のあと校長室で一緒にスルメで乾杯したことも楽しい思い出である。そして御家庭でも全く家族的に迎えて下さった。まだ若かつたお嬢様の梅子さん・百合ちゃん等々、沢山のお子達と一緒に目白のようにコタツにあたりいろいろのお話を聞くのが楽しみであつた。三年生になつて先生が上京されると、よく奥様から電話が掛けて来た。きまつてカルタ合戦である。その頃私達の仲間が連れ立って長唄の稽古に通い新樂先生に注意されたことがあるが、鹿爪らしく奥様の前で唸つたこともあつた。全くもつてノンビリしたよき時代ではあつた。

卒業の年の元旦の夜、先生はブラリと私の宿を訪ねて来られた。丁度宿の家族や長唄の仲間で三曲合奏をやつて居る最中で一寸面喰つた。「僕は下戸だから正月でも仕様がないう」と、それから鎌倉円覚寺の大哲釈宗演師に参禅した話から、延々二時間許り悟りについて語られた。この頃私はハムレット張りに *To be or not to be* と深刻な煩悶にとりつかれて居た。前年夏には童華寺に楊牛の墓・清見瀉の遺跡を訪ね、一層楊牛の美的生活論、ウエ

ルテルの悲哀に心酔し、又近松の戯曲・鏡花の作品に傾倒して、死も亦美しと言う思想に捉われて居た。結局私は生半可に悟る位なら寧ろ死を掴みますと答へ、先生は暗然として帰って行かれた。それから暫くして湯川は死にはせぬかと心配されて居ると松村季美君が話して居た。原因は知らぬが同級の宮川（寅之助）君が自殺したし、又この松村君も一時ひどいノイローゼになり、死を口走って行方不明になり、皆を心配させたことがあった。

卒業間近に新築金橋生徒課長より学校に残らぬかとのお話があり、私も改めて勉強して見度い気持もあって、助手を志望して帰郷した処、校長より郷里の蚕糸課に採用内定したから、主任技師に会えと電報を頂き、早速遠い夜道をわざわざ自宅に訪ねた処、「公務だから役所で話そう」と素気なく玄關払いを喰わされ、憤然としもう一生役人にはなるまいとそのまま上田に帰った。

大正十一年佐藤利一先生のお世話で、満鉄熊岳城農事試験場の養蚕科長に就任した。廿六才の時であった。関東庁にも蚕業試験場があり、熊農試でも大正三年以来蚕業の研究調査をやつて居た。大正の末頃私は「今後十七年を頂上として日本の蚕糸業は伊仏のあとを踏むべし」と言う假定に立って、将来原料確保のため積極的に満州に於て奨励する必要があるとの意見書を満鉄總裁に提出し、審議の結果重役会でも正式に決定を見て奨励に着手の矢先き、政友会の山本條太郎氏が満鉄總裁に就任するや中止を命ぜられた。私は自説を固執して論争を続け、一方進歩的経済学者は挙げて私

の方針を支持した。結局「天下の大満鉄が奨励することはさなきだに不況に悩んで居る日本の養蚕家に精神的脅威を与える虞れなしとせず、よつて姑らく之を見合わせ、特産物の柞蚕研究に主力を注ぐ」と言うことで妥結した。

農林省の明石弘課長は最初は私の案に賛成しながら、山條時代になると掌を返すように反対を申入れ、満州くんだりまで出て来た。ここでも官僚の姑息・無定見を味わった。然し私の右の方針は昭和二十年四月満州国立野蚕試験場官制が公布され、その中に（家蚕の研究も含む）の一項が入り甫めて確立したが、惜しい哉、その年水泡の如く満州国は消滅した。私は満鉄に十五年、満州国に十年近く終始一貫試験場に勤務したが、その間満鉄の上司松島鑑、満州国の岸信介・稻垣征夫の諸氏は、凡べて私の裁量に任せ思い切り働かせて呉れた。

又中国の砂漠対策は治水事業と共に数千年來の重大な宿題であるが、「蒙古桑」による防砂対策は非常によい実験成績を示し、現中共政府により実施に決定したと後日元大陸科学院々長志方益三博士より御通知に接した。兎に角処女地満州大陸は物も人も私にピッタリで、私は終始胸をふくらせて、愉快に専門の仕事に前後二十五年間従事することが出たのは、非常に仕合せなことであつた。満鉄時代に長男を米國に留学させたが之も大陸生活の御陰であつた。

先生は大正の末頃来満された。当時の卒業生は私と外一人、私

は十日余り先生の御視察に随行した。海城を通過の時先生は東方を黙拝されたが、ここで奥様の父君（陸軍少佐）が戦死されたそう。その遺児三人の姉弟が叔父（母君の弟）で、大学時代先生の親友だった方を頼って上京したが、その叔父も夭折したので、先生はその三人の世話を見、後に長姉が先生の奥様となり、妹さんが伊東胡蝶園に嫁していることなど物語られた。

当時の長春（後の新京）はロシア色濃い荒涼たる街で見る所もなく、二人で時間潰しに駅前の映画館に入り大笑した事も想い出である。奉天では奥様にトビギツネの襟巻を、私の家内にヒスイの指輪を買って下さった。拙宅では家内手料理のトロロ汁を喜ばれた。私もよく先生のお宅で蕎麦の御馳走になった。当時お宅の女中さんは手打ちの名人であつた。

又この旅行で先生が欧州に遊学中文部省の沢柳政太郎、松浦鎮次郎両視学官が外遊し、先生がマルセイユに出迎えた処、馬車屋に連れこまれて所謂実演を見物した話をされたが、後沢柳氏は京大総長・文部大臣を歴任した有名人であり、松浦氏も永く実業学務局長として令名あり、省内では針長・松鎮と呼ばれた名コンビであつたという。面白いエピソードと思う。その後先生は再び満州に見えたが、その頃は千曲会員も百人を超え、到る処で卒業生相集まり盛大な歓迎会を開いた。私も母校に講話を命ぜられ、毎年必ず内地に出張して一兩日駄弁を弄したものである。

在滿二十五年終始蚕桑の途を辿り千曲会の發展に微力を傾け得た事は、私の本懐とする処であるが、その根底の支えとなつたものは、学生時代より先生から注がれた大らかな愛情にひそかに報い奉らんとした私の微衷でもあつた。先生の様な師の如く父の如き方に接し得た事は実に好運な事であり、その機縁に限りなき感謝と悦びとを捧ぐる次第である。（元満州国野蚕試験場長）

汝雑草を滅せざれば雑草汝を滅せん

（大、三、蚕） 朝 倉 昇

明治四十四年創学當時は桑園の開拓初期であつた。当時養蚕科の学生は担当二坪位の桑畑を持たされていた。その桑園の出来栄が一片の人物評でもあつた。後年三重高等農林の栽桑主任教授となつた篠田平三郎兄（蚕一）の如きはゲートルばきで、熱心に作つていたから立派な出来であつた。その頃から栽桑の大家になる素質があつたのだろう。秀才組の原田兵衛・松村季美・秋山（蒲生）俊興・矢沢茂登一・宮城嘉貞という連中の畑の出来ばえは一寸記憶がないが、老生の担当区は針塚先生に御心配をかけた雑草組であつた。当時崇拜者も多かった若い駒場出の勝木喜薰先生の講義と実習の指導には老生は不満であつた。老生はこんな不満から上田三年間を通じ実習不熱心で、その方では劣等生であつた。担当桑園に繁茂した雑草に対し題目にかかげた先生の名教訓

となつたのである。この名文句は一生を通じて教えられることが極めて多い。

先生に最後の拝眉を得たのは昭和廿二年でおなくなりになる二年前の春であつた。長野県の佐久出身で、矢沢兄の友人である北村という人物が、終戦後の第一回選挙に出るというので、先生の推薦を戴きたいとのこと、その北村君を同伴して渋川にお伺い致した。清流に近く静かな、良いお邸であつた。食糧事情の悪い頃で、家の周りには南瓜その他を沢山お作りになっていた。半日御高話を拝聴し、北村君のお願いも快諾戴き、御手製のパンを御馳走になった。お話しではお嬢さんの婿さんが、御宅から毎日三時間有る汽車で、農林省に勤めておられるとのことであつた。又老生の長女明子の嫁ぎ先が先生の近くの村出身なので、何かの会合で、村から上京した縁戚の方々から先生のご帰里における御名声を聞く機会もあつた。

一寸上田時代の実習に不満をもらしたが、勝木先生の部下の助手に農業大学出の江森という先生がいた。この人物は、学生には不評であつた。この江森さんの退職を迫る運動が養蚕科の学生に起こつた。人もあろうに、その運動の代表者に、優等生組の原田・松村・矢沢・菅原の諸兄に、怠け者の老生が選ばれた。最後に松尾町の先生のお宅に、五人同道して退職を迫る嘆願に夜間お訪ねした。人情に厚い先生のこと、一人の職員を切ることは、よほど心に留つたようなご様子であつた。「とに角君たちの希望を充たしてやる」と云われて涙を流された。一同もむろん涙であつた。こ

のことがあつて、勝木先生から一層の不評を受けた様だつた。

大正三年長野県の取締所の吏員に採用された。数十名の同級生は七・八名を残して八カ月の勤務でクビになつた。老生は松本につとめ、島内村の川船さん（川船卓爾一糸一〇一君の父）、島立村の村山さんの奥さんにも親切にして戴いた。また、評判もよかつた。しかしやはり八カ月でクビになつた。やむをえず上京、他の学校に再入学も考えたが学資に乏しく、当時の長野県の白上學務課長（後の千葉知事・東京助役）にお願いして、井上蚕糸課長に依頼、その年の暮には佐久の取締所に再任された。所長は丸山俊一郎（蚕一）君の兄さんの西ヶ原出だつた。佐久の勤務は愉快であつた。対外的にも講演や座談会など大いに活動した。

それから大正四年の春には針塚先生が山口県の農業技手に推薦して下され赴任した。翌五年春には山口県の蚕糸行政上大きな改革があり、当時不評だつた蚕糸試験場には先進国の長野県立蚕業試験場松本支場長の平石氏を場長とし、老生が原種育主任、京都高蚕出の内海兄が試験主任となり陣容を一新して出発し、農学校養蚕科卒業の男性数十名を助手（前年までは女性の助手）に採用した。幸い蚕はよい出来ばえて、一化性の夏季飼育等まで出来た。

然しここにもいろいろ面白い事情があり、退職して郷里石川県の実家に若い妻をつれて帰国し秋蚕の手伝いや、田畑の仕事をしてしたが、何時までもそうして居るべきではないので先生に就職をお願いしたところ、坂田栄雄君（蚕二）がストライキで退職した富山県の農学校にお世話下された。赴任してみると、駒場

の実科を老生と同年卒の者が二級も上、また実科林学出の若い先生が上席という地位だ。地位はとに角、坂田君が退職のあとの半年ほどは不愉快な教師生活であった。幸い舎監を命ぜられ、後の二年は自分ながら名教師として生徒の信望もあった。これが後年の学校の卒業生を十数名朝鮮に就職せしめたことの縁であった。

しかし、教員間の不公平、それに対する不満は消えず、岐阜県大垣新設農学校に運動して赴任した。これは山口時代の知人だった校長が採用して呉れたのだったが、こゝでも校長と教頭間が不仲だったりして、教員間の融和が乱れて不愉快のことが多く、授業も十分出来ない三カ月を送った。ためにあっさり退陣して、京大に入ったわけである。

昭和十二年朝鮮総督府専売局長の現職で、石川県第二区から立候補退官した。この選挙には上田の同窓に非常な御厄介をかけ、終生感謝している。わずかの礼と思い、妻と妻の弟子声楽の谷田さんを同伴、石川県の音楽会の序に、上田に立寄り一タ、講堂で音楽会を催した。谷田さんはなかなか評判はよかったが「音楽講演の夕べ」との触れ込みだったので、老生が前座の経済講演をやった。当時は井上先生が校長だったが、針塚先生はまだ上田に御在任の時でわざわざ御出席の光栄を得て、愚論をもお耳に入れた。あとで朝倉君の話は堅すぎるとの御批判を頂いた。今は亡き先生のこの貴重な忠告がよく判りつつも、なかなか持って生れた性格で改められない心苦しさがある。しかし、ラジオ・テレビ・拡声機の時代、この教訓を活かして老生の話術は近來いくらか進歩し

た様な氣もする。しかし先生には御厄介のかけばなし、それというも老生は考えが単純で、熟慮を好まない欠陥があるからである。

(朝倉経済研究所長・司法保護司)

校長御転勤の新聞辞令

(大、三、蚕) 花岡 作 弥

昭和二年八月の暑い日、諏訪郡富士見の小川鉄道大臣の別荘で大臣に向かい半円形に座を占めた上田蚕糸専門学校同窓会の幹部十余名の中央で、陳情団の代表高木三治君(糸三)は

「私共は只今県議員の細川さんから御紹介いただきました上田蚕糸専門学校の卒業生であります。私が一同を代表致しまして御願いに参上致しました要領を申し上げます。昨日の朝日新聞に上田蚕糸専門学校校長針塚長太郎先生退任の記事がのって居ります。針塚校長は稀に見る高潔な人格者でありまして、職員・学生・卒業生はもとより、地方の業界・教育関係の人々も悉く敬仰する処であります。学校は創立以来日浅いのでありますが、先生の経営の手腕と御人格により、学校は目下著しい発展の途上にあります。この際針塚校長に去られましては、職員・学生・卒業生・地方業界の人々の失望は如何ばかりか、又国家の大きな損失であります。この際閣下の御力におすがりし更に何年か学校の基礎のかたまる迄現職に在らしめていただき度く、同窓会幹部一同参上した次第であります。長野県選出の代議士でおら

れ、長野県出身の唯一の大員であられる閣下におすがります以外に方策が無いので御座います。何卒我々一同の衷情をおくみ取り願ひ度う御座います」

と云う意味の事を極めて雄弁に極めて丁寧に申上げた。そして奉書に書いた一同の名簿を開いて差し出した。私は高木君の態度とその雄弁に実に敬服して聞き入って居たのであるが、小川さんは沈黙している。何と云われるだろうか一同は固唾を飲んで待っていた。おもむろに口を開いて「文部省の事は所管外で御座いますして私には何とも致しかねます」と云われ、目を名簿の方へ向けて居られる。一同沈黙十秒二十秒、どうする方法も無い。別荘に来る途中林の中に「午前中面会お断り小川平吉」と云う木札があった。一行の中にはまだ十一時前だ、今から行くのは失礼だ、と云う人も居たが、私は「こちらから面会を求めなければよい、別荘には涼しい座敷がある、その縁側をおかりして休ませて貰おう」と、皆を促がして来たのである。見れば座布団が積んであるので皆にくばり座敷に上る様すめて居たのだ。従って半円形に座を占めたが、私の位置は小川さんの斜め後方になっていた。高木君の差し出した名簿を見ればその最後尾に墨色うすく飯田支部長花岡作弥と書き加えてある。たれの発言も無い。このまゝ「左様で御座いますか、失礼しました」では、何に来たのか。然し所管外で何とも致しかねると云うのを押し様も無い。然し叱り飛ばされても損にはならない。そこで私は「先生暫くで御座いました」と云った。小川さんは「やあ暫くでしたね。今飯田でしたね。飯田支

部長か、今日は丁度徹も来て居ります。ゆっくり遊んでいって下さい」と云われた。名簿には教授とか技師とか官名は書いて無い、夫々名簿の肩書は同窓会の長野支部長とか上田支部長とか書いてある。何だかへんなものである。徹君と云うのは小川さんの甥で当時長男の一平氏（後に代議士に一回当選、現後楽園の専務）もまだ学生、その弟平二氏は幼少であったので、小川さんはこの徹君を非常に可愛がられ、選挙の時はいつも若手に対して采配を振り、又秘書の重要な役をしていた。私は「先生私は昨日出張先で新聞を見て驚き直ちに電車で辰野で先生にお目にかかろうと思いましたが、演説会後の宴会も終った後でお目にかかれませんでした。

それで今朝皆様と同行したわけです。話を聞けば上田では成沢市長始め非常に心配して居られる様です。新聞に依れば水野文部大臣が今晚こちらにお泊まりとのこと。所管外では御座いますようが、今晚先生から水野文部大臣に篤とお願ひしていただけませんか。関係者としても先生のお力にすぎるより外に方策がありません。小川さんは暫く考えて居られたが「そうですね水野さんは今晚こゝへ泊まられます。それでは私からお話を致しましょう。返事は」と考えて居られたが「明日郷友会大会がありますね、あなた出られますか」、私は上諏訪で聞くこの会合を忘れていた。「はい出席のつもりで居ります」と云うと、「それでは水野さんにも出席していただきますから、そこで直接お話を伺って下さい」と云われた。これで愁眉を開いたわけだ。厚く礼を述べ一同最敬礼をして退出した。駅で春日俊文氏等に会って上諏訪の布半

別館で二、三人と昼食をした。大言壮語組にもこの際敬意だけは必要である。同窓生一同は更に岡谷方面の業界有力者を歴訪した。

翌日上諏訪鶴鳴館の諏訪郷友会では、正座から最も目につきやすい位置に席を占めて、私は待つて居た。宴会が始まると小川さんは私を手で招いた。「この方が上田蚕糸専門学校の卒業生の代表の方です」と水野文相に紹介してくれたので、名刺を差し上げた。

文相は私に名刺を下さって「小川さんからお聞きしましたが皆様は大へん御心配をおかけしました様ですが、あれは全く新聞の間違いで根も葉も無いことですから御心配無く」と云われた。私は水野さんと小川さんに挨拶をして引き下った。こんな嬉しい事は無い。直ちに関係方面に通報した。「よかったね、新聞の間違いで。あれが実戦だったら君は金鵒勲章だね」なんて云うて来る同窓生も居た。八月の末私は愛媛県へ赴任するので、又母校を尋ねる機会も少ないと考え、学校を訪問した。校長室のドアをノックすると例の元気の良い声で「カムイン」と云う。私はその声を聞くに無性に嬉しく目頭が熱くなる様でした。戸を開けると校長は机に向って居られたが、ズカズカと私の所へ来られて堅く私の手を握り、「先日はありがとう、お陰で首がつながったよ」と云われた。私は「あれは全く新聞の間違いでした」と云うと「否ほんとうだったのだ。あれから局長が態々了解を得に来たよ、やはり小川さんは偉いね」と云われた。その晩蒲生君と近藤で御馳走になった。この事件は既に三十三年前の事である。同窓生の動いたこと、小川鉄相の尽力、水野文相の了解、何れも先生の御人格の

然らしめた結果であつたが、小川鉄相が初め所管外として受け付けなかった態度、又今晩私からお話をして置くが、直接文相に伺つて呉れと自分が出しゃばらない態度を示したこと、又文相が全く根も葉も無い新聞の誤りとしたこと等、今の政治家の多くが何でも俺がやつたと宣伝する票かせぎの態度とは著しい差があるではないか。

(元長野県南安曇郡北部農学校長)

生けるものへの慈しみ

(大、四、蚕) 倉 沢 美 徳

先生母校訣別のベルを東京で共に聞く 私は昭和三年一月、初めて一教職員としてこの母校へ御厄介になったのであるから、先生が御退職になる昭和十三年三月まで、丁度満十カ年間で、親しく先生の御薫陶を受けたことになる。十カ年の期間は必ずしも長くはないが、私は養蚕科卒業生の人事関係を担当して居たから、先生に対する接触度は公私共に比較的濃く、従つて格別の御恩顧を蒙つたし、ついに御愛顧に押れ随分我儘もして先生を苦しめたこともあつた。今にして思うとまことに汗顔の至りである。

先生と奇しき因縁として、最も印象に深く刻みこまれていることは、先生の上田に於ける学園生活の訣別のベルを、東京で先生と共に聴きつつ晩餐を共にしたことである。

私は先生のお伴をして校歌吹き込みに上京した。場所は日本橋

の鉄道会館だったと記憶するが、其所のコロムビア本社であった。校歌は既にコロムビア合唱団によって吹き込んであったが、今回は先生の前詞と加子三郎氏作詩の校友会歌の吹き込みであった。前詞は先生独特の例の調子ではじまる。

我が校の校歌は上田萬年先生の力作でありまして……われわれがこの校歌を声高く合唱する時に、自ら感激を禁じ得ないのであります

であって、此の數言の間に針塚精神を網羅する名文である。

吹込室で、最初中野忠晴氏によって校友会歌がレコードされ引き続き先生が、抑揚・調子・時間共上々で一回丈けでオーケーとなった。係りの人の云うのには、初めて吹き込みに立って一回丈けで完了する人は極めて稀有のことであると云う。私は、ハリ窓を透して先生の悠揚迫らざる態度を眺めやっていた。

やがて吹き込みを終り、社を辭し街頭に出て、なにげなく夕刊を買って見た所、先生御退職の報道が人事欄に出ているのがはつきりと私の眼に飛びこんで来た。私は喫驚りして早速此の夕刊をお目にかけたところ、先生は予ねて期して居られた御様子ではあったが、ジッと夕刊に眼をそそがれて領いて居られた。一旦此所で御訣れする予定であったが、急に予定を変更され、私をレーンボウグリルに引き具し、夕食の御馳走を下さった。心なしか平常より御言葉の数が少なかったような気がする。夕食は三十分許りで終ったが、此の間先生の御意中をめぐる感懷はどんなものであったろうか、私も退職して見て始めて先生の此の時の御心境が

判ったような気がする。

御訣れにあたって先生は「僕も漸く之で解放された、君と偶然にも東京で最後の晚餐を摂った事も奇縁だったね」と沁々とした調子で仰っしゃった御言葉が深く胸に焼きついて、御別れしてから急に別離の実感が胸にこみあげ眼險の熱くなるのを抑え難かった。

さて、先生の御行蹟や徳行については、同窓各位から沢山に讀えられることと思う。私は先生が特別に人と言わず動物と言わず又植物を問わず、生きとし生けるものを、悉く慈しみ且つ愛された深い愛情が良寛の夫れに似通うものがあるので、その一端を書いて見たいと思う。

先生と植物 先生の草木嗜好癖(?)は有名な話である。尤も学校には大瀧照太郎・遠藤保太郎・佐藤利一・佐藤春太郎先生等の同好の士が多士済々で一層拍車をかけた感があるが、学校創始当時の敷地は常田ヶ丘の無毛の野っ原であったが、学校建築と同時につぎつぎに沢山の樹木が植えつけられ、僅か十数年で学校は全く緑の学園と化し、専門学校中最も美しい学校のひとつと称えらるるに至ったのも、畢竟先生の嗜好に基いて、多彩な植樹がなされたおかげである。現在の樹は已に二世となったものもある。元校門前通り道端兩側の山桜並木など、四月花盛りの頃には上田の一名所となつて市人の杖を曳くものが絶えなかった。今も残っている本館前の彼の亭々たる樺の大木も、先生がかつて太郎山行の御りポケットにしのばせて持ち帰られたものだといふ。農場にあった山藤の大木も先生の丹青によるものの一つである。藤はしまい

には長さ十五間幅八間と云う大棚となり、花を見たり、農作業をするには頗る都合よかったが、戦時下物資不足の際は構築資材に手を焼いたものであった。

先生は植物を愛としまれただけに、樹木を伐ることは大嫌いであつた。農場の藤も万策尽きて遂に伐採の止むなきに至つたが、伐採前二、三年の維持費は先生のポケットから出て居たし、伐採後の大木も長いこと校長室に飾られて藤の臺を弔われた。

農場の野溜の上に立ち冠ぶさる柿の木を伐って居る最中に、先生に見とめられ大目玉を喰つたことがあつた。学生が登つて屋根を損ねてしかたがないから切つたのであるが、先生の理論は木を伐る前に学生を諭せ、屋根は出来るが、木は伐つては決して返らないと仰っしゃる。

ちなみに先生は柿が大好きで、柿は果物の王者として常に其の味覚を讃美されていた。校内に柿も沢山あるが、此等は悉く先生が遠方より取り寄せられたものである。

先生は御旅行の途路、行く先々で珍しい植物が目につくと、直ぐそれを学校へ送られた。満州旅行に際してさえ満州萩を持って帰られたが、之は満州ではどの程度観賞価値があつたかは知れないが、こっちでは繁殖猛烈で手に負えず、いつの間にか姿を没して了つた。

胡桃は今でこそこの地方の特産として有名であるが、まだ無名の四十年前に、校内に沢山植栽された。其の慧眼さには驚くの外はない。今はそのおかげで、生産としてばかりでなく、研究資料

として欠くべからざるものとなっている。

かくの如く、先生と校内の植物との連繫を数え来れば限りがない。どの植物といえども学校の歴史と先生の息吹きの通わないものは無いといつてよい。敢えて校内と言わず自然界にある一草一木に悉く先生の愛情が星のふるごとくに注がれたのである。

先生と動物 先生の大好きは又有名な話である。然し世の中の所謂愛犬家とはその趣を異にし、血統や風貌等世の云う毛並の良否は余り問題にされない。大と云う動物そのものを真から愛された。御出勤の後から蹊いて来た犬が校長室で頑張つて居る容姿を見ると、校長室にはまことにふさわしくないものもいた。おききすればいつの頃から先生のお宅に自然に居ついた野良犬であつた。先生のお宅には二、三匹の犬が飼われたこともあつたが、此等の犬は風来坊が多く、先生の門を叩くと、其の儘食にありつくことも出来たし、宿をかりることも出来たのである。先生は犬に対して、来るものは拒まず、去るものは追わず、であつた。先生は宴会の帰りによく犬の御馳走を包ませたものであるが、ソナ時でも、犬を忘れなかつたのである。先生は道端でどこかの犬を見つけても蹲まつて犬を愛された。恐い顔貌の持主でも忽ちに先生にはなついたものである。先生は猫もお好きでお宅で沢山飼われたこともあつた。その思い出話も沢山あるが、書き尽くせない。

先生は斯くの如く動植物共生あるものを大小美醜のへだたりなく悉く愛された。「生きものを愛し得る人は一様に善人である」と古諺は訓えているが、先生の善意は廣大無辺で、良寛の自然に流

露する愛情と一脈通するもののあることを思わずには居られない。人に対しても全く同様のことが言えると思う。悪い学生が出て来ても、決して之を棄てようとはしない。どこかにとり柄を見出して救出の側に立つ。背いた同僚部下に対しても、決して敵意を燃やさない。殆ど無抵抗とさえ見える。大森事件、勝木事件、若林庶務課長事件、等々、先生の王座をゆるがしかねない大きな問題が数々あったが、決してこれ等の人をにくまず、反って交りを深めた結果になった人もある。私は先生のこの不偏な愛情に頭を垂れ、その蹊を追うて一步でも近づかんとし、なし得ざりしことを恥じたのであった。

(元信州大学繊維学部教授)

人間針塚校長

(大、四、蚕) 戸倉 八 峰

「ベン・ハー」と校長 「ベン・ハー」の物語は小説に映画に永年限りなく全世界大衆の絶賛を浴び続けている。この物語は一武人ウォレス將軍が簡単に一本のブナの木の下に坐し、紫のインキで書いたと云う。ジュタ・ベン・ハーの人格演技が光っている。私もこの早春この映画を見て成程素晴らしい歴史画だと感心した。凡そ有名物語は何と云っても主役の役割を果たす人にある、他の例を引けば「アントニーとクレオパトラ」の歴史映画はヒロインのクレオパトラの絶世の美貌と才智があつてこそで、後

世の史家の許した通り、クレオパトラの鼻が今少し低かったら、後世の世界は別な歴史の方向に変わったかも知れぬ程、主役が絶対に光らねばならぬ。

今こゝで「ベン・ハー」と校長を並べたのは人間・校長に後記の様に偉大性を感じ、それでこそ今回の追想刊行録が立派なものに出来上ると云いたためである。

私に指定された原稿用紙六枚では纏まったものは書けないから私はホンの片鱗に触れた駄稿で御免を蒙る。即ち人間・針塚の裏街道を往く回想記事で御許し願いたい。

「4つ加えて、2で割る」人間・針塚校長 よく先生は座談に講話に御自身大学を出た直後の青年時代、乗馬で石狩平原を縦横に走らせた時の、その快調な高原風景を説かれた。学生よ一生を野望ある行路とせよと、クラーク博士のアンビシャス論を説かれた。

上州人の血を同じくした国定忠次の、義侠の赤き血潮が顔面に躍如として現われ、己れを無にして人に尽くし、正に男性的な行動は人を引きつける性格の持主であつたことも、争われぬ人格的事実であつた。

又温容にして弱きを助ける点、清水の次郎長の風格と相類似し、仁義の道を踏みしめられていたと思う。又一方高等教育者として正義を實踐躬行され、立派な人間校長哲学者であつたこと、新渡戸稲造校長に彷彿した点も見逃がす訳にはいかぬ。之れを総合的に一本化すれば、国定忠次・清水次郎長・新渡戸稲造と之れにクラ

イク博士を加え、この4を2で割った人格が即ち人間・針塚校長と申せば正解である。旧友佐藤良太郎（蚕二）は天下一品の毒舌家で人を人ともせず、人をホメる玉ではない悪玉ニックネーム佐藤悪太郎が、只一人針塚先生と云えば目を細くしてベタボメにほめちぎるのである。性格上に相通ずる所あるにせよ、私の正解を証明する挿話であらうと思う。

「寛容と忍耐」の先生　こゝで一ツ秘話を白状する。私は大正四年春卒業すると柄にもなく、中野の蚕業試験場へ助手拜命入場した。これは蚕品種改良界の偉才一代交雑種の主唱者外山亀太郎博士の指導を得て、種屋の小僧になるため二、三年の奉公が目的であった。さて其の後二年母校上田蚕専の実験遺伝学担当の名講師田中長三郎先生が、外遊研究を目途に辞任されたので、当試験場新進技手宇田一博士を上田へ引抜き作戦を、二、三の者と相談り工作を初めた。途中の経過は省くが、結局加賀山場長にバレて校長は痛烈に場長に油を絞られ、場長室から出て来られて面談した。校長からその時の話を承って申訳ないとな々陳謝したものが、校長は少しも怨みも小言もなく、母校への愛校の精神からのことだからと、寛容と忍耐とを以って我々に臨まれたので、恐縮と敬服の念を益々深めたのであった。

「若さと美貌」の持主　旧きを追想するに、入学時代所謂現在語のハイティーンの目から見た四十才の校長は堂々たる体躯で、正門からステッキ片手に徒歩で登校、守衛の敬礼に山高帽を少しく上げて答礼し、砂利石を踏んで玄関から上られる。その立派な花

道姿に目を見張ったものだ。而もその上、実に男らしき若さと美貌の相を備えて居られたのであった。古語に三十女と四十男に油断は禁物とか。その頃チラホラ花柳の巷から真偽不明の艶話も流れたとか、学生の耳のアンテナにも噂が感受されたが、あの男性美に虫が付かぬのが不思議だと上田町の六十才年輩者が云ったが、今六十の坂を越した吾々現在の感想も同一である。

「健啖家」針塚校長　以後大正・昭和と校長在職中、同窓会全国各支部の会合に出席し、卒業生の情況視察をされて、共に喜ばれたのだが、昭和十年頃かと思うが、静岡県へ来駕され、有志相談って一日弁天島海辺で浜遊びを共にされた。外海から漁船に積まれて帰港する鯉を見て御気嫌、小宴に鯉の大ブツ切りの野趣ある刺身を召し上がること、召し上がることに、鯉はブツ切りの生醬油に限ると通振りを披露され、その健啖振りと無邪気さに一同腹を抱えて興を湧かした記憶も、未だ生々しい数年前のことの様に思えるのである。嗚呼今は亡し。

（自営）

父の遺墨面に讃を頂く

（大、四、糸）　沖　濤　治

忘れえぬ人　最近新聞雑誌等に「忘れえぬ人」という記事がしばしば出ています。これを他の言葉でいえば、ことあるごとに、その人の面影が、頭に浮かびまた眼前にちらつくことであろう。僕にはたくさんの「忘れえぬ人々」のあるなかで、針塚校長先生

ほど忘れえぬ人は他にあるまい。

これは一体なぜだろうか、単に人一倍面倒をみていただいたというだけでなく、僕の性質や欠点をよく観察して、学校卒業後も不束な僕を慈愛をもって指導訓育して下さった親切な先生だったからだろう。このことについては僕の恥ざらしをしなければ分らないが、僕は学生時代講義のノートを克明にとつて、それをこつこつ勉強するということの出来ない性質で、頭は何時も他のことばかり考えて、ノートの字が誤字であろうと当字であろうと頓着なく、講義をぼんやり聞いていたので、勉強も出来ず、自然学業成績は悪く恥ずかしいことであった。そういうことが一つの原因だったかも知れないが、僕の文章には誤字や当字が非常に多く、後でこれを発見した時に汗顔することばかりである。学校卒業後丁度一年半ばかり経った横浜生糸検査所の時代だった。ある時お手紙を差上げた処例の通り早速御返事を頂いた。其の封書の内在先日差し上げた僕の手紙が同封してあり、其の手紙の中の誤字や当字を朱で訂正し、そしてお手紙の中にただ簡単に「手紙は其の人の性格すなわち人と為りが判断せられる材料の一つになるものだから、誤字や当字はよく注意するように」との意味が書いてあった。これを見た瞬間電光的に僕の頭にひらめいたのは恥ずかしいという感じはもとよりだったが、それよりもまあ何んと親切な校長先生だろうということであった。大変御多忙の身でありながら、ほんの一教え子に過ぎない僕に、こんな行き届いた御注意をして頂くなどとは、感謝の気持ちで一杯だったことを未だに記憶している。

校長先生のかく卒業後までも指導訓育して下さることは、自分の学校の卒業生のことは良かれ悪しかれ、自分すなわちこの校長の責任だという強い責任感の一つの現われではなかったろうか。換言すれば針塚先生は常に卒業生が社会に出てどんな仕事をしているだろうか、へまはやっていないだろうか、あたかも親が子を心配して見ているのと同様なお気持ちではなかったろうか。かかることを申すと現代の若い人たちはすぐ老人の旧思想で現代には通用しない思想だと一笑して顧みようともしないかも知れないしかし何時も思うことだが、我が上田の学校は他校に見られない特徴を持つ学校、すなわち学理の研究はもとより、別に一種いい得ない美風の漂っている学校であることだ。このことは校風といえは校風だが、学校と卒業生とのつながり、融和、これがひいては学校の発展、施設の拡大充実等に対する卒業生の献身的協力および援助等の精神となる。其の源泉こそは針塚校長の創立当初より唱え叫ばれた「自から進んで難局に当り身を挺して事に従え」との御教導御訓育で、しかも自から実践躬行せられた尊い教えが今なおつづいているからではあるまいか。

健筆家としての針塚先生 針塚先生が健筆家であられたことは一般周知のことで、今殊さらこゝに申し上げる必要はない。もともと僕が先生を健筆家と申し上げることは著述家としてではなく、お手紙や御揮毫を何時もよくお書きになることで、お手紙を差し上げると必らず封書の御返事を頂くので恐縮していた。高官の方が多くの教え子や下僚に自筆の返事を出すということはなかなか

か出来ないものであろうが、先生はこれをよく実行せられていた。

先生はかつて僕に「僕が手紙をよく書くのは自分のために書くばかりでなく学校の存在や卒業生諸君のためでもある」といっておられた。創立当初の校長としては、さもありなんと思われた。たまたま校長室にはいつて行くと何時も手紙を書いておられる。其のお姿は普通の人がやっているような巻紙を机の上に拡げ、右ひぢをついてお書きになるのではなく、きまつて机より少し後にある腰掛に座し、片足を他の足に乗せて組み、巻紙を左手に右手に筆を持ち宙でお書きになるので、書かれた巻紙の部分は左手の内側に垂れさがっているのである。この先生のボーイズは誰れにもよく印象づけるものと思われ、創立二十五周年記念に出来た先生の銅像が、まさに僕が言わんとする先生のボーイズで、誰がこのボーイズを彫刻家に進言したのか、または彫刻家自身がこれが先生の平常のお姿と直感して彫刻したのかは知らないが、先生の平素のお姿をよく現わしているものと感心している。話は少しそれたが先生の健筆家であられたことは万人の認める処だが、僕のような草書の書けない者には、先生の字があまりにも達筆のため解読に苦心したことを覚えてゐる。また先生は依頼の揮毫に軽く応じられていたようだった。恐らく古い卒業生はみんな額なり掛軸なりを書いて頂いたことと思う。僕も二、三幅書いて頂いた。先生がある日拙宅にお立ち寄り下さった際、僕の亡父の画いた二幅対の梅の拙画を床に掛けておいた。何かの話の序に父の遺墨画なる旨をお話し申上げた処、即座に讀をしてやろうと自から筆を執

つて次の讀をして頂いた。

「既見寒梅開一後聞鶯鳥歌、今一つは「一株東籬梅晴鳥襲人」というのである。これは僕にとつては画は拙いながらも父の遺墨であり、それに恩師の讀とあつて、得難い記念として保存し、梅の咲く正月掛けとしてゐる。

(元農林省神戸生糸検査所長)

師徳全子弟に

(大、四、糸) 大 箸 政 平

「朋遠方より来る有り、亦樂しからずや」式の論語を中心として教育された私達は、現代の新らしい世代とは頭に大きなズレのあることは否み得ない。そこで筆執るにも些かヒケ目を感じたのだが、追想録ともなれば五十年前を回顧するわけだから、ズレのあることも止むを得ない次第と、先ずお許しを願つて置く。

明治四十五年入学を許可せられ上田に来て間もなく、街頭で出会った一紳士に先様から敬礼せられて面喰つたことがあつたが、此の紳士こそ我が針塚校長其の人であつた。入学式後校長の面前で宣誓署名したわけだが、其の時校長のお顔を覚える程の余裕はなかつた。然し先生の方では、ウチの生徒であることは其の制帽で一目瞭然であるわけだ。此の校長の率先垂範の態度こそは我が校風の基をなし、先輩後輩の間柄に暖かき親交の美風を作つたものと思う。

在校三カ年間、私は頗るノンビリ暮して終った。ただ上田の校風を身につけて、一生涯おつき合いが出来る多数の親友を得たことは、誠に幸福の至りであった。いよいよ卒業と云う時になっても、就職問題など考えても見ない程暢気なものであった。尤も生家が小さい乍らも製糸工場を持つて居たので、私の就職などどうでもよいと云う事情もあつたわけだ。そこで卒業式当日サッサと帰郷して終った。すると追ひ掛けて電報で「三竜社へ推薦したから出頭せよ」とのことであつた。此の時代にも就職は相当困難で、卒業式前に決定した者などは一人も無かつた様だつた。イの一番で就職決定とはサスガ暢気者の私も感激せざるを得なかつた。一体どの先生の御推薦によるものか見当もつかなかつた。此の時三竜社には先輩では阿部（のち新宮）君（糸一）一人が居られたのみで、一週間位後れて小笠原安重（蚕二）、幾田精一（蚕二）の両君が入社して来られ、翌年には佐藤尚雄（蚕三）、塩見喜六（糸三）、峯村真一郎（蚕三）、安孫子文弥（蚕三）、岡田康三（蚕三）の数氏が来られたし、其の翌年には又数名入社せられて大分賑やかになった。母校からも校長初め諸先生が度々御来社下さる様になった。其の初めて校長の見えた時、大勢の同窓の氏名を一指摘して訓誡を与え激励せられたが、どうして私達の顔を一人一人覚えて居られるのか不思議に思われた。十把一からげでなく個々に適切な訓誡を与えられたのには一層身にしみて感激を深うした。

大正八年校長排斥運動突発の報に接し、急遽同窓の集会を求めて、校長支持の決議文を作り、これを携えて出校することにしたが、たまたま既に決定して居た私の結婚の式日と重なり止むを得ず、小笠原君に携行して貰った様に記憶する。此の運動は一部の誤解に基づくもので、直ちに円満に解決したが、翌大正九年私は三竜社を退社することとなつた。

其の年の秋、母校十周年記念祝典に出校した私は、式後校長室に呼び出され大分訓誡を受けた。其の後私は家庭の事情で薬局を経営することになったが、斯くなつてからも、某一流会社への推薦を辱うし、感激を新たにしたが、其の時は、漱石の「ほととぎす圓なかばに出兼ねたり」の様な事情で拝辞するの外なかつた。校長は私が薬剤師に転向してからも、生薬の講義をして下さつたことがある。農科出身の校長が植物学に造詣深いのは元よりだが、生薬のお話には其の博学振りに驚いた次第だ。

校長が戸倉惣兵衛氏（蚕二）郎に見えた時私も伺候したが、遠慮のない戸倉君が「大箸！校長は君を買ひ被り過ぎて居るぞ」と然り、事實買いかぶつて居られた様で、実質のない私は恥ずかしい次第だ。処がこちらとして見れば、實力はゼロでも買ひ被つて下さる校長の知遇には感激の至りだ。どうか此の知遇に応えるべく努力し度いと念願して居つたわけだ。先日同窓相会しての席上、口々に「校長には特別の恩顧を受けた」とか「僕の今日あるは校

長のお蔭だ」などと、何れも特別の知遇を受けたことを感謝する声が続出した。皆が皆こう思つて居る所を見ると、校長の徳は万人を感化する偉大な力があつたものと思う。

昭和十年母校二十五周年記念日には除幕された直後の校長の美事な銅像をバックとして、校長を中心に囲み各期の同級生が記念撮影をしたが、一組写し終れば又次ぎの組と、数十組が押し掛け校長は目をバチクリして何れの組にも加わつて居られたが、蓋し校長最良の一日であつたことと拝察する。

昭和三十五年母校五十周年記念日には校長既に亡し。然しながら其の教え子の一人が母校学部長として校長の遺業を継ぎ、数多くの教え子が遠方各地から参集したことは、校長も御満足と思ふ。美事なりし銅像は戦時申出征せられ、今は其の同じ場所に改めて胸像が建つて居る。十月二十日は稀に見る薫風漂う日本晴れの式典日和であつた。二十五年前と同じく胸像をバックにして製糸科第二期生の記念撮影をしたが、其の中心に針塚先生を囲むことが出来なかつたのは、非常に心淋しき限りであつた。胸像を前にして在りし日の校長を偲び其の知遇に感謝し乍らも、不甲斐なき身の其の恩顧に報い得ざりしを申訳なくお詫びした次第である。

(大審薬局)

蚕界の五巨頭

(大、四、蚕) 飯島 正胤

『功成り名遂げて身退くは天の道なり』我が針塚先生の如きは正に其の典型とも申す可きか。

私は昭和二十四年八月十九日当時群馬県渋川在の豊秋村字中村の先生の御宅に始めて参上致し、久し振りに先生の温容に接したのであります。其の理由は此の年の夏自家建碑を企て、其の墓碑銘の揮毫を手紙を以てお願い申し上げました処、直ちに御快諾を賜わり、見事なる書を御郵送頂きましたので、感謝の極御礼言上の為にと、参上致したのであります。即ち其の日午前十時にまかり出でました処、恰もよし先生には愛猫を懷に抱かれ極めて御元氣にて、遠方からよく来たと仰せられて親しく御引見下され、御歓待に預り大変御厄介様に相成りました。その時御恥ずかしながら聊か御礼の印にと軽少なる金一封を差し出しました処、即座に「これはいかん」と強い御言葉に、私はなす術もなく只頭が下がり心弱くも差し上げ兼ねて失礼を御詫び申しました。

それから専門学校当時の数々の懐旧談を承り、時の遷るのも忘れましたが、談偶々卒業生のこと及び、蒲生君の病氣の時には心配だったよと、実にあの時は先生の御高配により長野赤十字病院長として令名高かりし安藤先生(長野市景町開業中)を招かれ、診察を乞われたことは、当時同窓各位御承知の通りであり

ます。又此の時倉沢君の友情は蒲生君の病氣快復に殊勲を奏したなど、仰せられ、卒業生に対する深き御愛情御心遣いには胸迫り目頭が熱くなりました。又此の時此の住宅は千曲会の好意によると仰せられて、隈なく御案内を賜わり恐縮いたしました。時に先生御齡七十九才御足の稍御不自由の外御支障もなく、尚乞わるるまゝに講演にも御出かけ遊ばされると承り、其の偉大なる御実行力には只驚嘆の外なく、今後一層の御自愛御長命をお祈り申上げて、午後二時頃辞去仕った次第であります。

然る処其の翌月即ち九月廿一日忽焉として幽明境を異にせられたのでありますから、私の驚きと悲しみは言語に絶しました。先生の御訃報は千曲会からの御知らせによつて承り、蒲生先生は千曲会を代表して御弔伺下され、御葬儀の御模様も詳細拝承し、ひたすら先生の御冥福をお祈り申し上げた次第であります。斯くて私は偶然にも先生の絶筆を戴き且つ御臨終に御目にかゝった様なことと相成り真に感慨無量であります。

偕て上田時代に於ける私の思い出は、毎年正月元旦に勅任官の大礼服を召された先生が、専門学校の新年拝賀式後、直ちに上田公会堂の市民拝賀式に参列せられ、次いで書初めの陳列所に御出でになつて場内御一巡（御自分にも達筆の書数通必ず御出陳）、一般市民と談笑せられた姿は忘れ得ないものがあります。又我が小果蚕業学校の卒業式には殆ど毎回御臨席の栄を賜わり、御訓辞を

戴いて卒業生の感銘一入でありました。確か大正十二年三月現在常田の地へ移転した最初の卒業式に、来賓として工藤善助翁・中島精一翁及び倉沢運平翁がお見えになり、そこへ針塚先生・主人役の三吉先生と当時蚕界の五巨頭が打ち揃つて控えの一室になごやかな談笑の一時を過ごされました。私は此の日接待役を仰せ付かつて居たので、其の麗しき光景は今尚記憶に新たなるものがあります。それについても其の悉くが今や故人となり感慨無量であります。

先生の学生に対する御教訓は「進んで難局に当れ」、「実践躬行せよ」又曰く「汗の体験」、「責任を重んじ時間を厳守せよ」等でありますが、先生は実に身を以てその範を垂れ給うたのであり、卒業生は皆此の教訓を身に体して各方面に活躍雄飛致しました。又先生は各界各層から非常に親しまれました。実業各界方面の信頼は固より信濃教育会顧問となり、更に推されて其の会長の職にあること五年、普通教育界方面にも御功績は多大であります。尚御退職後も群馬県民の信頼極めて厚く、県選挙管理委員長或は県読書協会理事長などに推されて、文化方面の仕事に御貢献なされたのであります。

先生逝かれて茲に十三年、其の高潔の御人格を偲び、思い出の二、三を記し、謹んで追憶の辞といたします。先生の大徳永久に行く水の如く照る月の如けむ。合掌再拝

（元長野県小果蚕業高校教諭）

酷寒の候「外套を着ないが内套を着て居る」と申された先生

(大、四、蚕) 須田 圭二

針塚先生は明治四十三年八月、三八才の若さで上田蚕糸専門学校初代の校長になられてから、昭和十五年五月、六九才の時に上田を引揚げて郷里群馬県群馬郡豊秋村字中村(今の渋川市豊秋区中村)へお帰りになるまで三〇年間上田に居られた。その間、多数の職員並びに学生を養成指導された。「挺身従事」、「汗を流して働け」、「進んで難局に当れ」と云うのは、何時も有り難い先生の御教訓であった。

御在職中は我が国蚕糸業のもっとも盛んな時であり、長野県は蚕種の本場として上田地方は特に夏蚕、松本地方は秋蚕の飼育に適して居った。製糸場においては、松本・諏訪・岡谷・丸子・須坂・上田等に大会社の工場があり、各所に繭糸会社や倉庫があった。僕は須坂に居ることがあったが、多くの製糸場から出る煙突のけむりのために、屋根は黒ずんで居り、住んでいる雀までが黒くなっていた。岡谷や丸子なども多分そんなことであつたらう。

群馬県も昔から蚕糸業の盛んなところであつた。群馬県人の本

校に学ぶものが殊に多かったのもそのためであらう。大正三年から昭和十五年までの本校卒業生のうち、群馬県人は養蚕科五五人、製糸科四一人、絹糸紡績科八人、合計一〇四人であつた。ところが最近群馬県から本校に学ぶものが殆どなくなり、目下在学生が二、三人で職員としては荻原清治(糸二)先生だけとなつてしまつた。針塚校長在職当時、本校職員にして群馬県出身者は針塚長太郎・阿形輝司・石倉新十郎・早川直頼・目崎三郎・荻原清治・金子薫蔵・高橋清七・黒子二郎・松岡重三郎・小見益男・須田圭二の諸氏であつた。

針塚先生はお若い時は口ひげをはやし、立派なスタイルで、毎日弁当は持たずにステッキを持って登校された。かなり寒い時でも大概オーバーは着ずに歩いて来られた。「先生はオーバーも着ずに強いですな」とお尋ねすると、「僕は外套は着ないが内套を着て居るのだ」と答えられた。昼食は何時も修己寮から学生と同じ麦の沢山入った御飯を取りよせてたべて居られた。先生は学生の時代に自炊をやった経験があまりの様で、食事の方は極めて質素であられた。日本の蕎麦は大好物と見えて時々、蕎麦粉から自ら蕎麦をこしらえて食べて居られたそうだ。

針塚先生は日本精神の鼓吹者で、柔道と剣道には熱心であつた。柔道の方では講道館九段飯塚国三郎氏を名譽師範とし、岩崎喜三郎先生や上田中学校教諭依田誠氏を師範として囑託し、学生を指

導された。飯塚先生が時々本校に見えるので長野県その他の各学校でも柔道が盛んになった。これも針塚先生に負うところと言うべきだろう。其の後、岡徳治郎先生の部長で柔道に一層熱が入った。剣道の方では和田仙太郎先生部長・早野清三郎先生師範で他に赤尾英三先生・広川正治先生・志賀章雄先生等の指導者もおられ本校学生で有段者や有級者が大分ふえた。

針塚先生は書がお好きで上田へ来てから習い始めたと申されて居ったが、晩年になって益々上達された。また正村竹亭画伯について奥様と共に南画を習いはじめた。刀剣がすきで殿様が持つておられたという日本刀、其の他沢山の日本刀を持つて居られたが、教え子が出征する際に大分わけてやったようだ。動物のすきな人は一般に人間味のある人だと聞いて居るが、針塚先生は大や猫がおすきで校長室から犬が飛び出すこともあった。針塚先生から猫の軸をいただいたが、これは画家に頼んで特にかいてもらったものであった。

よくねむる人は健康な人であるが、針塚先生は夏のお昼寝がすきであると思えて、お昼休みに校長室を訪問すると椅子を並べてよくお昼寝をされて居た。

一方謡曲の羽衣会は毎月一回、一週間ずつ更級郡東福寺村から観世流の高橋清輝先生を招いて稽古をして居ったが、針塚先生は非常に上達された。僕も羽衣会の会場が宗畔寺であった時に羽

衣会員に入れられてしまった。羽衣会員は次の様な人々であった。

針塚長太郎・阿形輝司・石倉新十郎・早川直瀬・遠藤保太郎・佐藤利一・小沢綱吉・清水寛孝・森山二郎・岩崎喜三郎・小宮山太助・高木三治・樋口琢磨・須田圭一・針塚信子・遠藤倫子・石倉順子其の他

謡は芸能であって人によって毫もうまく出来ない人がある。はじめの人は沢山あったが途中でやめる人も多かった。小宮山太助（糸八）様は目下小謡会の師匠である。夫人連は高橋先生について仕舞を習って居られた。

（元蚕糸専門学校教授）

名刀のお別れ

（大、五、糸） 林 貞 三

学校創立当時 政府が日露戦後の財界産業界発展のため、上田蚕糸専門学校を創設し、その校長に針塚先生を任命した。先生は教職員の人選に慎重な配慮を重ね、先ず当時蚕病学界の第一人者大森順三博士を始め、纖維化学の泰斗朝比奈晃十先生・井上柳梧先生、蚕桑化学の川瀬惣次郎先生、製糸研究の先覚三谷徹先生等を中心として、多数の青年研究家をこれに配し、又修身の講義に漢学の新築金橘先生を選んで生徒監を兼ねさせ、能筆の小沢綱吉氏を庶務課長に配するなど、針塚先生の人事は当初から水際立っていた。

当時学生間には針塚先生は若くて大物なのだから、恐らく何時までも上田に居る筈がない。針塚先生御栄転の後釜は、先生と大同期の英才大森博士だから、というような風聞が、まことしやかに流れていた。そのため大森博士の傍若無人振りは、われわれ学生にさえ目に余るものがあった。校友会役員の席上当時一徹純情の遠藤文平君（糸一）から「それでも先生か」と喰いつかれ、和田仙太郎先生からも痛撃されて、例の投皿事件を引き起こした。又校内弁論大会に於ては、早川先生からブルータス・シーザー論を展開されるに及び、針塚校長も遂に大森教授の三度目の辞表を受理されたのであった。大正三年のことだ。

学生スト事件 この経過については猪坂直一君（蚕六）が、「常陸」記念号（昭和二十六年二月発行）にその体験談を載せているが、それを学校側の協議処理上から見れば、先ずこれが対策の教官会議が開かれた。当時は勉強のみに明け暮れて、世相には最も暗かろうと思われていた原田親雄先生の堂々たる論旨が、全面的に取り上げられて、学校の教育方針堅持を決議し、築地宣雄・大滝照太郎両先生に説得役を引受けてもらった。一方卒業生も松村季美君（蚕一）等を中心として強力にその解決を迫ったので、僅か一週間でストは円満に終熄した。然しこの事件は謂わゆる雨降って地固まり、禍が転じて福となったようなもので、これを動機に懸案の人事交流も円滑に実施され、校風いよいよ堅実に発展成長して、針塚先生の理想実現に近づくことができたのである。

盛岡高等農林学校に転出の新聞辞令

昭和二年初夏の候、針塚先生の御出張中だったが、東京各新聞は一斉に高等専門学校長の転退職予定表（？）を発表した。その中には針塚先生が盛岡高農に転出することになっていた。吾々一同は全く驚愕し、あわてて先生の旅行先きに電話でお帰りを願うと共に、地許の馬場歳次・山本莊一郎・成沢伍一郎の三氏に上京して頂き、政府及び校友会に対し、先生の留任を懇請した。一方高木三治君（糸三）と私は諏訪に行つて、小林茂樹（糸一）・三輪輔（糸一）・花岡作弥（蚕一）・石塚浪之助（糸七）等の諸君と、鉄道大臣小川平吉氏を富士見の別荘に訪ね、同窓の意のあるところを述べて援助を乞うたが「御用の向きは持ち廻り閣議に出る問題だが、まだ出て居らぬ。注意しておこう」と言つて座を立たれたが、その後直ぐ春日俊文氏（前代議士）が見えて「水野（鍊太郎）文相が上田に行かれたら、学校を案内し、校長振りをよく見て頂いて頼みなさい」と言う意味を話された。上田に帰つて先生にお会いしたが、私の報告など問題にせず、「文部省からまだ何の話もないこと、盛岡へは行けないこと、先任者からやめてゆくのは、官界の常道であること」を淡々と話され、再び旅行に出てしまわれた。一カ月余り過ぎて夏も終りに近づいた頃、山崎達之輔文部次官が戸倉温泉に來たついでに、勝俣市長を市役所に訪問された。その歓迎屋饗会を料亭喜与川で開き、勝俣市長・成沢伍一郎市会議長・学校側から阿形先生と私外一人が出席した。席上山崎次官は成沢議長要望に答えて「針塚先生は文部省における大先輩で、皆様から

盛岡高等農林学校に転出の新聞辞令 昭和二年初夏の候、針塚先生の御出張中だったが、東京各新聞は一斉に高等専門学校長の転退職予定表（？）を発表した。その中には針塚先生が盛岡高農に転出することになっていた。吾々一同は全く驚愕し、あわてて先生の旅行先きに電話でお帰りを願うと共に、地許の馬場歳次・山本莊一郎・成沢伍一郎の三氏に上京して頂き、政府及び校友会に対し、先生の留任を懇請した。一方高木三治君（糸三）と私は諏訪に行つて、小林茂樹（糸一）・三輪輔（糸一）・花岡作弥（蚕一）・石塚浪之助（糸七）等の諸君と、鉄道大臣小川平吉氏を富士見の別荘に訪ね、同窓の意のあるところを述べて援助を乞うたが「御用の向きは持ち廻り閣議に出る問題だが、まだ出て居らぬ。注意しておこう」と言つて座を立たれたが、その後直ぐ春日俊文氏（前代議士）が見えて「水野（鍊太郎）文相が上田に行かれたら、学校を案内し、校長振りをよく見て頂いて頼みなさい」と言う意味を話された。上田に帰つて先生にお会いしたが、私の報告など問題にせず、「文部省からまだ何の話もないこと、盛岡へは行けないこと、先任者からやめてゆくのは、官界の常道であること」を淡々と話され、再び旅行に出てしまわれた。一カ月余り過ぎて夏も終りに近づいた頃、山崎達之輔文部次官が戸倉温泉に來たついでに、勝俣市長を市役所に訪問された。その歓迎屋饗会を料亭喜与川で開き、勝俣市長・成沢伍一郎市会議長・学校側から阿形先生と私外一人が出席した。席上山崎次官は成沢議長要望に答えて「針塚先生は文部省における大先輩で、皆様から

親しまれている御仁であることは、よく存じて居ります。文部省から辞めて下さい、など言う筈はありません」と言われた。又勝侯市長は盛んに蚕糸大学への昇格を主張し、それを根幹にして信州大学を創設して欲しい。中部日本に帝国大学を一つ設くべきだと強く信念を開陳された。その遠見には敬服した。なおその席上山崎次官と阿形先生とは、東京大学同期の法学士であることを知った。

針塚先生と卒業生

卒業生が就職先で失敗したことなど聞かれると、どんな些細なことでも、先生自ら出向いて解決されたこと、及び卒業生を格別取り立て頂いた場合など、たとい青森でも遠しとせず、知事や部長に挨拶なさったと云う様な例は、枚挙に暇がない。先生に手紙を差上げれば必ず返事を下さる。御返事で手紙の書き方を習ったと言う者や、差上げた手紙の誤字や文章を真っ赤に直して、返して頂いた話も、珍しくない。当時卒業生は先生を親父（おやじ）とか校長々々と呼んで、心から親しみ懷かしんでいた。次の一事などその好例だ。

先生が松原町にお住いの頃だ。今は亡き愛知県蚕業課主任技師芝荒雄君（蚕三）が、名古屋から夜行列車で上田に下車し、朝六時先生の門を叩いて、二階に請ぜられ、炬燵に陣取って、朝からお酒をしたか頂戴した。先生も少々持て余し気味だったのか、女中さんが私を迎えに来たので急いで推参した。ロレッツのあやしくなった史汀（芝君の雅号）が巻紙に「今朝の所感だ」と言って「朝まだき信濃路の山ごつごつたり」と書いて、先生と私に「何

か書け」とごねる。先生は

戸を叩き芝風吹く朝まだき

と笑って書かれ、私は困り抜いたあげく「朝早きちくりちくりと針をさす」と書いた。この寄せ書は確かに私がお預りしていたが、戦時中のごたごたで惜しくも見失ってしまった。

昭和四、五年頃だった。飯田の卒業生の会合に先生と同行し、一泊の上天竜下りを楽しんだことがあった。その時の宿泊料私と二人で九円也に對し、茶代十五円支払うように申された。聞き返したが間違いない。後で先生は「卒業生のためにも奮発せねばならない時があるさ」と教えられた。

名刀とのお別れ

先生が会長の職員貯蓄組合があった。毎月

給料の五％を積み立てるが、その貯金額に月給の二カ月分を加えた額までは、借出すことが出来た。昭和十一年当時のW庶務課長が債券屋に作った赤字の穴埋めに、この組合の貸出し規定を悪用して、他人の口座からも借出し、さては校外からも多額の借金を作り、校内外の大きな問題となったことがある。先生はその大部分を私財で弁償されたようだったが、偶々田口敏夫君（糸一）の世話でお嬢さんの美津枝さんが、野口平吉氏と婚約整い、挙式の段取りとなった。或る日先生は日本刀一本売ろうと言いつ出された。それは土佐の左行光作・新発田の殿様が江戸登城の折に佩用に及んだと言う完全な名品・純金廿七匁で飾られている豪華なものだった。

これを佐藤嘉三郎氏が病床にある老父尾之七氏に一目見せたいと所望された。私は佐藤氏からの代金千円也を先生のお宅に持参

した。先生はわざわざ袴を着けられ、二階の奥の間で奥様お立合のもと、半紙を口にくわえ、刀にたっぷり打粉をされて、拭紙でよく拭いたり、ジッと刃渡りを見つめられた後、静かに鞘に納め、緞子の袋に入れて私に渡された。何とも言えぬ緊張した空気で、気が詰りそうだった。門を出る時振り返ったら、先生御夫妻はなおあの玄關に端座して刀を見送って居られた。黙礼して急ぎ足に辞去したあの時の情景は、昨日の様に脳に浮かんで来るのを、どうすることも出来ない。

先生がよく「刀剣は永久に愛護せよ、家宝として国宝として」と仰言られたお言葉を思うと、先生の胸中が拝察され、あの時のお姿が一層尊く感じられる。(この名刀の行衛については猪坂直一君追想文参照) (信州大学名誉教授 元繊維学部長)

先生の風格

(大、五、蛋) 八木 誠 政

人間には人としての成長が誰にもある。吾々が学生として針塚校長先生に接した頃、先生は大変若かった。その頃の印象は晩年の先生と比べ、大分ちがっていたと記憶する。今でも強く心に残っているのは、先生の校長としての意識が明らかになめられたことである。よい意味では先生自ら颯爽とした風を見せるように、心がけておられたのではなかったかと思う。

私はそのように感じたのであったが、他の人々はどう思ったか知らない。この颯爽たる風格が自然に出てくるようになれば、人間としての成長が出来たことになると思う。先生はそれを自分で修養されるべく、大いに東洋思想の勉強をされたように見えた。その副産物が書であったと思うがどうであらうか。「文は人なり」と云う楊牛かの言葉があるが、文字でも画でも同じことが云えるように、先生の人間としての成長はその書によってうかがえると思う。

先生の書は初めは若く元気のよいものであって、洗練されているとは思えない。それが年と共に洗練されて行ったと思う。晩年になって始めて書家らしい風格のある字になったことは誰も認めるところである。私も先生の他界される三年位前に、中庸にある一句を書いていた。それは枯淡な出来であった。

私は個人で先生と相對してお目にかゝることが好きで、東京に住んでいた頃は別所に来て先生をお誘いし、花屋の奥座敷で晩春の夕暮に、散り行く桜花をながめたこともあった。終戦後令夫人がなくなった淋しい先生をおなぐさめするために、洪川のお宅へ浜香三君(紡三)と一所に伺って草津温泉へお誘いし、一夕を過ごした。その時私は一度上田に来ていたといひ、戦後の学生に対しお話をしていたといふらどうかと伺った所、快諾されて間もなく来田の上講堂で、「敗戦後の学生はいかに世に処して行くべきか」の訓話をされた。この時の先生の風貌は今でも忘れることが出来ない。その時の先生には吾々が学生時代に仰いだような声色に若

さはなかったが、その心からほとぼしる青年への熱情は、講内に充ちあふれたように思えた。それが吾々への最後の熱弁であつた。

先生の全貌は石井鶴三先生の大作である銅像で伝えることが出来た。その製作の依頼には私も委員として石井先生宅に数回参上し、針塚先生が椅子にかけて筆を持たれた形をお願いした。石井先生の傑作である。この像は戦争中供出されて今はその胸像のみが残されている。石井先生の針塚先生に対する印象を聞いた時の言葉は、仲々よく針塚先生の晩年をとらえていると思つた。それは「平凡な偉人」というのである。これが先生の修養によつて出来上つた晩年の風格であつたにちがいない。

(元信州大学纖維学部教授 理学博士・農学博士)

万物在我

(大、五、糸) 高木 三 治

伊香保 大平洋戦争の初期漸く物資が不足しお互いの気持が何となくイライラ、ケチケチし始めた頃、森田三郎氏(糸四)が主唱で、岡部弥平氏(糸三)・橋本景吉氏(糸四)それに私と四人で先生を伊香保温泉の千明旅館にお招きし、一夜先生を囲んで談笑夜を徹したことが、先生と親しく接した最後で、今なお記憶に新しく昨日のような気がする。

今や先生亡く岡部氏・橋本氏共に逝き、鎌倉に平和な余生を樂

しむ森田氏と、食わんがために毎日アクセクして居る私とが残つて居る。どうした訳か針塚先生を思い出すと、必ずと云う位に故加美好男君(糸三)を思い出す。生前の先生と加美君との存在が同じように、大きく脳底に残つて居るからであるうか。

万物在我 之は昭和七年に針塚先生に書いて戴いたもので、額にして自分の寢室にかけてある。もともと之は二、三人の人と一緒に書いて戴いたのを分けて貰つたのだから、特に私のために書いて下さつた字句ではないが、何か事にぶつかったときには、この「万物在我」と南洲翁の「人を相手にせず天を相手にせよ」の遺訓とを、併せて思い出すことが年に何回かある。

和魂独才 入学早々倫理の教官新樂先生から、針塚先生の教育方針は和魂独才と云うことであると聞かされたが、其の詳細の説明はなかった。自分判断に独才は当時科学、就中化学の進んだ独乙に遅れるなど云う事のように判断したが、和魂とは何を意味するのかよく判らないまま今日に至つて居る。へたな解釈をしようものなら総評の御偉方や青年層から、三途の川を一巡りして出直せ、位の事が言われそうな意味なら若干頭に浮かばぬでもないが。

然し多くの卒業生が官界と実業界に今日の地位を築き、押しも押されもしない上田を確立した裏には、此の和魂独才諸士諸兄の力があつたものと解して居る。

(北信生糸KK常務監査役)

三等車の先生

(大、五、蚕) 久保田 正樹

先生の著書「育蚕学大全」

先生にこの著書のあることを知る人は少ないであろう。これは明治四十三年三月に博文館から発行されたもので、洞口猷寿氏との共著である。私は大正二年学生時代手に入れて今でも恩師の著書として大切に保存している。内容は発生学にはじまり、形態・組織・解剖・蚕病・蚕病予防・蚕種・蚕室・蚕具・飼料・飼育方法等、あらゆるものを網羅し七十二六頁に亘るもので、当時としては貴重な参考書である。

常識博士針塚先生

先生は稀にみる立派な教育者であったことは今更申すまでもないが、学者とはいえないかも知れない。然し文章と書をよくし、漢学の素養深く、世間のすべての事情に通じておられたことは驚くべきものがあつた。正にこれ常識博士と申すべきか。私は昭和九年頃と思うが、松本の蚕業試験場在職当時同窓会の事業として構内に養蚕神社を建設し、この神社の前に立てる幟を書くことになった。ところが幟に書く文句がわからない。そこで思案のすえ、針塚先生にお伺いしたら次のような文句を教えて頂いた。その時流石は先生だけあると思った。

黎民歆仰徳 丹心膺神明

淨心対神徳 正身而従事

これは又ある人から聞いた話であるが、別所温泉の北向観世音の境内にある大地蔵の手の格好まで全部知っておられたとか、その博覧強記振りには敬服の外はない。

先生の文章と書

先生の文章のうち特に印象にのこるのは、年々読まる卒業式の式辞である。簡潔のうちにすべてを云いつくし、切々胸をつくような感じである。

又先生は書をよくせられ、何人の需めにも応じて気易く書いて下さったものである。私はかつて校長室に先生をお尋ねしたことがあつた。丁度その時先生は依頼された額の字を書くところであつたが、揮毫されるとき先生の態度は実に慎重である。先ず徐徐に草書辞典を開いて側におき、これを見ながら指の先でくり返しくり返し練習し、いざ筆をとったら一気呵成にすらすらと書き終るといった風である。折よくその時「笑門来福」という額面が出来上つていて「これは僕の快心の作だから君にやろう」といって私に下さつた。

民主的であつた先生

先生が校長として在職された大正・昭和時代はいわゆる官僚主義華やかな時代で、当時勅任官といえは大したものであつて、やたらに面会など出来るものではなかつた。然るに先生には官僚振った様子は微塵もなく、校長室入口のドアには「何人もノックしないでお入り下さい。」と貼り札がしてあつたことは、余りにも有名である。客あれば高下をとわず、玄関まで送り出されることが常であつた。

私が松本在職当時昭和十年頃と記憶するが、東筑摩農学校（現

桔梗ヶ原高校)に記念講演会があり、その講師として先生が招かれ、松本駅を通過されるので、当時千曲会安筑支部長をしてもらった私は、先生のお伴をすべく態々青切符を買って二等車に乗りこんだが、どうしたことか先生の姿が見当たらず。まさかとは思つたが三等車をくまなく探したところ、漸くにして最後の車に平然と座しておられる先生の姿を見いだすことが出来た。その時の先生の弁に曰く「君、僕は二等に乗るもよいが冤角いやにすました人間ばかりいて面白くない。ところが三等車だと色々な人が乗っていて、しかも誰もが心易く話しかけてくれるので、ほんとに楽しみだよ。世間を知るには三等車に限るね。」といって側らの風呂敷包を開いて「篠井駅でうまさうな柿を買ってきたから君も一つどうぞ。」といったような調子で気取らない、飾り気のない人間味あふれる先生の態度には、おのずから頭が下ったものである。

(元千曲社蚕種協組技師長)

不発躍如

(大、五、蚕) 岸 勝 弥

針塚先生の最初の印象は、確か明治四十二年の初秋だった。それは先生が文部視学官として私共の学校(群馬県勢多農林学校)に視察に来られ、特に先生の御郷里の故を以て職員生徒に一時間ばかりの講演をされた。その御話の内容までは今日想い出せない

が、その頃の農村出の少年だった私の見た中央官庁の偉い人、しかも吾々の郷村の近くから出られた人ということで、格別の親しみと懐かしみとで張り切って、先生の潑刺とした風采に接しお話も聴いた。今でもその時の先生の身振りと、時々出して見られた金ピカの時計が(その頃金時計を持っておる人は、余程の金持が高級のお役人でもなければなかった)眼に浮んでくる。それから暫くして上田蚕糸専門学校長になられたことを新聞で見たか、聞いたかした。こんなことが上田の学校に親しみを持つ緒にもなった。

次に私が静岡県庁に勤めておった時、昭和八年十一月五日先生が静岡市に來られて一泊された。その時は県蚕糸課長玉木浪三郎氏(蚕一玉木勝彰氏の父)同窓の佐藤寿雄君(糸一五、故人)を御宿舎の大東館ホテルに御案内し、それから旗亭「佐の春楼」で晩餐を御一所に頂いて、翌日県庁で知事田中広太郎氏に會われ、更に地方課長床次徳次氏(床次氏は元内務大臣政友本党総裁床次竹次郎氏二男、現在鹿児島県選出衆議院議員で先生の御縁戚)の官舎を訪ねられた。

偶々その「佐の春楼」での晩餐の座敷に、誰の書だったか忘れたが一面の額が掛けてあって、その読み方が居合せた者誰も明瞭にしなかった。先生も一寸首を傾けて居られて帰校された。

ところが数日後十一月十日付の先生のお手紙でその出典と読み方、及び大意まで詳細に教えて頂いた。いつもあのお忙しいなかにこの御親切な御指導を賜わったことは、先生ならではの出来ぬ

ことと、私は勿論その時の一同が深く感銘した。と共に、その書片は大切に保存している。そしてその詩は、唐詩選卷の七李白の清平調詞三首の内の二で次の◎印の註意であつた。

一枝濃艶露凝香、雲雨巫山枉斷腸、

借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧。

その後昭和十三年秋千曲会総会に出席して校長室にお訪ねした時、室内に飾られてあつた大鷲の話から、私が弓道に精進してゐることに及び、それについて何か座右の銘となる書の御揮毫をとお願ひしたところ、孟子の第四十一章の

君子引而不發躍如也、中道而立、能者從之。

の中の「不發躍如」の字句を雄渾に振るつて下さつた。

昭和二十二年初夏私が長野県蚕糸課長に就任した挨拶を申し上げたところ、先生から御懇篤なるお祝と激励との情味溢るゝお言葉を頂いた。これが私の頂いた先生の最後の教訓であり、御書翰であるから全文を掲げさせて頂くことにする。

采雲拝読仕候益々御健勝の段欣賀仕候当方こそ平素御疎慢に打過ぎ缺礼御免下され度候。さて此度は長野蚕糸課長に御転任の由適材適処にて心から御嬉び申上候。斯業も経営困難と相成往年の如き盛況は見る事なかるべきも新興日本としては最も重大なる使命を有するものに御座候得ば貴君の全手腕を御奮ひ御活動下され度奉希望候。日の没する時八月の東天ニ上るの時なるを思ひ何卒希望ニ満ちて御計画の程御願申上候。降而小生御かげ様にて無事蠶動候間御休神下され度。只耳は遠くなり足は

ヒヨロ／＼になり僅に生きて居る丈に候へ共口だけハ相当ニ活動して居り候呵々

此間千曲会員ニ誘はれて奥利根の宝川温泉ニ参り候。天下の奇勝と可申処に候。野天風呂約五十坪。水上ヨリ約五里西に入り申候沿岸の風景名状すべからず是非一度御來遊をおすゝめ申候御健康を祈る

七月十一日

針塚長太郎

(元長野県蚕糸課長)

柔剣道場の火鉢

(大、六、蚕) 小林 啓 介

僕が校長に直接教を受ける機会に比較的恵まれたのは、柔道に精進したこと(卒業の時賞状に添えて白鞘の刀を一振り頂いた)、最初の任地が群馬県であったこと、養蚕科出が製糸に転向して長野県内諏訪郡の丸茂製糸に十年間居たこと、戦時中前橋市の日本蚕糸関東支社に勤務し、校長の近くの南橋村に疎開して通勤して居たことなどで、お近くに居りお目に掛かることが多かった。

大正四年の冬休みに、上級の吉川誠彦(蚕三)刈田恭一(蚕三)の両君と共に東京に柔道の三船久蔵先生宅を訪ねて、保証人になつてもらい、講道館に入門した。そして校長に三船先生を学校の柔道師範として招聘し、寒稽古を行なう様にと要望した。その結

果飯塚先生が来られることになり、大正五年一月から飯塚先生が初めて我が校の柔道寒稽古を見られた。稽古初めが朝五時で、生憎と此の冬は非常な寒さで温度は零下十度以下の朝が続いた。校長は稽古はされなかったが、和服で端然と坐って居られる日が多かった。初日は余りの寒さに、手足の感覚が無くなり、傷をし易く、しかもその傷に痛みを感じない。従って柔道着や畳は血で染まるものが多く、剣道場の床もよく見ると、随分血で地図が書いてある。そこで手足を少し温めて感覚を取り戻す必要があると思つたので、翌朝は自分で小使室から火鉢に、それでも遠慮して少しの火を入れて道場に置いた。

其の日のお昼休みに校長室に呼ばれた。校長の目が吊り上つて居る、何かあるなと思うと、「君は武道の精神を知って居るか」と来た。黙って居ると「今朝道場に火を持ち込んだのは君だと云うじゃないか」、そこで「火は暖をとる為でなく、手足の感覚を取り戻して怪我を防ぐ為であります」と申し上げると、言下に「よし良かった、帰ってよい。」

三日目の朝は柔道場に一個、剣道場に一個の火鉢が置かれて、然かも火は溢れんばかりに盛られ、赤々と焰を上げて居るではないか。

大正六年四月学校からの推薦で、群馬県庁に勤めることになった。校長室で次の様の御訓辞を受けた。「君は我が校の卒業生として三回目の群馬県庁就任である。今迄と違って判任官に任命さ

れるのだから、そのつもりで十分注意してやるように。」そして僕の顔を眺めながら「君は女難の相が有る、前橋では特に気をつけなくてはいいかん、それから我れは社会の最低階級に立つものなり」という事を忘れてはならぬ、君に送る言葉は此の二つだ」と結ばれた。人生の終末に近づいた今振り返って見ると、女難の相にはいさゝか当てられた感がある。何か面白そうなことにぶつかると、校長が出て来られて、あの髭をピンピンやりながら、「君は女難の相が有る」という。お陰様で歩いたコースには難は起らなかったが、どうも人生行路として面白味に欠けて居た様に思われてならぬ。

僕の勤務に御同情を頂いた為かと思うが、昭和二年に学校に呼び出しが有り、米国行きを条件として、他に転任せよとの御推薦を受けたが、おことわりした。続いて昭和四年に片倉製糸就職を御決定になって、転任せよとお話しの有ったものを、またまたお断わりした時には、余程お腹立ちと見えて、「君は義理立てするにも程が有る。馬鹿だ」と一喝をくらひ、そのあげく多数の卒業生が厄介になつて居る片倉に今更申し訳が出来ぬから、自分で東京に行つて話をして来いとのことだった。で、片倉武雄常務に会つて御了解を求め、永井栄さん（糸二）にひどく叱られて、逃げるが如く諏訪に帰ったことがある。因縁は妙なもので昭和七年には上野栄仁兄（糸三）のお世話で片倉に入社した。僕の三十七才の時である。

終戦の年の秋深き頃、日本蚕糸に勤めて居る卒業生の六、七人が前橋で落ち合った。其の時久しぶりだから、校長を囲んで一席設け様という話が持ち上った。場所を物色して見たが焼け野原でどうにもしようがない、いっそのこと御馳走を各自持参して校長宅におしよかけ様じゃないかと話がまとまり、僕が一番近いというのでお使いをすることになった。お宅に伺うと、正門から庭の方

一面に南瓜の蔓が這い廻って居り、如何にも食糧難を思わせるが、校長は元氣だった。皆のお願いを伝えると、破顔一笑、「それは近來にない結構のことだ、然し条件がある、僕の家には疎開者を加えて十五人居る、其の者にも配給が有るなら来てもよい」と。そこで万事お約束して帰った。ところが当日どうしても出張しなければならぬ用件が出来て、僕だけ出席出来なかった。其のお詫びの手紙に次の御返事が来た。

尊書拝読仕り候寒氣急來にも不拘益々御清康の段欣賀仕り候

先日会合に貴君のお顔の見えざりしは會員一同異口同音残念だと申し居り候予定よりも一人を増し八名の諸君全部参来せられ御馳走をウント御持参の事とてタラフク頂戴し小生家族までも余徳に潤ひ大に談じ且つ食ひ大に愉快を尽くして四時頃散会致し申し候皆々貴君御幹旋の賜と感謝致し居り候此義小生からも御礼申し上げ候閑暇も出来候はゞ御来遊被下度御待ち申上候具々も御健康にまかせ御無理なさらざる様御注意被下度候 頓首

十二月二日

針塚長太郎

小林啓介様

とあった。もって先生の面目躍如たるものを覚え憶い出す毎に私に先生の御遺徳に感泣し目の当り先生に御会いしているような感が致します。
(元丸興製糸KK取締役)

生きていた神さま

(大、七、蚕) 白 沢 幹

此の度千曲会が針塚先生の追想録を刊行するにあたり、甚だ恥ずかしい事ではありますが、私の一生忘れる事の出来ない想い出の一端を載せていただきます。

たしか大正十二年二月、嚴寒の或る日の午後八時頃、当時上田市弁天前にあった私の新婚早々の仮寓に、東京から一通の電報が配達されました。私は炬燵に入って居る新妻の前で、其の電報を開いた瞬間、エレベータで下りる時の様に体がすうっと浮く感じになって、身の毛がよだち、全身虚脱、全くの失神状態そのものゝ姿になった。これこそ私の今日まで此の様な驚きと、失望と、憎しみに満ちた一瞬はなかったのであります(これは自分の力ではどうすることも出来ない結果であったからだ)。やゝ暫くしてその場に居たゝまらなくなつて、ふらりと電報片手に吾が家を抜け出し、蟬の抜け殻の様なうつろな姿で、歩いて居ったことゝ思われるが、いつのまにか上田公園松平神社境内をさまよつて居りました。それに気が付いた時『よし針塚先生だ』先ず針塚先生に

会って話してみることだ、とやゝ元氣付いて、松尾町の先生の門を叩いた。そして先生の前に跪いてなにを云うて、何を論されたかは、今ははっきりした記憶はないが、兎にも角にも、之れで氣持を取り戻して、吾が家に帰り、不安ながらも谷底に眠る様な一夜を明かしました。

人事を尽して天命を待つと云うが、松平神社前を何回となく歩き廻ったことだったのだが、つい両手を合せて頭を下げる氣にならず、その行くさは自然に針塚先生のお宅だった。若しか私に針塚先生がなかったなら、私は公園下の鉄道に、或は千曲川に、それとも松平神社境内の老杉で此の世の者でなかったかもしれない。

こんな場合、自分自身を忘れ、最も偉大な何ものかに縋り付きたくなって、始めて神か、仏か、に救いをこいねがう氣持になるのではなからうか。私は敢て無神論者と云う訳ではないけれど、松平神社よりも針塚先生を信心し、満六十五才を迎えることが出来た今日、常に先生を想い出し、先生に満腔の感謝を捧げ、先生のお冥福をお祈りする者の一人であります。

昭和三十六年七月七日満六十五才の誕生日に

(元龜山製糸KK取締役)

新画帖に三枚目から画かれた先生

(大、七、糸) 石坂虎治郎

針塚校長に御指導をいただいたのは、学生時代の三年間は勿論、卒業した年の秋十月から四カ月間と、兵隊から帰った後母校の助教拝命中の三年四カ月とに亘り、相当長い間直接学校で御世話になったのであるから、沢山の想い出があつて然るべき筈なのだが、さてこれと云うて取り立てる程のものもない。

学生の頃は同じ上田町に開校の年から居たので、人格高潔な校長としての先入感もあり、講堂で時折聞いた訓示に接して立派な先生だなあと思つただけで、直接個人的に接する機会は無かつた。二年生の時一年下の養蚕科生がストライキをやつても何の感興も湧かなかつた。卒業の年即ち大正七年の秋から四カ月間其の頃某氏の資金バックによつて学校が委託研究の様な形で、当時我が国では初めてのアイデアである蛹油を原料としての硬化油製造を、川瀬教授が主任で数名の者が研究して居つた。それに私も校長や川瀬教授のすゝめで参加したので、再び勤務先の須坂から学校へ戻つた。そしてこの製造法が確立したなら新しく工場を設立する予定であつたので、非常に興味深く研究に没頭して居つた処、突然一月末に現役兵補欠として東京青山の近衛歩兵四聯隊に召集となり、一年十カ月を過ぎて、大正九年十一月除隊し母校に帰つてみると、入営中に欧州大戦後の經濟界の大恐慌により、夢見て居つた

硬化油の新事業も泡と消え、意外にも母校の助教授にならぬかとの校長よりのおすゝめ、一応お断わりしたものゝ、差当たり他に職も無きまゝお請けすることとなり、大正十年二月正式に助教授の辞令を受理した。その頃鐘ヶ淵紡績会社が製糸事業を始めることになって、三谷教授が鐘紡新町支店の顧問となられたのが縁で、時の新町工場長の長女と私の結婚談が成立し、三谷教授の媒酌により上田観水亭での挙式の際も、校長の御臨席を得て祝詞をいいた事、新生活スタートの思い出である。学生時代と違い、教官の末席をかけた三年有半は何かとお世話になった。羽衣会と云う職員及びその家族の謡曲会にも、新弟子として参加した。校長はスポーツにも理解があり、殊に柔剣道には御熱心で、寒稽古の朝など毎日御出席になって居った。秋の運動会でも職員競争には必ず参加され、勝敗は論せず、最後まで走れと其の範を示されたのは誠に立派であった。其の頃野球部の創設も許可されて、私は若年の故を以って初代野球部長を務めた事や、職員野球チームの投手として上田市医師会チームとの対戦などつけ加えて思い出される。

其の後大正十三年四月から、私も鐘紡に入社したので拝眉の機会は少なくなったが、転勤などの消息は欠かさなかった。それに對し必ず御返事を直筆で下さった事は大変なお心づかいであったろうと感激して居る。最後にお目にかかったのは先生が故郷へお帰りになってからで、昭和十八年の春、新町工場から福島市外の笹木野工場へ転勤の際御挨拶に参った時である。戦争も激しくなり御不自由も多かった事と思われたが仲々御元気であった。持参

の画帖に記念の一筆をお願いしたる処、心よく御承諾書いて下さった。此の時に画帖の新しいのを見られて、巻頭二枚程を空けてお書きになり、今後どの様な方にお願ひしても差支えない様空けて置くと、奥ゆかしいエチケットを示され、其の上社内の同窓生間で争いなど起さぬ様にと御教訓をいたゞいて帰ったのが、忘れぬ拝顔の最後であった。其の後私が上田の近く丸子鐘紡に来てから終戦当時同工場の特製品である絹紙の書翰箋や揮毫紙をお送りした処、大変お喜びになり「紙も少ない時代であったから依頼を受けたまゝ果たせなかった揮毫も漸く果たし得た」とて、私にも二枚お送り下さって其の読み方も態々御教示いたゞいたのが最後のお便りになったと思う。

(元鐘ヶ淵紡績綜合研究所長)

すべてが身心の鍛錬

(大、七、壱) 後 藤 幸 一

入学式 私は上田蚕糸専門学校養蚕科第五回卒業生です。私共が入学した時、入学式に先生が金モールの服装に威儀を正して、井上・新築・和田・石倉・遠藤・勝木・阿形・川瀬・原田等の先生方が、黒い教授服や燕尾服に身を固め、ずらりと並んで盛典を挙げ、そのおごそかな式後、一人一人宣誓署名した時は、何とも云い尽せぬ感激で、田舎出の中学卒業生の私にとっては、一生の思い出です。あの金モールの堂々たる先生の御姿、今なお目の前

に浮かびます。

寄宿舎 私共が入学した年漸く二階建の寄宿舎が、運動場の近くの畑中に建って私共が初めて入ったのです。私は二階の七号室で栃木県の佐藤尚雄・熊本県の木脇寅熊・長野県の石坂虎治郎・大分県の荒牧伊勢美・広島県の友重誠三君等と同室で勉強しました。三年の時私が炊事委員長を命ぜられ、寮生のために舎の裏の池に鯉を飼いました。残飯が多くあったのでそれを利用するのよいと思いついたからです。春入れた鯉が秋には見事に大きくなり八―九百瓦位になりました。校長先生が度々見にこられて御喜び下さいました。その秋、第一回釣会をして寮生一同で釣上げ、たらふく食べたものです。釣るのがおもしろくて皆大喜びでした。又食べて実に美味で皆から感謝されました。其の時寮生の食膳前に校長先生の宅へ初鯉を差上げましたら、非常におほめとおよろこびを賜わり未だにあんな嬉しかったことはありません。

剣道と庭球 私は剣道も庭球もやり、三年生時は剣道の委員長も勤めましたが、先生は剣道・柔道には非常に力を入れ、学生の身心練磨に尽くされました。八代海相が書かれた額「正其心」の掲げられた道場には、寒稽古中いつも正座して御覧になり、学生を御励まし下さいました。夜明の雪凍る寒中、まだ白々と明けかけた時見えて居られるのには、いたく私共を感奮させたものです。私は又庭球の委員もして居たが、練習中一度も御覧下さったことはありません。練習して居る近くを通られてもわき見して行かれる様でした。しかし石倉先生が部長をして居て、時々佐藤

利一先生が温顔をたゝえてラケットを手にして出てこられ、いかにも沈着で綺麗なフォームをなされたこと、三吉米熊先生がにこにこして、たびたび永く私共の庭球を見て楽しんで下さったことは何と云うても、楽しく又したしみの深かったものです。

寄宿舎生会 私共の寄宿舎はあの時分五―六十人位居たと思うが、一番印象に残って居ることは、夕食会の時校長先生や新築先生が御臨席下さって、食後先ず新築先生がああ白髪の温顔にお得意の論語の話を一席され、次に校長先生が洋食をいたゞく礼儀作法を実演しながら講義されたことでした。洋食のいたゞき方は針塚先生に教わったまゝ、今なおつゞけて居りますから、それが私には唯一の無形文化財です。

兎狩の時 傍陽の官林に寒中兎狩に全校大挙して行ったことがあります。先生は狩服に教職員方一同を引率して参られました。井上先生はあの太った短身に汗びつしりで、参加されました。傍陽の村家に分宿して夜明けに出発し、害獣駆除とあって附近の狩人三十人位鉄砲を持って参加して呉れ、それに学生側は兎網一張、他の大部隊は勢子で山の下から兎を追ひ上げる。一度追って兎三十余頭、山鳥・きじ十羽位とりました。私は先頭に立ちました積雪一米位あり、唐松の森林帯の側は、人の通った道かと思うほど踏み固められた道がついて居ました。これは兎が通ったあとです。それほど沢山兎が居ったのです。追ひ始めると鉄砲が方々でなり、兎が打たれるのですが、山頂に登って見ると逃げた兎は真っ白い雪の中を弾丸の如く、白いの、黒いの、灰色のが走って行

く。夕方凱歌を挙げて帰校し、翌日寄宿舎で皆で会食した。うまかったのです。たらふく食べました。かくの如く針塚先生は古武士の意気と心身を養うことに非常に熱心でした。御陰で私は今も丈夫で病氣一つした事がないのは何よりの幸福です。

謡曲 先生は謡曲がお好きで羽衣会を組織され上田母校の職員及びその御家族、卒業生の有志の方々と、時々観世流の謡曲温習会をして樂しました。私は卒業するとすぐ近くの篠ノ井町にある長野県更級農学校に奉職して十二年居ました。その時更謡会と云う会を作り司会して居りました。その先生は高橋清輝先生と申し、羽衣会の先生で、出身が私の居た篠ノ井町の關係から、私どもも更謡会の先生にお願ひしたのでした。上田と篠ノ井の間を往復される高橋先生も好都合、私共も好都合でした。私はその關係で時に上田母校にも行って羽衣会にも御邪魔させていたとき、先生方の素謡や御婦人方の仕舞も拝見しました。なかなかよく謡いよく舞われるのでびっくりしました。或る時高橋先生の指導で篠ノ井に羽衣会の公開温習会があり、大そう好評を博しました。特に更級地方は青年・中年・老年の方々何れも謡曲が盛んな所で、どんな会でも誰でも一曲一指仕舞を舞う所です。特に婚礼の席では謡曲は付きもので素謡も仕舞も上手なものです。針塚先生は先生御自身も御奥様も永い間樂しまれましたから、観世流の大家と云う御趣味でした。あの体格の立派な先生が謡い出すとすこぶる壮重幽玄そのものでした。又御奥様は丈高く色白、その上調和のとれた非常に立派な体格の美人で上品でした。学生であり卒業生で

ある私どもにも、非常に親切丁寧にして下さいました。この方が仕舞を舞われる時はほんとうに、手振り、足の運び、五体の動きは、天津風に誘われて舞う天女そのまゝの様で、人をして恍惚たらしめました。私はいつも鶴ヶ岡八幡宮で静御前が、昔を今になすよしもあわれこいしき吉野山かなと、義経を慕って舞われたのもかくやと思われました。
(元福島県会津農林学校教諭)

八月二十四日付の卒業証書

(大、七、蚕) 中島 静太郎

母校創立当初における大教育家 わが針塚長太郎先生の御事績は、其の事業の面からみても、又人格上の面からみても真に偉大なものであることは、爰に喋々の要はない。それを語るには自からそれぞれ人があるであらう。従つて狭い視野からではあるが、私の眼に映じた先生の一、二について申上げてみたいのである。

農場実習 我々の入学の頃は、第一回の卒業生が出たばかりで、創立の氣風がなお盛んであり、冬季に於ける実習は、殆ど毎日天地返しをやり、桑園の区劃整理が日課であつた。これに馴れない私は、手に豆がいくつとなく出来て弱つたものである。幾度か学校を止めようと思つたが、それはその都度いつも農場に見えて無言の内に激励して下さつた先生の溫容と凜然たる勇姿とに救われたのであつた。

武道の寒稽古 当時の寒稽古は、午前四時頃から七時まで、

酷暑について三週間続けて行われたものである。剣道部員であった私は勇躍これに参加したが、零下一〇度の寒い朝など、暗い中で道場に素足で立つと、実に足が羽目板にはりつく思いがしたものである。我々はヤケ半分で大いに暴れたものであるが、一週間も経つと寒さと疲労の為に、欠席し勝ちにならざるを得なかった。然し校長先生は、毎朝時刻を違えず御出席になり、洋服のまゝ端座せられ、一時間もそれ以上も学生の稽古を熱心に御覧になり、微動だもせられなかった。これには誰も頭が下がった。私が三年間曲りなりにも、寒稽古に耐え得たのは、実に此の先生の尊い御英姿に導かれたからである。

生徒との交流

多くの場合、厳正そのものであられた先生も、学校の行事や学生の集会等に出席せられた場合は、実に和やかであつた。よく話され、時にはよく蜚声をはり上げて歌われたものである。今日と違つて音楽の発達して居ない当時、我々の歌つて居たものは、多くはデカンショか又はこれに類似のものであつたが、先生は此のグループに入つて生徒とその行を共にせられた。斯くして知らず知らず先生と生徒との心が完全に融和したものである。真に和氣霽々と言う言葉のあてはまるものであつた。先生から習ひ覚えた歌の一、二は今も尚私の頭に深く蔵せられて居る。

後述する様に私は卒業後上田を遠く離れた九州から関西にあつて、農業教育に従事した関係上、卒業後上田に行く機会は比較的に少なかった。その為直接先生から御指導をうける場合も亦多い

とは云えない。けれども在学中三年余の間陰に陽に受けた御訓示、特に前述の数項の如きは、深く私の脳裡に徹したので、此の心を持ってわが心とし専ら生徒を導いて来た。若し私の在職中多少でもよい点があつたとすれば、その教育の根源は全く針塚先生の根本精神に従つたものと云わざるを得ない。創意がないと云われてもよい。私の教員生活の一生は少しも悔いない積りである。

八月の卒業 さて私は大正三年四月、養蚕科第四回生として入学したのである。然し或る事情のため、徴兵猶予が出来なかつたので遺憾ながらその年十一月休学して入隊したのであつた。従つて一年おくれて第五回生となつたのであるが、当時の軍律上、第二学年・第三学年になつて各々三カ月宛入隊を余儀なくせられたため其の間の実習が出来なかつた。それで更に実習をする為学校に残ることになった。だから五回生卒業後、六回生の諸君と共に八月迄蚕室に起居したものである。従つて、卒業証書の日附が八月二十四日になつて居るが、恐らく卒業生中他にこんな日附の卒業証書はないのではあるまいか。

この問題については先例のないことであつただけに、各先生方もし心配せられ、私の為に数回に亘つて教授会も開かれた。しかもこの間に処して針塚先生のなみなみならぬお心添えの結果、遂に教授会も円満に解決して、めでたく卒業させて頂き、熊本の農学校に赴任することが出来たのである。

教育視察の御便宜と処世上の指針

爾來御便りすれば必ず丁寧に御返事があり、其の度毎に、時宜に適した御教導に浴し乍ら、

十余年の星霜はすぎた。昭和の当初全国的に農村は不況の底に沈み、国内にはただならぬ様相を呈する様に感ぜられた秋、私は岡山県から長野・群馬の教育視察を命ぜられたのである。とるものも取り敢えず、準備もそこそこに上田の母校に駆けつけ、おこがましくも先生に援助をお願いした。実に絶えて久しい御姿であった。髪髪に多少の白髪を拝したが、風丰は次第に重厚味を加え、不肖の私を慈顔を湛えて迎えて下さった。

此の時校長室の一隅に、生れたばかりの数匹の小犬が母犬に抱かれて乳をのんで居り、先生が南画風の筆致で「犬に見えるかね」と笑いながら写生して居られたのが印象的であった。

かくて御多用中にも拘らず、各方面の諸名士に紹介の勞を執られ、多大の便宜を与えて下さったのである。其の結果私なりに調査を了え、相当に困難視せられたこの任務を恙なく完うし得たことは未だに忘れられない感激である。

これを記念し併せて私の処世上の指針とする為臆面もなく揮毫をお願いした所、御快諾の上次の如きものを頂いた。曰く、

慈故能勇、儉故能広、不敢為天下先、故能成器長。

句は書経の内にある様だ。その当時養蚕科五回生一同が、会名をつけて頂く様に御願いした所「慈勇会」と名付けて下さったが、その語源は実に此の書に因由すると思われた。

私はこれを無上の宝物とし、以来三十余年常に床の間に仰いで座右の銘とし、以て先生の温容を偲ぶよすがとして居る。

(元岡山県勝間田農林学校長)

忘れ得ぬ御訓誠

(大、八、糸) 唐木田 藤五郎

私が小学生だった時、シベリヤ軍騎横断で有名な福島安正陸軍大將がやって来て馬上から「孔子も釈迦もクリストもソクラテスも夫々前人未踏の偉大事を成したが、彼等として只の人間であって、決して全智全能の神でもなければ仏でもなかつた。私は松本藩の貧乏武士に生まれ学歴も背景もないが、福島安正は全世界に只一人の存在だと言ふ意氣と信念を以て、五尺一寸にも足らない短身で只一騎、猛獸と虚無党のむらがるシベリヤを踏破して東海の小孤島日本の名を世界に知らしめた。神は無用の人間を惜しみなく地上から抹殺するが、必要な人間は決してお引取りにならぬものだ」と熱心に話された事を忘れられない。

神様は人間の有用と無用とをどこで見分けるのかと疑問を抱いて、小泉蚕業一年生の私は信州から東京まで五十里の道を三日半でテクリ、親しく福島大將の膝下に教を乞い、明治廿五年二月十一日紀元節をトシベルリンを出発して以来一年半に亘り、文字通り九死一生の慘憺たる旅行談を聴き感激の涙にむせんだ。

世界を知るには先ず東洋を知らねばならないとする私の信念は此に確立し、小泉蚕業から上田蚕糸専門まで数年間の学生生活中に、誰にも相談せず旅行資金壹千円蓄積は並大抵の苦勞でなく、

酒や煙草は勿論菓子さえ無縁だった。大略準備が出来た大正七年五月八日初めて上田鷹匠町に三吉米熊先生をお訪ねして、東亜大陸旅行の計画を披瀝し、針塚校長へは適宜伝言をお頼みして、其の日に東京へ出て、福島大将や外務省の松島鞏秘書官（後のイタリヤ大使）から紹介状を頂き、單身欣然として七カ月に亘る東亜大陸踏破の旅へ飛び出した。

十一月二十九日夏服夏帽子のまま只一枚蒙古で買いためた羊毛皮を携えて帰校した私は、「唐木田は気の毒に馬賊に殺されたそうだ」、「いや風土病で倒れたそうだ」、「上海で何か事業を始めたそうだ」など数々のうわさを耳にして、ひそかに微笑したが、早速針塚先生をお訪ねして、ざっくばらんに私の心境と旅行の大略を申上げた。先生は暫く黙して何も言われなかったが、やがて徐々に口を開いて「よく命があつて帰つて来たナ。一個の人間として君がやった事は恐らく誰にもまねの出来ない偉大な事だ。然し私は多数の教職員や学生と団体生活をするものの長として、無条件に賛成する訳には行かぬ。恐らく今後の学生に君の様な計画的大胆さを以て行動するものはあるまいから、学校に悪影響を及ぼす事はあるまいが、君自身の性根と社会の動きを適応させる事を忘れたら、君の生涯を台なしにする事明らかだ。呉々も命がけの旅行成果を今後に活用して呉れよ」と諭された。

想えば大正七年の晩秋の日の事で、随分古い物語だが恩師針塚長太郎先生は今日猶私の心の中に潑刺として生きて居られ、洵に千万無量の感激を禁じ得ないものがある。

○

私は毎月東京のほこりの中からうまい空気を吸う為めに、信州屋代の本宅へ帰るが、その応接間に長井雲坪えがく所の山水の一幅がある。是れは針塚先生が私の家へ最後に泊まりに來られた折のみやげに頂戴したもので、墨絵に淡紅を加えた大胆な風景と細心な筆致とに、ほかに針塚先生を彷彿たらしむるものがある。

私は私の人生で三人の立派な校長に恵まれた。日露戦争直後のけわしい国運に直面して、小学生だった私は、二宮尊徳の信者だった宮入源之助校長先生から子供心にも解るように、「身を修め家を整えることが国を治め天下を泰平ならしむる第一歩だ」と言うことを教えられ、小県蚕業学校長の三吉米熊先生には、先生が東京帝大農科大学第一回の卒業生として、立身出世思うままの環境に恵まれ乍ら、長野県に赴任してフランスへ留学し、パスツール博士に蚕病を学び、小県蚕業学校を創立して全日本は固より全東洋の学生を教え、上田蚕糸専門学校創立委員として後輩針塚校長を扶け、淡々として終りを全うされたお姿に無限の教えを垂れられた。

針塚長太郎先生に至っては盛岡高等農林学校教授としてドイツ留学から帰り、文部省視学官として名声高く、齢四十に満たない新進気鋭以て、上田蚕糸専門学校の創設に苦心し、優秀な学者を集め、当時日本の国脈と言われた蚕糸業の、科学的発展と人材の養成とに終世をかけられた。独乙留学時代を想起しゲルマン民族の不撓不屈を讀え「人は艱難に生きて安逸に死す」と言う言葉を

再三再四訓えられたことをどうしても忘れない。

私は信州屋代の宅へ針塚先生を三度お迎えした。第一回は昭和十五年八月十八日、紀元二千六百年を祝福した年であり、原田兵衛（蚤一）・小林茂雄（糸一）・飯島正胤（蚤二）・栗林悦（蚤三）・倉沢美徳（蚤二）・中沢忠（糸一）・丸山忠良（糸一）・横田三平（糸四）・小林勲（蚤六）・勝又藤夫（蚤九）・若林茂一（蚤一二）・依田寛之助（糸一〇）・金沢勇（蚤一七）の諸君と師弟水入らずの忘れられない楽しさだった。

第二回は其の翌年昭和十六年同月同日、原田兵衛・飯島正胤・林貞三（糸三）・森本為之助（蚤七）・山口正紀（糸七）・永井真吉（蚤一八）の諸君であって、大東亜開戦直前のあわたとしさを忘れて、夜もすがら語り明かし、第三回は終戦直後の昭和二十一年十月十二日で、針塚先生も七十六才となられ、私の家の庭で撮した写真には栗林悦、飯島寛（元母校書記）、加々井精喜（蚤一三）の諸君の顔が針塚先生を囲んで居るのが懐かしい。

想い出は中々尽きないが約束の紙数が尽きた。故きを温ねて新しきを知るのよすがともなり、新しい祖国の新しい運命を打開する一助ともならばと念願し乍らペンをおく。（元代議士）

御自慢の名刀惜別の愛刀

（大、八、蚤） 猪坂直一

針塚先生は多趣味の人であったが、特に刀剣を愛好して居られ

た。

先生刀剣趣味は何時頃からであったかは知らないが、教授の大滝照太郎先生の影響が大きかったのは事実だ。大滝先生は学生（帝大工学部）時代から刀剣が好きで、当時の有名な刀剣研究家今村長賀氏に直接教えを受けたという事だが、その後も中央刀剣審査会のお歴々と交際して刀剣の研究をつづけ、上田に來られた頃は、既に刀剣界で相当に知られた存在であった。この大滝教授によって針塚先生の刀剣趣味が嵩じ且つ鑑識も進んだ事は言うまでもない。

私は歴史趣味から武器の研究に入り、特に刀剣の研究に熱中したのだが、私の師匠は主として東京の本阿弥光遜翁であった。針塚先生は私によく「大滝君は本阿弥に劣らぬ鑑識家だから教わるがよい」と言われた。私も新刀（徳川時代の作刀）に就いては大滝先生が本阿弥以上の鑑識家である事を信じていたので、新刀を求める時などは大滝先生の意見を聴くことが多かった。針塚先生の愛刀は大滝先生の影響で殆どが新刀、それも美術的であると共に、あくまで実用的であるという事を心がけて居られた。「刀は本来武器だからね」というのが先生のお言葉だった。

先生のお宅へ伺うと、要件が済むか済まないかに刀をとり出して見せて下さった。左行秀、石堂運寿は一、長運斎綱俊など今も印象深い刀だが、先生が最も自慢とし終生座右を離されなかったのは二代康継の短刀であった。この短刀は長サ九寸六分、萬蒲造り、直刃に小足入りという康継独特の作柄だから、それだけでは必ず

しも珍品とは言えないが、刀身の表に当時の有名な金工越前紀内と見える眞の竜を一杯に彫り、裏に「貧亦風流」と太々と彫りつけてあるのが正に天下の珍で、新刀好きなら飛びつくのは勿論だが、古刀本位の私でも垂涎三尺という名品である。(本書の口絵参照)「貧もまた風流とはいゝじゃないかね」と言つて「それは僕のことなんだよ」と言いたげに、自慢されたお顔を私は忘れる事が出来ない。先生は子弟に愛刀を惜しげもなく下さったものだが出来ぬ。先生は子弟に愛刀を惜しげもなく下さったものだが(原田兵衛「蛭一」君に五字忠告、唐沢正平「蛭二」君にも肥前刀、林貞三「糸三」君に武州金蔵など)これだけは誰が所望されてもお手離しなされなかつたようだ。何時だったか私は本阿弥先生に会つた際この短刀の話をすると「それはお手放しになるまいか」と言い、「値段はいくらでも構わんですがお話できませんか」と懇望しきりだった。勿論私は先生の愛蔵第一の珍品をおねだりするやうな失礼は出来る筈がなかつた。

しかし先生はこの珍品以上にも愛蔵された刀を処分せられた事がある。この事を語るのには私として甚だ心傷むのだが「先生と刀剣」に就いて語るにはこの事件に触れないわけにはゆかないのだ。それは何時であつたかハッキリ憶えていないが林貞三氏が、拙宅を訪れて「針塚先生が少し纏まつた金が御入用なので刀剣を処分したいと仰せられるが相談に乗つてくれ給え」と言う。「いくら位ご入用なんですか」と訊くと「千円位」と答えた。この千円の使用はお質ねしなかつたが私はほど想像できた。(この事は林さんが書くかも知れない)「先生は左行秀を手離してもよいと仰

しゃるがあれは千円にならないだろうか」と林氏は附け加えた。私は言下に「行秀なら千円はいゝです。佐藤君(嘉三郎・藤本蚕業株式会社社長)に話して見ますが恐らく喜んで承諾するでしょう」と言つた。先生の愛蔵刀中左行秀は私共愛刀家の間で評判の名品だった。これは新々刀(徳川末期の作刀)ではあるが、非常な傑作で恐らく行秀の最高傑作と云つてよいものだ。それに拵え(外装)が見事で、セツパ、ハバキ共に純金、目貫も小柄、筈も悉く純金という贅沢な所謂黄金作りである。

林さんが帰つたあと私は直ぐ佐藤君を喚んで林さんのお話を伝えた。「どんな刀か知らんが針塚先生がお金がお入用というなら御用立てしよう、刀はどうでも宜しい」と快諾した。私は佐藤君から金千円を受取つてこれを林さんに届けた。その日だったか、翌日だったか、林さんは左行秀を持参された。額に汗をにじませながら「僕はね、この刀を頂いてくるのが辛かつた。先生がこれを抜き放つて愛するものに別れを惜しみ、ジツと見入つた後鞘に納め袋に包んで、さあお持ちなさいと渡された時は泣けちゃつた」と言うのである。ごもつともである。私は愛刀家として先生のお氣持がよく分るので林さん以上に感激した。この刀は一応佐藤君に渡すがいつかは先生にお返ししなければならぬと心に誓つた。

が、この私の願望は空しかった。それは先生が郷里へ移転された後の事であるが、上田へ本阿弥光遜翁が見えた際、佐藤君が行秀を見せると本阿弥氏は帰京後しきりに佐藤氏にこれを懇望し、

遂にむしり取るようにして買取ってしまった。私は後にこの事を知って先生に対するひそかなる誓いが、空しかったのを悲しまざるを得なかった。

この行秀は其の後本阿弥氏より神戸の有名な愛刀家光村氏の手に渡って、重要美術品の指定を受け、暫く国立博物館の刀剣室に陳列されてあった。私も佐藤君も悔恨に堪えない失策で、先生の霊に対してもお詫びのしようがない。

(猪坂繊維工業所社長)

製糸科実習部のうら話

(大、八、教) 茨木 こう

創立二十五周年祝典と勲一等昇叙 私は大正八年教婦科課程を修業して、大阪中之島の大阪高等工業学校応用化学科朝比奈晃十先生の研究室に勤務し、加美好男様等の人造絹糸研究のお手伝いをしながら、将来遠大の希望に胸を燃やしていたのですが、脚気のため故郷に帰り、暫くして母校に勤務いたすことになりました。そして針塚先生・井上先生・伊藤先生と、三代の校長先生に教えられ、又三谷先生・大滝先生・林先生・蒲生先生と四人の科長さんにお仕え致しました。思えば人生の大半を母校にお世話になり、蛹の臭と共に暮したことになります。その間昭和十年十月舉行された創立二十五周年祝典の模様が、不思議な位鮮かに脳裡に刻みこまれて忘れられません。学校の祝典と言え、地方を挙げ

てのお祝いで、昼は常田獅子、夜は堤灯行列と、見物人で人の山を築きました。母校の存在はこの地方の限らない誇りだったので。それもこれも針塚先生の下上に別なく、大らかな神の如き慈愛に満ちた御薫陶により、校風の基礎を、最も理想的に、正しく強く、そして美しく築き上げられて、幾多有為の人材を実業界・官界・研究界に送り出された結果であると、確信致しました。私は長い年月、この麗しい雰囲気内で生活させて頂いたので、及ばずながら自然のうちに、知らず知らず、教養の芽が育まれておりましたことは、今更ながら尊い賜と、日夜感謝いたしておる次第であります。

先生が勲一等に叙せられた時、「これは皆様の御協力御援助の結果でありますから、この栄誉は私すべきではありません」と仰せられ、校内のすみずみまで全員に、青と朱の染め分けの縮緬地に、「皇恩治四海」と染め抜いた袱紗と、純白な磁器の花瓶を下さいました。いつの世にも自分だけの力と過信する人の多い中で、この二つの記念品を拜する毎に、先生の御人格が偲ばれます。

当時の製糸科実習部 針塚先生はすべての人に差別なく、まごころと温情を以て接していられたので、先生への追想は数限りなく皆様の文章に盛られて居ることと存じますので、私はこの際学校の特殊部門とも言うべき製糸科実習部の思い出を、二、三書かして頂きます。

朝の七時から午後四時まで、来る日も来る日も、きびしい教育の下にかりそめにも喜怒哀楽を面に出さず、蛹の臭に満ちた蒸気

を浴びながら、実践躬行・汗の体験を続けたのであります。青春の憧れを、真黒な実習服と袴とに包み、全く修道院そのままの精進でした。然し時間外には自由に、春なれば常田池の若草の上に、のびのびと手足を伸ばし、誰彼の噂に花を咲かせて笑い興じ、夏は千曲河原に、三々五々友を呼び、「ダニエーヴ河の漣」や「宵待草」など、声を張りあげて合唱し、日頃のうっぶん(?)をはらしたものでした。

一方教婦の先生方は、西ヶ原(東京高蚕)出の美人揃いで、いつも眼にしみる様な白足袋をはき、人知れぬお化粧もしている様でした。おしゃれな私の友は、その真似をしたが、ホーカー液(当時の化粧乳液)をつけたところ、ほんのりと白く美しくなり、よい香りもしたので、呼び出されて「あなた方にはまだ早過ぎる」と叱られて、真っ赤になった時の顔は、花嫁さんのようにきれいでした。それからその友は、「ホーカー液」のあだ名で呼ばれました。その頃のあだ名は、ユーモアたっぷりで、なつかしく楽しい思い出の一つです。つぎにその一部を列べて見しましょう。

男性側 お天神さん、お嬢さん、心海坊主、かるめ焼き、汗ら

女性側 モダン婆さん、ぜっぺき、だっく、ちんくしゃん、しやあしゃあ、小石丸

誰かどこかで思い当る人もあることと存じますが、なかなかよい名ですから、うらまれることは、ない筈です。とに角四十年前は男女の交際など至って厳しく、夫婦でも並んで歩けば、「おし

どり夫婦」と冷笑される始末でした。従って、私どもは実習に見える学生さんと直接言葉を交わすことなど、絶無と言ってもよい程でした。ですから、折角愛情のプレゼントに、すずらん香水を頂いても目薬と間違つて戸惑つたり、ラブレターを先生に取り上げられたり、貰った本人も何のことか見当がつかなかったり、そうした逸話や思ひ出話は、それでも可なり多かったのです。時折同窓会などで親しい心の友に会った時「あの時あの人と結婚していたら、今頃はアメリカで堂々たる令夫人だったのに」なんて、大笑いすることがあります。夢も亦楽しからずやです。厳肅なべき針塚先生の追想としては、甚だ不謹慎な一文、お許しを願います。

(元上田蚕糸専門学校製糸科教婦)

怒りをうつさず

(大、九、蚕) 土岡 光郎

入学許可書

大正六年四月私は養蚕科に入学を許された。満四十四年前のことだ。入学許可書は一銭五厘のハガキにガリ刷である。今でも大切に保存している。

上学第三〇号

本校養蚕科ニ入学ヲ許可ス

大正六年四月四日

上田蚕糸専門学校

校印

追テ四月十一日午前九時教務課ニ出頭スベシ
尙自宅ヨリ通学シ得ラル、モノ、外ハ全部寄宿
舎ニ収容スベキニ付右様心得フベシ

今頃見ると「追て書」などはかび臭いお役所風の感が強い。

ストライキ 昨今のスト全盛時代から見ると、其の幼稚さと戦略作戦の下手なことで噴飯物であるが、第一次欧州大戦中の出来事で、未だ民主主義の萌芽さえ殆ど見られなかった大正七年二月、信州の一角でストを惹起したのだから珍無類と言えよう。事の当否は別としても全国教育界へ大きなショックを与えた。この事については昭和二十六年発刊の「常陸」特別記念号に同級生猪坂直一君の筆で「蚕専草創当時」に書かれてある。重複するところもあるがお許し願いたい。養蚕科一年生だった私達三十九名が血判連盟状を作り結束して針塚校長の退陣を迫ったのである。その時の声明並に宣言は次の通りであった。

肅啓

余寒未だ酷しき折柄尊堂愈々御清穆の趣奉慶賀

候

却説今般我等養蚕科第一学年生は現上田蚕糸専門学校内部の革新を期し茲に断乎たる決心を以

て強固たる団結の下に現校長針塚長太郎氏の排斥運動を開始し同氏に去る十七日辞職を勧告致し候就ては宣言書相添へ候間吾等の立場に誤解なき様御願申上候

頓首再拝

大正七年二月十八日

上田蚕糸専門学校西寮内

革新回本部

殿

宣言

教育家ノ天下ニ立ツ所以ノモノハ至誠一貫シテ万人ノ師表ニ出ヅルニアリ上ニ対シテハ阿諛ヲ事トシ下ニ対シテハ權力ヲ乱用シ私恩ヲ売リ小策ヲ弄シ世人ノ耳目ヲ欺瞞シ恬然恥ヅルヲ知ラザルノ徒焉ゾ能ク教育ノ重キニ任ジ吾國ノ為メニ尽スヲ得ンヤ上田蚕糸専門学校校長針塚長太郎ハ素ヨリ無為無能ノ輩ニシテ今日能ク教育界ノ要路ニアル所以ノモノハ権門ニ出入シ其ノ鬚塵ヲ払ヒ膏養之徒ヲ集メテ朋党ヲ樹立シ硬骨ノ士ヲ斥ケ權力ヲ乱用シ私恩ヲ売リ小策ヲ弄ビ己ガ實ヲ他ニ転嫁シ世人ノ耳目ヲ欺瞞セシニアリ斯クノ如ク教育家ノ天職ニ悖戾スルノ徒ヲ吾人

悪ゾ能ク推戴シ大道ヲ闊歩スルヲ得ンヤ茲ニ於
テ吾等驟然トシテ起チ我校ノ為メニ彼ヲシテ職
ヲ去ラシメ我校ノ面目ヲ一新シテ光輝アル校運
ノ隆盛ヲ期ス

熟々顧ルニ我上田蚕糸専門學校ハ明治四拾四年
文部省管下ニ設立セラレ設備万端ニシテ良師済
々タリ斯界ノ學府トシテ世界ニ冠タルモ幾何モ
ナクシテ良師相繼ギテ去リ衰運ニ趣キ動モスレ
バ他ニ壓セラレントス此レ皆長太郎ノ天職ヲ全
ウセザルニ起因セズンバアラズ

茲ニ我等断然トシテ長太郎ニ自決ヲ迫ルハ固ヨ
リ教育界ノ不詳事ニ属スルト雖モ為メニ校運進
展シ校規刷新ストセバ我が校ノ慶事ノミナラズ
亦天下ノ祥事ナリ苟モ彼ニシテ一片ノ誠意アラ
バ速ニ冠ヲ掛ケ罪ヲ天下ニ謝スベシ

スト当面の責任者は總代岸本元治(和歌山)と副總代山本岩三郎
(岡山)、それに參謀格では首藤雄平(大分)可兒良夫(岩手)間宮
成吉(岐阜)などが居た。當時の蚕糸業は日本産業界のトップ花
形であつたから、入学希望者は全国から集まり割合頭のいゝ秀才
も多かった。私は始終小さくなつて蔭廻りばかりしていたが、ス
ト中は西寮に立籠つていて余暇が多かつたので、徒然なるまゝに
作つたストの歌が案外皆のお氣に召し、籠城中朝から晩まで其の

歌を合唱されたのは大弱りだった。ストは一週間続いたが、四圍
の形勢は日に悪化してストに組せず、教授陣や先輩等の説得が積
極的となり、情理を尽し声涙下る鶴田定平先輩等の情熱にはスト
組は一ころに参つてしまい、無条件降伏となつた。大部分は無期
停学の処分を受けたが罪狀に應じて順次解除された。私も二週間
ばかり停学されたように記憶している。猪坂君はこのストを常陸
誌上で「光輝ある蚕專史上の汚点」と述べているが、其の動機は
宣言にもある通り学生側は私心から出発したものでなく、只管学
校発展の念願からであつたことを此の際改めて強調して置きたい。
思い出の書翰 針塚先生は特に勝れた達筆家であつた。数十
通いたゞいた書面の何れもが墨痕鮮かな能筆ものである。大正十
二年私が中外商業新報(現在の日本經濟新聞)に入社した時戴い
たものはこれだ。

拝啓 一月廿五日付のお手紙は疾に拝見仕候雜
務に紛れ御返事延引の段平に御免被下度候先以
て筆硯益々御健勝の儀慶賀至極に奉存候適材を
適処に得たることは即ち貴君の事を申ししたるも
のなるべく祝福仕候 愈々横浜へ移りなされ絹
糸業方面の御担任をなさるよし洵に結構のこと
に御座候独り貴君が御愉快に御從事なさるのみ
ならず斯業界も専門の貴君によりて正確に有益
なる報道と指針とを得て如何許りか大なる裨益

を得らるゝ事と欣喜仕候

何卒愈々御自重なされ東洋に於けるタイムス記者を以て自任せられ抜群の御精勵を以て一段御

發展あらん事を奉祈候

拜具

大正十二年二月八日

針塚長太郎

土岡光郎殿

この年の九月一日が関東の大震災火災である。私の勤務していた中外商業横浜支局は跡形もなく壊滅し従業員の大半は死亡した。

不遷怒

卒業の際先生に乞うて処生訓となる額を揮毫して貰った。論語の一句が「不遷怒」（いかりをうつさず）である。勤務の都合から度々転宅したがこの額だけは常に持ち歩いて客間に掲げ今日でも先生のご遺徳を仰いでいる。

（広島相互銀行常務取締役）

悔恨と懺悔の記録

（大、九、蚕）

山本岩三郎

ストライキの発端

大正七年二月僕等の一学年三学期の或る

寒い夜更け、寝ている僕を誰か障子の外廊下で小声で呼ぶ様子が目覚めた。同僚は勿論寝込んでいる。入って来たのは小山田啓三君（蚕七、故人）で内密に話があると云って外へ招くではないか、同君は当時勝木喜薫先生の助手を兼ねていて同家に止宿して

いた。さて同君の話を聞いて見ると驚いた。勝木先生が今度辞めるらしい。自分の意思からではないとも云う。よい先生が辞めて行くのは学校のために残念だから、何とかならないものかというのだ。一体あまり親しくしている間柄でもない同君が、わざわざ僕の所へ何故こんな大事を打ち明けに来たかを考えて見ると、僕や聞宮成吉、土岡光郎、故可児良夫君等が勝木さんに保証人になって貰っていた関係だからだろうと考えた。大きな過誤がここから起こった。まことに忌むべき学校騒動への火が点ぜられた。この事件の判断を誤り、やがて主動的立場をとった僕が、永久にその責任を負わねばならぬ。後になって考えると小山田君が勝木先生から聞いた話は、青年の故にうけとり方が純情に過ぎ、之を受けとった吾々が一方を弱者に仕立てて、無分別な一本気から歪んだ方へ引張ってしまったのだ。勝木先生はストライキのさなかに蚕業試験場に転任して下った。

騒動

隠密なうちに二日位で計画が進められた。革新団とずんだ名称をつけ、養蚕一年のみ全員血盟団を組織し、学校改革を標榜して立った。しかしそれは勝木先生留任という形はとらなかった。思い出しても冷汗が出て罰が当たりそうだが、針塚先生の弾劾と自肅を掲げ、巻添えを喰った諸先生は北島敏雄、新築金橘、三谷徹、和田仙太郎、石倉新十郎の諸先生方であったと思う。ストライキの前日最終時間、丁度遠藤保太郎先生の植物学の講義が終ろうとして、先生は例の温顔をもって「今日はここ迄にする来週は又」とか何とか云われた様だった。途端に学生一同顔を見合

わせニヤニヤ笑ったものだ。先生も妙にそぐわぬ空気を察せられたか、暫くためらい気味に例のホッホと微笑され乍ら、全体を一渡り見廻されたのを覚えてゐる。之が最後の講義で一同は昨夜常入の松月(葉子屋)の二階で勢揃いして血盟し、全員一致の行動に移る態勢になっていた。騒動の宣言文は首藤雄平君というが物した。多少漢籍が出来たためか、悪文ではあるが雄勁なものだった。「針塚先生に訊す」の文は箇条書きで、肅正を要望した様なものだったと思う。之は僕が書いた。さて翌日は日曜だった、一同午前八時頃養蚕科教室に勢揃いし、岸本元治君と僕とが針塚先生の宅へ伺い一同として先生に来て戴くことの要請の使者となった。松尾町のお宅は日曜であり朝まだ早いので、お子さんの多い先生のお宅は何かと忙わしい様に見受けられた。大きなご愛用の紫檀の机を中に相對して坐した。僕から先ず来意として一年生一同是非教室に於て先生にお目にかかりたい旨を告げた。先生は大事が起つてゐると思ひ設けて居られなかった。事実何人にも部外の者には知れてゐなかつた筈だ。一瞬先生の顔に緊張の色が走つたかに思われたが、やがて平靜に徐るに「こと学校に關しての問題ならば生徒が口にすべきでないから行けないが、問題は何か」と尋ねられた。一寸困つたが「学校のことでない」旨嘘を答えた。(先生に關してのことだと云ひ逃れるつもりだったが云わずに済んだ)。先生は「よろしいそれなら出かけるから待つて居れ」とのことだった。やがて先生は養蚕科教室へ來られた。一同は固唾を呑んで肅然と緊張してゐる。演壇に上られた先生に「今回学内革

正のために吾々一同が血盟して立つた。之は要望書である」と云つて先きに書いた「先生に訊す」の数カ条書きのものを手渡した。先生は靜かに見て居られたが、音調極めて明晰に「諸君は前途ある青年だから輕率してはならない。呉々も自重して盲動してはならない。又この文に對しては返事はできない」と付け加えて例の如く颯爽として教室を出て行かれた。さぞ先生は無知の書生どもを哀れと思われて、心で泣かれたことだろう。其の日の夕刻養蚕科一年は、本寮・東寮は勿論通學生も一齊に西寮に引き揚げて籠城した。寮長は部外の者として外へ出て貰つた。學業は完全に放棄された。惡童連の合宿で時々飛ばすアジは、騒々しく常田の杜にこだまする有様で手もつけられない。学校からは音も沙汰もない。斯くて学校との對峙は十日位も続いたろうか。この間、間宮・可兒・猪坂直一・土岡君等をはじめみんな内部的にいろいろ活動したようだった。授業を放置して十日位経つた時、学校から全員無期停学の知らせがあつた。そして學生は其の後の処分を待つてゐることだ。二週間に近い騒動は果々氣なく終末に近づいた。悲愴なる相談の結果、合宿を解散し各自の古巣へ歸つて貰ひ、僕は責任の最も重きを自覺して当然退學処分を予期し、行李に荷物を詰め之を提げて別所の柏屋別荘へ引き揚げ、今後のことを考えることにした。級長だった岸本君はストライキ中に兄さんが見えて、同君が當時肺を病んでゐるし所詮成業の見込みがないから、引きとり度いとの話であつたためか、ストライキの終末を見ずに東京へ發つてしまつたように記憶してゐる。僕が柏屋に二泊位した日に使

いがあって、教授方の取調べがあるから上田へ戻れという。帰って見ると僕に対しては大滝照太郎・築地宜雄の両先生による調べが、大滝先生の宅で行われた。外の同僚も夫々他の先生により行われたようだ。僕のみは更に川瀬惣次郎先生によって都築旅館で調べられた。僕は一貫して学校をよくするための所信であると答えたように思う。調べが済んで程なく全員無期停学を解かれたが、かくして光輝ある我が上田蚕専の歴史に汚点を印し、一代に傑出した名校長を傷つけた一大不祥事は終末を告げた。その後勝木先生に保証人を願っていた者十人位は揃って体操受持の早野清三郎先生に保証人になって貰った。二年位の時だったか早野先生が僕に耳打ちして「君、やはり針塚先生は豪い方だね、当然と云えるかも知れぬが、この間行われた倫理の試験は（倫理は針塚校長の担当でその時の課題は克己を論ずだっかと思う）君が最高の優秀点だった。チラリと見たんだが」とのことだった。僕の心は呵責に疼いた。

卒業後の思い出と恩義

大正九年三月どうやら卒業さして貰った。同僚は三十名位に減っていた。僕は当分井上先生の助手を勤めさして貰い、九月から京大経済学部^{（注）}の選科へ籍をおく予定をした。当時社会主義を奉ずる学派として河上肇先生が、時代を風靡していた。針塚先生は愛蔵していられた関兼景のひと振りを出して僕に与え、白鞘の表へ「一志如刃」と銘記された。

大正十年の五月だったか、僕は家の都合で京大を退いた。この時も先生に手紙を以て「急ぎはしないが何処か口を求めたい」と

相談した。先生は直ちにご返事を下さって、私の郷里の苫田郡役所に人が要る、針塚先生の名で履歴書を直接郵送せよとのことだったので早速手続した。両三日して郡長から返書があり、「文部視学官時代に厄介になった先生の推挙だから直ちに採用の手続をした。発令次第通知を俟って赴任せよ」とのことだ。僕はこの郡役所で愉快に三年過ごした。隣郡には二回卒の坂田榮雄氏がいた。

その内、原敬内閣の頃だったか、郡役所が廃止に決まったので、いつ迄も田舎に居ると碌なことにならぬと考え、これまで先生に相談して厄介をかけた。この時先生から「東京府に一名欠員があると、一回卒の菅原勇治氏から話がある。自分が近く上京して東京府と直接交渉するから暫く待て」とのことだった。結局先生の肝入りで東京府へ出向になった。赴任して菅原先輩の話を聞くと東京は地元のため競争者があって先生は非常にお骨折下さったとのことだった。当時の産業部長に挨拶した際「針塚先生が自ら見えて自分が全責任を持つから採用してくれ、万一働けない人間だったら直ちに引とるとの言葉だった。懺りやってくれ」と聞かされて、今更先生の温情に深く打たれた。かように先生の校長時代は卒業生の就職につき殆ど自ら陣頭に立たれた。新設の上田蚕専が偶然に伸びたのではない。僕も先生の恩義に応えて常に及ばず乍ら第一人者たることを心がけ、一人一校を背負う決心で終始した。偶々東京府に在職中、勝木先生が其の友人である鐘紡の津田信吾氏からの依頼で「一人欲しいとのことだから君行かぬか」と懇薦された。神戸迄行き津田社長と長い時間話し合った。昭和産

業の後始末がさしかり必要だった様だ。私は入社を保留して帰京し、勝木先生に僕は不向だが唐沢正平氏（蚕二）が適任と思うと推薦して断わった。針塚先生の恩義から之に踏み切れる道理はなかった。

還暦の賀

この思い出は他の人も書かれると思うが、先生の還暦の賀筵が同窓会の主催で上田公会堂で設けられた。学校関係の地方名士も多数参加した。式次も順次進んで先生が此の催しのお札の挨拶に立たれた。その謝辞に於て「本校が今日の如く隆盛となり多くの卒業生が社会のために活動しているのは嬉しい限りで、之れは偏に諸君自らの努力と職員との協力と地元有志の支援に外ならぬ。今日卒業生等が斯る盛筵を持つてくれるのは、感謝で一杯だ。今は亡き」まで言葉が出て後は感激のために湧沲として声をなさない。並み居る者も一同凝然として嗚咽すること暫し。聴がて数分もたったかと思われたが、漸く声を整えて「父がこの席にいてくれたらどんなにか喜んでくれたらう」と結ばれた。先生の来し方の業績も決して淡々たるものではなく、やっと実を結んだ現在を親と共に喜びを願ひ合いたいとの孝心からと思われた。先生は誠に銜わない誠実で純情の丈夫であった。

渋川当時

僕は長野県をやめて渡満した。先生は既に渋川に移られていた。満州から東京へ長期の出張をしたことがあった。その時松井田の某工場を見ての帰途、丁度夏で清流に鮎を釣っている。之を求めてバケツへ氷詰めにして夕方お宅を訪れた。先生は非常に喜んで泊まれと勧められるまゝに厄介になった。当時

御令室は亡く女婿都丸晴治君（蚕七）が同居して居った。御令室が亡くなった日の先生の悲しまれた模様を都丸君から聞いた。先生は非常な悲しみで、まるで子供が大声に泣き悲しむと同様で、その見る目もどうかと思われる位なので、一寸たしなめ気味のこゝとを都丸君が云うと「お前には判らない」と云って号泣して止まる所がない風だったと、密かに話してくれた。翌朝発ち際に先生の机上を見ると碧巖録が半ば開いてあった。断わる僕を押えて先生は態々駅まで送って下さった。

終戦後満州から帰った僕は再び先生の閑居を訪ねた。山口正紀君（糸七）と一緒にしたが、この時都丸君は亡くなって戦争は先生にも幾多の不幸を齎らした様だった。ご様子も元気が衰え、耳も少し遠くなられたかに思われた。お好きな煙草も配給のものを長い真鍮の煙管でやって居られた。持って行った海苔を大麥喜はれた様子だった。此のときも二人で一泊厄介をかけた。夕食の時令息正樹氏を督して山本は酒が好きだからと云って配慮されたことなど忘れ得ぬ恩師の面影である。

結び

針塚先生の思想的背景をなすものは、漢籍によるものであり、特に論語に負う所が大きいと考える。先生が担当された校長時代の倫理に論語を採用された所以である。然し五十過ぎ頃から老子の思想に傾いたのではないか。僕自身先生の揮毫による老子の「知其雄守其雌云云」の一書を持っている。先生が偉大にして平凡人と評される所以はこの辺にあって、処世の上では孔子の訓えを体すると共に、老子の所謂「光を和けて塵に同じうす

る」との思想を、躬を以て実践されたと考える。先生は生まれながらの民主主義者であったが、一面如上の思想が内包されて自然に平民的な姿に流露されたものと思う。

其の実践活動の上では天性闊達（くわんだ）の気性を持たれ、教育者としては稀に見る傑物たりしことは勿論であるが、その行政的手腕に於ても勝れた方であった。又ひと度筆を持てば行文達意にして、珠玉たちどころに成るという風であった。その性格は恬淡にして誠実、純情に加えて若干親分肌をもたれ、まことに玲瓏（れいろう）の人格者であった。

思えばかゝる偉大なる恩師に対して無知若年の頃とは云え、飛んでもない誤りを犯したことは残念と云うも愚かで、誠に生涯の精神的重荷であった。ご存命中先生はもとより、僕もストライキの事には一度も触れたことがなかった。この拙い一文は先生の徳と人となりを偲ぶと共に、四十数年に亘る悔恨と古き懺悔の記録である。

（元満洲榨蚕KK常務取締役）

追憶の数々

（大、九、蚕） 久保田昌人

何人でも老境に入ると過去が偲ばれると思うが、最も楽しかったのは、恐らく腕白盛りの中学時代だろう。今年五月在京の上田中学（現上田高校）の同級会を四十五年振り聞いて、懐旧談に花を咲かせたことは、戦後に於ける愉快な一齣である。

然し生涯印象に残るのは、人生の針路を開き色々指導していただいた人情美豊かで人格識見を兼ね備えた恩師である。

これ等の点から見て公私とも関係の深かった不世出の教育家針塚先生に第一指を屈し度い。

一昨年先生の令婿橋本富寿氏の次女の婚儀に列する機会を得、渋川市中村の針塚家に一夜ご厄介になり、令息正樹氏の案内で、先生の墓参をし、生前ご丹精の柿をいたゞき、ご在世當時を偲び語り合ったことは感慨無量であった。

私が入学したのは大正六年四月（第七期）で、入学式の時針塚校長から懇切な訓辞をいたゞいた。これに対し私が首席入学というのか総代で拙い宣誓の辞を申述べたことは、終生忘れることの出来ない快事である。

其の時流石三十八才で文部省の視学官から、新設された唯一の蚕糸の最高学府たる上田蚕糸専門学校の初代校長に抜擢され、創業の敏腕を遺憾なく發揮されたゞけに、他の追隨を許さぬ偉大な先生であるという感を深からしめた。

偶々一年の三学期に養蚕科の私達のクラスだけが、突然校規肅正の名目の下に、針塚校長並びに老朽教授の排斥ストライキを起したのである。今なら全学連の年中行事で珍しくもないが、當時としては青天の霹靂で、校の内外をあげての大騒ぎとなり、遠近を問わず同窓の先輩も馳せ参じ善後策につき熟議をこらした。これが原因は、一部誤解による至らぬ若さの猪突の発露であったようだ。

私は針塚校長に手交した排斥決議文を書写したので、首魁一人に見られたが、全然さようなことはなく単に書記を勤めたにすぎない。よくもあの温厚な針塚校長にあんな大それた失礼なことをしたものか、盲蛇におじずのたとえの通りだったのである。然し針塚先生の慈愛ある計らいで一人も退学処分を受けず、どうやら三年間の学修了えたのである。

当時修身科では新築金橋教授が論語を講ぜられたが、同教授の退職後は針塚先生自ら論語を教えた。当時としては、論語は教訓として申分ないと思っており、論語の中にある「文質彬彬」として然る後君子たり」ということは、其の時に教えていたゞき感銘深くいつも念頭を去らず、終生処世上の指針としておる。

当時母校の学生数は、僅か二百五、六十名だった故もあるかも知れないが、師弟の美わしい親近感、現在のような駅弁大学の夫れとは霄壤の差があったように思えてならない。

私は製糸科二期の永井栄氏（元片倉製糸工場課長）の肝入りで、桜沢鶴吉氏（元片倉工業取締役総務部長、現在九十才の高齢で熱海市に在住）と今井真平氏（五介翁長男、当時片倉製糸常務取締役、既に故人）の斡旋により、片倉入社が決定し、松本市の同社の一代交配蚕種普及団に勤務、二カ年余りで本社勤務となり、十四カ年間東京に在住したのである。

其の間針塚先生とは時々お目にかゝる機会があった。先生は上京されると卒業生の消息等については親身になって心配され、度々片倉本社にもお見えになり、片倉社長（二代片倉兼太郎翁、今

井五介翁の令弟）今井副社長（今井五介翁、後に社長となり、貴族院議員として活躍）其の他重役などにあい、慈父のように卒業生のことを何くれとなく依頼された。

片倉社長はよく針塚先生を食事に案内されたが、その時はいつもお伴をした。酒は至って弱く、一、二杯で真っ赤になられた。不世出の教育家と実業家との対談を側で拝聴し大分教えられることが多かった。

先生は仲々の能筆健筆家で、帰校されると早速私達にまで礼状を寄越されたのには恐縮した。私が手紙を差上げると、拙い私の手紙を学生に見せ「君等の先輩の久保田君は、能筆家で世に出た男だ。諸君も閑暇を見て習字をせよ」といわれたとか。私の手紙を見せられた後輩の某君が、私に語ったことがある。

先生は趣味として謡曲を習われ、相当上達されたようだ。私が仲人した四女百合子さんの結婚式の時、先生の謡曲で奥さんが仕舞をされた情景は見事で未だに印象に残っている。

なお正村竹亭画伯について南画を習われ、晩年色々お書きになられたことは衆知の通りである。南画は書道と同じだから私にも南画を習うようすゝめられたが、遂に私は画は習わずに現在に及んでいる。

偶々片倉本社にお見えになった時、四女百合子さんを、片倉生命保険会社に在職中の東大出身の法学士某氏に世話されているが、

人物其の他調査してくれとのことだった。私は前々から群馬県出身の義叔父市川乙佑（陸軍主計少尉で退職、戦時中日本タンニン社長在職中急逝）の妻から弟橋本富寿氏（東北大工学部出身、当時沖電気技師）の配偶者の仲人を頼まれておったので、そのお話をしたところ、先生は橋本家のことをよく知っておられ、是非心配してくれと直ぐ候補者の変更になった。そこで當時有名な赤坂の幸楽で見合いということになり、弱冠三十八才でその縁談を成立させたのである。当時若僧の私のような者が、勅任官のお嬢さんのお仲人など荷が重過ぎるので辞退したところは是非やってくれとのこと依頼だった。そこで非才をかえりみずお引受けし、当時懇意にしていた東京における第一流の料亭福井楼で華燭の典を挙げられたのである。結婚式をあげるまで色々打合せのため先生のお宅に再三お伺いし、女婿の裁判官だった中里さんと痛飲して、大分酩酊し阿佐ヶ谷の寓居迄タクシーでお送りいただいたような失敗の記憶がある。

結婚式が済んで数日後針塚先生ご夫妻が、阿佐ヶ谷の茅屋に態々お礼にお出掛けいただいたのには恐縮した。

このように先生は早くから既に民主々義思想の持主で、至て見栄や体裁など飾ることを嫌われ、実質本位であったのは流石である。女婿橋本氏は戦争中日本電気会社に於て、超音波利用による音響測深機の研究に当り、大分その方面では存在を認められておった。先生は戦争中私に「橋本は仲々よい研究をしておるよ」とい

われたことを覚えていた。橋本氏の存在は米国にもよく知られており、指名追放を受けたことからもうなずける。橋本氏は戦後超音波利用による魚群探知機の研究等で工学博士の学位を得、其の方面では世界的の存在で、目下農林省水産庁技官で、其の部下には先生の令孫間庭愛信氏（長女梅子さんの長男、東大工学部卒、工博）もおられ、橋本氏の後継者として活躍しておられるような訳で、若し先生がご在世ならば嘸かしお喜びだろうと推察する。

（元華中蚕糸無錫支店長）

忘れねば思い出さず

（大、一〇、蚕） 中 川 三 郎

（一）

学窓を出てからの四十何年、先生の徳を慕いすべてをその御教導一筋に生き抜いて来た私には、今更改めて先生の追想など、どうしても纏らない。毎日の生活そのものが、私の言う「針塚イズム」の連続だと、自認しているからだ。「忘れねば思い出さず」だ。修身の御講義以外は直接先生の声咳に接し得ることの少なかった当時の在校生としては、柔道部に席を置いた関係と、寒稽古その他で、先生の御風格を仰ぎ見る機会に恵まれた私ではあったが、その私の一生を通じた人生観・人間道を確立形成せしめた御教訓は、先生の全人格から随時随所に迸り出た巧まざる強く温かい「光明」であったことを確信する。形式などには全然捉われず

いつも虚心に真情を披瀝し、言葉少なに人間としての進むべく、履むべき軌範を明示された先生であつた。私如きが「教育指導の極致」など申しては、先生の至徳を冒瀆する虞れさえある。

(二)

時に古聖の言も引用されたが、常に「実践躬行」を旨とせられこれを身を以て体現し、決して他に強要せず、各自の自覚自修に待つと言う態度であつた。それが所謂「孤高」とは反対に、常に私も民庶と共に在つて、静かにその成長を期待し、それを見守つて居られたのである。一見迂路の観が無いでもなかったが、長い眼で見れば、これこそ教育修養の正道だったのである。常住座臥、いつも先生の温かい御心が、私の全身全霊を被んで居て下さるので、過去幾度かの苦難に際会しても、絶対に「人の道」を踏み外さず、勇を鼓して御教訓の実践に邁進出来たのである。限り無い感謝のお礼を申し上げると共に、密かなる誇りを胸奥に刻み込んで居ります。私の居室壁間には勲一等拝受の際のお写真を掲げてあるが、微笑を裏んだその顔は、全くの人間味そのままで、形式や体面・名誉など世俗の関心を完全に消脱された尊いお姿である。

(三)

四十才未満の若さで、上田蚕糸専門学校の初代校長となられた。当時地方の新設校としては、全く異例の堂々たる教授陣容を整え、特に農業部門の学校が、当初から化学・工学担当の教授とその研究設備を持ったことは、誠に驚異的先見の明だったと思う。そ

れ等が先生の「実践躬行」と合体して、上田の校風が産まれた。即ち所謂お世辞や世俗的世渡り術には無関心だが、研究・発明等の分野では、一事實行・不撓不屈の精神を生かして、各方面見るべき業績を挙げて来た。卒業生の学位保持者の多いことも、この種学校としては異数な筈だ。戦後世道人心が激変したので「針塚イズム」の存否が氣になつて問ひ合はせたところ、時の千曲会理事長野口氏から「針塚精神は依然健在で発展を続けている」との報告を受け、嬉しさの余り、当時として分不相応の寄附金をしたことがある。尚前記お写真と列べて次の如き先生筆の額面を掲げてあることを附記する。

対月得江湖之性 捲簾見天地之心

(弁天商會社長)

琴心劍胆

(大、一〇、糸) 小宮山太助

「琴心劍胆」とは、針塚先生から私が頂いた扇面に揮毫せられた文字である。当時(大正十年頃)上田蚕専の校風は、質実剛健を以て内外に鳴りひびいていた。針塚校長は武道を奨励し、柔道・剣道・弓道ともになかなか盛んであつた。平素の稽古はもとより、寒稽古も毎年盛大に行われた。私も剣道部に属して、二十日間の寒稽古に励んだ一人であるが、出席者も多く盛んであつた。針塚先生は、その皆勤者に対し、賞として自身揮毫の扇を授与せ

られたが、私が頂いた扇に書かれた文字が、この「琴心劍胆」であつたのである。

当時迂闊にも私はこの「琴心劍胆」について、先生にお尋ねせずして過ぎて了い、後になって大変残念に思つたのである。この文句を貴重なものに考え出した頃には、既に先生は亡くなつて居られ、従つて私は、この文句の意味も知らないし、又この文句は出典があるのか、或は先生の創作であるのかさえも知らない次第で、甚だ心許ないことである。もしご存じの方があつたら是非教えて頂きたい。

然し私は、この文句に非常に魅力を感じ、自分なりに色々考えた結果、之は劍の極意として知られている「動即不動」或は「靜中動」「動中靜」或は又「懸待一致」など、相通するものであると考え、之は正に劍道の極意であり、男子の本懐であり、又処世の妙諦であると考え、いよいよ貴重な文句であると思うようになった次第である。

針塚先生は、武道を奨励されるにふさわしく、実に毅然たる、劍胆颯爽たる風格の方であつたが、一面あの慈父の如き温顔の示すように、「琴心」の面もあつた方であつた。その現われの一つとして、先生は趣味として觀世流の謡曲をおやりになつた。学校の教職員の有志と共に羽衣会という会を作つて、更級郡東福寺村から高橋清輝という先生を招聘して、毎月稽古をされたのである。その頃私もすめられるままに、義兄の高木三治（糸三）と一緒にこの会に仲間入りして稽古をしたものであるが、その時のメン

バーは、針塚先生を始め阿形・石倉・遠藤・佐藤・林・清水などの諸先生やその夫人方、小林氏などであつたし、会場は横町の宗畔寺であつたと記憶する。

こんなわけで私は、先生に接する機会が比較的多かつただけに、思い出も多いわけだが、とりわけこの「琴心劍胆」には深い印象と関心を持つてゐる次第で、劍道をするにも「琴心劍胆」の心構えであるべきであり、又謡をするにも「琴心劍胆」の心構えであるべきであると解釈するようになり、更に世の中に処するにも「琴心劍胆」の心構えであるべきであると考えようになつた。

誠に針塚先生はこの「琴心劍胆」を身につけられた立派な方であつたと思ふ次第である。と同時に私としては、このようなよい文句を、よい教訓を与えて頂いたことを、大変有難く思つてゐる次第である。

次に、劍道の話が出た以上、忘れることの出来ないのは、和田仙太郎先生のことである。

和田先生は英語・仏語を担当せられた教授であつたが、校友会劍道部長として、非常な熱意を以て劍道を奨励された方である。

寒稽古の時は勿論、平素の稽古の時も、いつも道場に出て来られて、自身では稽古はなされなかつたが、部員の稽古を見て居られて、色々指導激励されたものである。或る時、松本高等學校からの挑戦に応じて、対校試合に遠征した時などは、わざわざ駅まで選手を見送つて激励され、その時縁起の意味で、一同に「から栗」を汽車の窓から下さつたことがあつた。そのご利益かその日の試

合は幸い我が方の大勝利であつて、先生は非常に喜ばれたのであったが、なつかしい思い出である。

和田先生は、剣道と共に刀剣には深い造詣を持たれていたし、書画骨董をも愛好せられた。先生は会津出身で、頑固一徹のようという向きもあったけれども、直情径行で厳格な面もあったが、一面非常に心のやさしい方であつた。私は和田先生も、針塚先生と同じく、「琴心剣胆」の立派な方であつたと思つてゐる。

私は、いまこの拙文を終るに当り、厚き御指導と御愛顧を蒙つた両先生に対し、深く感謝の意を表すると同時に、思慕の念禁ずる能わざるものがある次第であります。

(上田市収入役 剣道教士)

無精ヒゲを剃れ

(大、一〇、糸) 鈴木教吾

修己寮の命名 二年の三学期(大正九年春)「本寮」の寮長に選ばれた。かねがね「本寮」の名称を妙に感じていたので、寮の管理をしていた早野清三郎先生に相談した。「校長先生にお願いして見よ」とのことだったので、数日後恐る恐る校長室に入った。自分は寒稽古を一回も覗いたことすらないし、また多年の「深夜読書」が習性となつて一時間目の授業は、遅刻の連続だった。早野先生から「会議の席上問題になつたぞ」と何回も注意を受けたりしたので、校長室は鬼門中の鬼門だった。然し校長先生は私の途絶

え勝ちなただたどしい口調のお願いを、皆まで聞かず「わかつた、二、三日待つて呉れ給え」と、早口に仰言つた。数日後校長室に呼ばれて「修己寮ではどうか」と申され、その語の出所など簡単に説明された。古典「大学」から取つた語で、人生すべての根源は先ず以て「己れを修めて其の心を正しくするに在り」だからこのことであつた。「己れを修む」は「吾れを教える」の自分の名に一派通ずるので、他の寮幹部にも相談せず即座に「結構です」と申した思い上つた記憶がある。当時岩瀬義夫君(蚕八)等と計り、寮の残飯を利用して豚を飼ひ、製糸科の工場から蛹を買つて鯉を養つていた。それ等自給料理で、新入生の歓迎会を兼ね、寮名披露の寮大会を開いた。席上「修己」の由来出典や寮生活の目的などについて、校長先生から御懇話があつた。この寮名問題をきつかけに、校長先生の温かい慈父の様な御人格に対し、加速度的に引きつけられて行つた。

蚕蠶供養祭 当時年間何千億かの蚕(蛹)の生命を絶つことによつて、輸出の大宗たる蚕糸業が成立し、また斯業の發展を基礎づける科学の研究にも、それ等多数の生命が解剖台上に消えることを思い、宮崎清治君(蚕八)等と協議し、全国に先がけて蚕蠶供養祭を創始しようとして、校長先生の御意見を伺つたのは、大正九年の初夏春蘭乾燥の時期だった。先生は即座に「よいことだ!! やり給え」と御賛成下さつた。それに勢を得て、生徒監の原田先生に御相談して具体案を練り、井上・三谷両先生の格別な援助によつて、殆ど全部の校員から多大の寄附金を頂き、建碑費は十分

整ったが、何分十周年記念式典をひかえての多忙を極めた時期だったので、取り敢えず白木の塔婆に校長先生の墨痕鮮かな「蚕霊供養塔」の書を頂き、創立十周年の一行事として、大正九年十月二十九日半田孝海先生読経の下に第一回供養祭を執行した。因みに石造の正式供養塔は浜香三君（紡三）等によって三年後に完成し、毎年桜花爛漫の候に供養祭を執行していた。

長谷川如是閑・大山郁夫氏問題

創立十周年に因んで、校友会文芸部主催の講演会を開くことにし、文芸部委員の宮崎清治君と私とが中心となって、学校当局にも話し、講師を長谷川如是閑・大山郁夫両氏に決め、それぞれの承諾を得た。当時の両氏は雑誌「我等」に拠る我が国自由主義陣営の最高峯で、当局としてもその言論行動には、細心の注意と警戒とを払っていた。学校当局も始めは無難作に「許可」したが、期日が切迫して来ると、何処からともなく「この二人は危険思想家だ、こんな人物に学校の講堂で講演させるには、校長は辞表を懐にしている覚悟が必要だ」との意見が流れた。教授会は直ちに中止を決議し、文芸部長三谷徹先生から私に中止を厳命された。然し若気の至りだ。「どうしてもここまで来たのですからやります」「危険思想家なんてうそです。これを読んで下さい」など頑張り、三谷先生の机上に「我等」を堆高く積んだりした。期日が明後日と言う夕方、校長先生から「宅の方に来い」との伝言があった。いずれ「中止せよ」だろうと、予め返答の言葉を用意してお伺いしたところ、玄關に立ったまま「長谷川・大山氏の講演は予定通りやり給え、万一間題が起

きても校長としての私が全責任を負い、絶対に部長や諸君に累を及ぼさせないから、安心しておやり」と、強い口調と厳然たる態度で申された。不覚にも涙が無意味に流れたことが忘れられない。然し直ぐ気を取り直して生徒監原田親雄先生宅に駆けつけ、事の仔細を報告して「責任問題は絶対に校長以前で喰い止めて下さい」と強くお願いした。講演会は盛大裡に無事終了し、その夜の講師慰勞会は、私どもの予定を中止し、すべてを校長先生にお願いした。如是閑氏の私宛手紙には

（前略）私共は講演よりも其の後の学生諸君と座談的に意見を闘すのを楽しみにしているのですがそれが出来なかったのが稍残念でした。それも校長さんの好意の為めと思えば致方ありません。尤も校長というものは学生のある種の催には大抵回避的態度を採るものですが貴校の校長さんがそうではなかったのは私共の稍意外に感じたことでした。（中略）学生の間人としての立場を尊重するなんて当りまえのことが中々行われていないので当り前のことが感心されるのです。何れにしても悪いことではありません。その機会を利用して御研究を望みますよ。今度の旅行は非常に親しい感じがします。（炬燵）のせいでしょうか。信州熱がまた何度か昇りました。（後略）とあった。

その後東北大学で「関東東北高等専門学校校弁論大会」という長い名称の会に如是閑を招いたことがある（上田からは故坂路善一君―糸一〇―が出席した）。その時の法文学部教授会は上田のそれ

とは比較にならぬ強硬さで、私に絶対中止を厳命して来た。己むなく小川正孝総長に直接談判に押しかけたら、「一人の長谷川君が大学の講堂で何をしゃべっても、この大学の基礎は微動だにしないよ」と大笑された。私は大いに意を強うして、当日朝まで地下(?)にもぐった。仙台駅に迎えた長谷川氏は、自動車の中で「鈴木君、上田の校長さんはあれから文部省に呼ばれ、口頭で注意されたそうだ。お気の毒だった」と、私の耳にささやいた。そのいきさつについては、私共は勿論他の先生方も、何も知らなかった様だ。

ヒゲを剃れ 石倉先生の御好意で紡績科の臨時雇(?)にして頂き、終日自分の勉強をしていられた時期があった。校長先生は殆ど毎日午後には両手を後に組み、スマートな歩調で、よく構内の植木を見廻り、雑草の注意などをしていられた。そんな時人数の都合で、よく先生方のテニスに加えて貰っていると、「鈴木君はテニスの助手か」とお笑いになったり、冬の私の部屋において「勉強しているなア」と仰言り、私が小さいストーブに石炭をつぐのを眺めながら「君とこの石炭とは同類項だよ」と大笑いされた。人件費でなく消耗費(?)だからでしょうか。東北大学卒業後一カ年近く「囑託」の名でお世話になった。旅行の御挨拶に行くとき「そうか、行って来給え」のお言葉に送られて出口に近づくと、時に「鈴木君、旅費は大丈夫か」と申され、又「ヒゲを剃って、髪に油をつけてね」と申されたこともある。當時それなりに聞き流した形だったが、社会に出て物心がつくに従

い、このお言葉がだんだん強く生きかえり、学生時代からの無精ヒゲを何時の間にか剃り落して、毎朝必ず顔を当ることになり、——当然過ぎることだが——三十年來理髪屋でヒゲを剃ったことが無い。癌の手術で余命いくばくもないと自覚した際にも、毎朝必ず看護婦さんに当って貰い、無精ヒゲの無い顔でこの世を辞する準備を怠らなかつた。謹んでそのことを先生の御霊に御報告申し上げます。

大学時代の学費 当時東北大学法文学部の入学には、高等学校卒業の資格試験に合格した者が、高等学校卒業者と同列に入学試験を受けることになっていた。私はこの資格試験終了後、法文学部事務局に行つて「資格試験に合格したら、その成績を入学試験に準用して下さい」と、全く言語道断な要求を、ねばり強く交渉し、遂に曲げて承諾を得た。やがて資格試験合格証と共に入学試験の期日・科目の通知が来た。校長先生は喜んで下され、石倉先生と共に「入学試験まで一層勉強してね」と励まして下さった。その時私は始めて「成績準用」の報告をした。「そんな無茶なことがあるか、入学不許可に決まっている」「旅費はやるから、必ず、行け」と強く仰言る。「然しあれ程頑張つて固く約束したのだから、今更疑う余地はあるまい」と考え、校長先生と石倉先生の叱咤に近いお言葉にも遂に従わなかつた。幸に「入学許可」の電報が届いたので、校長室に報告に行くとき「それはよかった。今度は学費のことだね」と仰言った。かくて御親戚の伊東胡蝶園に私を運行して、先代伊東栄様と奥様とにお引合わせ下され、即

座に学費給与を決定して頂いた。当時のお手紙を拝見すると、一層新たな感激が沸き、至らなかつた自分の一生を回顧して、一人涙にくれるのである。

勉学の勸奨　かくて無事卒業したが、当時は余り就職運動などしなかつたし、指導教授が「大学に残つて農業経済を研究しよう」と奨めて呉れたが、学費などの問題で踏み切れずに居ると、石倉先生から「就職が決まらないなら、上田に來い、校長とも相談済みだ」のお手紙を頂き、そのまま再び上田にお世話になった。その間針塚先生著「鮮満の蚕糸業」の資料整理と、「本邦農業と農業教育論」の口述をまとめた。両書共にその序文の最後に私の名を上げて「深厚なる謝意を表す」とあるのは、恐縮の限りである。

郡是製糸株式会社への入社も、校長先生が郡是社長遠藤三郎兵衛氏に、東京で直接推薦されたことがきっかけだ。本社に面談に行く時も途中神戸の沖清治さん（糸二）（当時市立生糸検査所長）に会つて、事前に郡是の近況を承れと、石倉先生の紹介状を下さつた。郡是入社後も引続き、いろいろの御注意や御教訓・激励のお手紙を頂いた。「この問題を研究調査せよ」とか、「これに関する論文をまとめて見よ」とか、怠け勝ちの青年を、能く導かれた。こうして或る論文をお目にかけたところ、意外なお賞めに与かり、「地方の講話にも資料として役立たせる」とのお手紙に添えて「小生を一種の蓄音機に御使用被下と思召し」とのお言葉さえあった。又或る論文をお送りしたら、「郡是製糸の事を書いた部

分を切り取り其の他いかがと思ふ処だけを去つて」、某誌に載せたいと思うがどうかとのお手紙を頂いたが、後日その論文を拝読したら、私の原文など及びもつかない立派なものであった。

「農業之日本」と言う養蚕農家相手の雑誌を数年間編集発行したことがあった（戦争末期紙統制で博文館「農業世界」に合併）。その創刊号に先生の論文をお願いしたところ、折り返し「健全なる農村の重要性」と題する二千字余りの論文を、巻紙に毛筆で書いて下さつた。「右御委嘱に従ひ一気呵成に書き降し申候何卒御訂正被下度候」のお手紙が添えてあつた。

お許しを願う機会を失したこと　今日まで一切何人にも口外しなかつた一事を、この機会に申し述べ、謹んで先生の御霊にお詫びいたすことにしたい。或る時郡是製糸の遠藤社長が私を社長室に呼び「東京で上田の針塚先生から、あなたを上田の学校に欲しいと申されました。わたしは本人の意思次第でございますとお答えして参つたがどうか」と言われた。突然のことでもあり、その任でないことは自分が最もよく知つていたので、早速社長を通じてお断わり申し上げた。何故あの時直ぐ上田に飛んで行き、直接御了解を求めなかつたか。その後幾度かお会いしたが、遂にその事には触れず終いだつた。「お申し訳なかつた」と、深く心に秘めて三十年は過ぎた。

（元郡是産業KK社長）

針塚先生・井上先生の新旧校長を

迎えて

(大、一〇、糸) 大塚 重蔵

一冊のアルバム 戦災によって家もろとも持物の殆どすべてを焼いてしまったが、ただ一つ勤務先にあつた為に焼け残った貴重な一冊のアルバム、これも憶えば先生の余徳の致す所か、静かに緘いて見ると今から約二十二年の昔、新旧校長更迭の機会に、針塚・井上の両先生を迎えて催した兵庫千曲会の記念写真が印象的に眼についた。

昭和十四年 霜月半ばの十一月十二日、神戸の秋も漸く深み、六甲・摩耶の連峰も松を彩る楓や蔦で錦織りなす頃のこと、当時の片倉製糸姫路工場場の場長林清市氏(糸一九)の御好意によって、兵庫千曲会を姫路で開くことになり、当時の支会長沖清治氏(糸二)が万端の手筈を整えられた。めずらしく好天に恵まれた秋日和の朝でした。

神戸をあとに播磨路へ 一同は車中の人となる、車窓に映る真帆片帆の眺めを通して遙かにかすむ紀伊路の遠山や淡路の島影、はては舞子の松にかかる磯の波など、天下の絶景を賞でながら、

一行は途中下車駅宝殿についた。

石の宝殿 健脚にまかせて歩むこと暫し、こんもりと松の緑に包まれて、ところどころ白い石肌を出している小高い丘、石の宝殿についた。こはあちこちに石切場があり、岩に打ち込む槌の音が山々にこだまして、遠く近くに聞こえてくる。山間を登れば山の中腹に岩壁をくりぬいた生石神社おおいしがあり、拜殿の横道から頂上に登れば播州平野を一望のもとに収める見晴台がある。途中曾根の松、尾の松などを見物して再び車中の人となり、一路姫路へと向つたのでした。

白鷺城しらさぎじょう

姫路では先ず有名な国宝白鷺城、これは天守閣をはじめ大小幾多の櫓や土塀にいたるまで、往年の姿が比較的良好に保存されているので、今日残っている全国の城の中では代表的なものとされている。徳川末期には酒井氏が居城として領していたもので、城内には芝居の番町皿屋敷で有名なお菊の井戸がある。数々の歴史の跡をしのびながら今宵の宴会場である当地第一流の「あいらく亭」に着いたのでした。

あいらく亭

先ず開宴の前に記念写真を撮ったのですが、これについては沖支会長の憶い出があることを、同氏からお聞きしました。即ちこの会合には当時の神戸生糸検査所長北尾富烈氏を御招待してあったので、なにさまその当時は針塚・井上・北尾の三閣下の御臨席とあって、撮影の際の席次にはひと苦勞せられ、

結局北尾氏を中央におく座席となったのであるが、これは針塚先生の御助言にもとづいたもので、「今日の主客は僕（針塚）ではなく北尾君で、氏は卒業生にとって最も大切なお客さんだから、この人を正客にするように」との御注意があり、沖支会長はこれを正直に受けて席を決められたのであるが、あとになって北尾氏はこの写真を見るたびに、針塚先生にはすまなかったという後悔の念にかられていると、洩らされていた。

然しよく考えてみると、先生のこの御助言は卒業生の就職や待遇等、あらゆることを考慮された大慈悲の御心であると、深く感謝している次第であります。

この集りの中で今なお当支会で顔を合せる人々は沖澤治、大塚重蔵、森西康充（糸一二）、倉橋琢而（糸一〇）、井立喜三郎（糸一三）、叫沢純一（糸一七）、望月弘（糸一九）氏等の七人位となり、又列席の中で他界された方々は針塚・北尾・竹内五之助（糸三）・加美好男（糸三）等の諸氏であって、これ等の方々に対しては遙かに御冥福をお祈りして本稿を閉じることといたします。

（元農林省神戸生糸検査所品位部長）